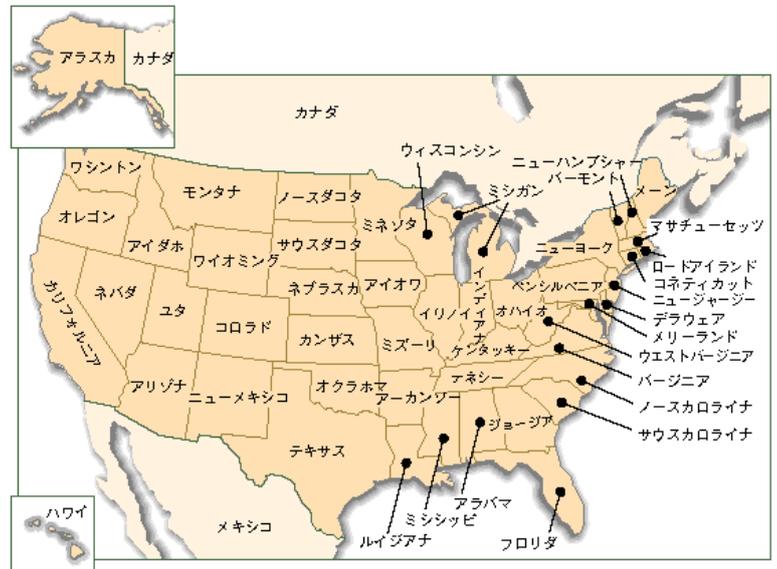


人類と社会・・・現代（1）

ここで現代と呼んでいるのは、ほぼ、20世紀に相当します。二部に分け、(1)では第二次世界大戦までを扱います。20世紀の初頭には第一次世界大戦(1914~1918)があり、この戦いの当事者であった旧世界の西欧列強は敗者も勝者も互いに手酷く傷ついて国力を失い、「**西欧の没落**」といわれる状況になります。代って世界を二分して対立したのはアメリカとソ連です。「**両雄並び立たず**」、結局勝ち残ったのはアメリカでした。

1. アメリカの世紀

絶対王権と宗教的権威が支配する旧弊な西欧を逃れて、啓蒙主義の説く「**人権・自由・平等**」の理念を共にする世界各国から集まった人たちが造り上げた人工国家、それがアメリカ合衆国 (United States of America)です。スペインから派遣された新大陸の発見者であるコロンブスは1492年に西インド諸島に辿り着き、インド大陸を発見したと信じ切っていた（原住民はインディアンと呼ばれた）のですが、イタリアの探検家アメリゴ・ヴェスプッチはこれを独立大陸と主張、ドイツの地図製作者が彼の名に因んでアメリカ大陸と命名し、それが定着しました。



(Google Map)

最初は西欧諸国の草刈り場になって、各国がそれぞれ好きな場所に植民地を建設していましたが、お互いの開拓最前線が衝突すると争いになり、1763年に7年戦争でイギリスが勝ってフランスを退場させます。このまま順調に行けば圧倒的にイギリス発の移民が多いアメリカは、イギリスの植民地のままで今日に至る筈でした。だが、イギリスは当時の社会的思想である「**人権・自由・平等**」を信奉して、植民地の自治体の自由裁量を大幅に認めたために、アメリカの独立を許してしまいます。「**世界の四大愚行の一つ**」と後世の歴史家に指摘される国家政策の失敗です。独立戦争ではフランスやオランダがイギリスの覇権の独走を牽制して独立派を支援したのも大きな要因でした。但し、フランスはアメリカ独立支援で国家財政に負担を掛け過ぎ、フランス革命の引き金を引いて王制が打倒されています。イギリスは辛うじてカナダを手許に残しました。

その後の粗筋は、①**西部大開拓時代**、②**国家分裂の危機であった南北戦争**、③**大陸横断鉄道に続く発明と経済の時代**、④**第一次世界大戦**、⑤**その後の西欧の没落の真空を埋めてのアメリカ経済の大発展とそのバブル崩壊が世界に拡大した世界大恐慌**、⑥**大恐慌が原因となったドイツのナチの台頭と日本のアジア侵略で引き起こされた第二次世界大戦**、⑦**米国の単独覇権に対抗したソ連の世界共産化政策がぶつかり合った米ソ冷戦**、⑧**経済力で冷戦を制してのアメリカの単独覇権確立**、⑨**そして今、中国やインド等の新興国の勃興がアメリカの覇権を浸食して世界は多極化の時代へと近代から現代の歴史はめまぐるしく進展しています。この間、約100年間、世界はアメリカを中心に動いてきました。20世紀はアメリカの世紀と呼んでもよいでしょう。**

アメリカの国土は937万km²で中国959万km²とほぼ同等、ロシアの1707万km²、カナダ998万km²に次ぐ面積です。因みに日本は37万km²でアメリカの約1/25に相当し、順位は世界で61位です。2008年の人口は3.14億人で、世界人口の約1/20に相当します。

出身国別人口順ではイギリス系(含むアイルランド、スコットランド、ウェールズ)アメリカ人が 6110 万人、二位はドイツ系アメリカ人の 4280 万人で、三位はアフリカ系アメリカ人の 3490 万人です。以下、メキシコ系、イタリア系、ポーランド系、フランス系と続きます。

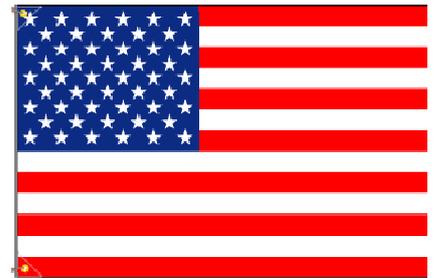
建国の歴史から**英語が事実上の国語**（憲法による規定ではない）となっています。

広大な国土、豊かな自然と資源、先進国最大の人口、進取精神と創造性溢れる国民性、これらは 20 世紀をアメリカの時代とした原動力でした。

では、以下に独立後から第一次世界大戦までのアメリカの歴史の概略を辿ってみましょう。

1・1 西部大開拓時代

前巻「中世から近世」で各国による植民地化は東海岸から始まったことを説明しました。右の国旗の赤白の Stripes は独立当時の 13 州を意味し、青地に白い 50 個の Stars は現在の 50 州を意味します。



1776/7/4、アメリカ独立宣言(The Unanimous Declaration of the thirteen United States of America) が公布されます。この日は今もアメリカの **Independent Day** として祝われています。アメリカは旧世界の各国からの移民を受け入れて急激に成長し続け、未開の開拓地を求めて中部へ、更に西部へと開拓最前線を伸ばします。

米英戦争 (War of 1812)： アメリカ人たちの西進は、当然、新世界の先住民であるアメリカン・インディアンの反撥を招き、激しく抵抗する勢力が出現します。アメリカはこれをイギリスが背後で煽動しているためだと考えました。時あたかもナポレオン戦争の最中で、イギリスは新大陸に勢力を向ける余裕がありません。イギリスの海上封鎖はアメリカにも経済的打撃を与えました。アメリカは火事場泥棒的に憎きイギリスからカナダを奪おうとして始まったのが米英戦争です。

カナダの半分を奪うまではできたのですが、アメリカの甘い見通しと戦争準備不足、国内世論の不一致による反戦勢力の出現等でそれ以上のダメージを与えることができず、返って海軍勢力を損耗し、送り込まれたイギリス軍に首都ワシントン焼き討ちされるなど手痛い反撃を受けます。両者とも経済力も軍事力も疲弊し、1814/12/26、ベルギーにてガン条約(Treaty of Ghent) が締結され、米英戦争は終結しました。

両国が占領した地域は全て戦前の状態に戻されました。何とも無駄な戦争でした。

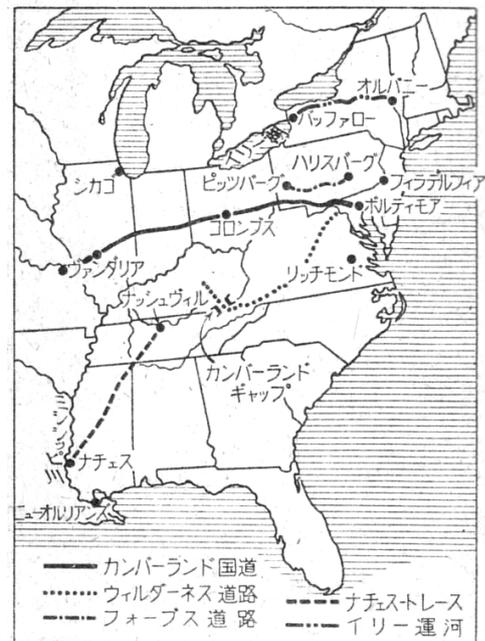
戦後、大統領府を改修する際に、焼け焦げを隠すために真っ白なペンキを塗ったため、大統領官邸はホワイトハウスと呼ばれるようになりました。

この戦争の結果として、戦争中にイギリスの商品の輸入が途絶えたために、アメリカの経済的自立が促され、政治的な独立を果たした「独立戦争」に並んで、経済的な独立を果たしたという意味で「第二次独立戦争」とも呼ばれています。

この戦争の最中に、アメリカ合衆国国歌 **The Star-Spangled Banner** が生まれています。

この戦いでは全体としてアメリカ軍が劣勢でしたが、人手による通信手段しかなかった当時（狼煙通信を有効に使ったローマ帝国やモンゴル帝国より、文明の程度が落ちる！）なので、アメリカ側の最大の勝利は2週間前に終戦協定が成立していた 1815/1/8 のニューオーリンズの戦いです。アメリカ軍の死傷者 71 人、イギリス軍の死傷者と捕虜は約 2,000 人の圧勝で、指揮者のアンドリュー・ジャクソンは大將に昇進、国民的英雄となり、後、第7代合衆国大統領となりました。この戦争でアメリカのカナダに対する野望は潰えましたが、独立戦争とこの戦争で世界の強豪イギリスを2度も打ち破ったことで大いに自信を付け、ヨーロッパの問題に煩わされることなく、国内の問題や西部開拓に専心することができるようになります。

州の役割と合衆国の役割： 建国の経緯からも初期には 13 州の権力が強く、国家は外交、防衛、法律などの各州に共通の課題だけに専念する体制が取られます。ローカルな課題は州の力でやれという訳です。ニューヨーク市長を何期か務めたデウィット・クリントンが早くからハドソン河とイリー湖を結ぶ運河を造れば広域的な経済発展が可能と唱えても連邦政府は全く関心を示さなかったため、彼はニューヨーク州知事に進出し、州の事業としてこの運河の開鑿(かいさく)を行いました。1825 年に完成した全長 363 マルのイリー運河は大西洋と五大湖を結び、東部と西部を近づけました。ニューヨーク州からバッファロー市まで 1 トンの商品を輸送するのにそれまでは 100 ドルと 20 日間を要したのが、運河開通後は 5 ドルと 6 日間に改善されました。こうしてニューヨーク市は東部における交通の要衝となり、ほぼ同じ規模だったフィラデルフィアやボストンを引き離して人口が多い大都市へと成長して行ったのです。



カンバーランド国道とその他の西へのルート
 (『世界の歴史 11』中央文庫 p135)

イリー運河により東部の人たちは西部に容易に移住できるようになり、クリーヴランド、デトロイト、シカゴなどの都市が急激に発展し、イリノイ、インディアナ、ミシガン、オハイオの各州の人口も急増しています。

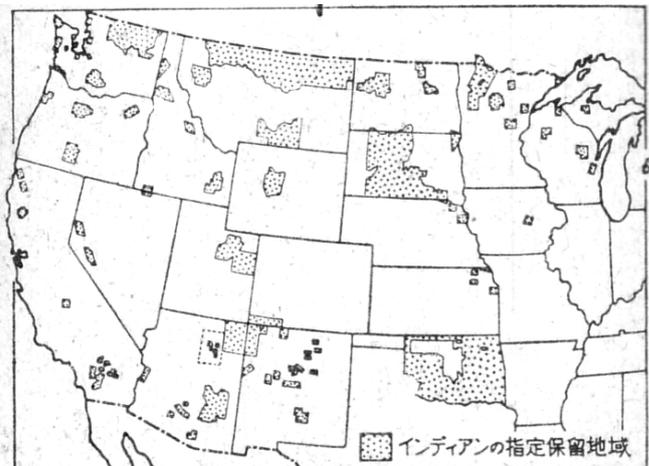
ニューヨーク州が負担した建設費 760 万ドルも運河通航料によって 1837 年には全部償還できています。アパラチア山脈の西側に多くの州ができるようになると、これらと東部を結ぶ道路は国力向上のために必須のものとなり、右図のような各種の幹線道路が連邦政府の手で建設されるようになります。また、西部の人たちは道路を建設する費用を求める必要性から、建国の 13 州の人たちよりも遙かに強力である連邦政府を支持し、州権論の主張が希薄になり、序々に連邦政府が力を付けて行きます。

先住民・アメリカンインディアンとの軋轢： 北米には 2 万年以上前から先住民族が住んでいます。彼等はモンゴロイドに属し、特に日本人と遺伝子面で近親性が高い人たちです。

旧大陸からの移民が持ち込んだ天然痘などの流行病に免疫がなかった彼等は、その時期に約 8～9 割の人たちが死亡して人口を激減させて、民族として弱体化しました。

先住民にとっては、土地は部族の共有財産でした。彼等の行政は部族単位で行われ、民族としての求心力や集中力が備わっていません。そこへ旧大陸から国民国家という規模と集中力がある規範を持ち、土地の個人財産権を常識とする人たちが乗り込んできたのですから、結果は火を見るより明らかでした。

当然、先住民からの反撃があります。フレンチ・インディアン戦争の時にはフランス側についてインディアンは戦後カナダへ移住しました。また、独立戦争の時にイギリス側について戦った先住民たちも、戦後、難を逃れてカナダへ移住しました。アメリカ人たちは先住民に対して、自分たちと対等の人間として一応の敬意を払っていますが、これらの戦争の経緯があるため、互いに同じ土地には住めないと考えていました。



インディアンのための指定保留地 (1883年)
 (『世界の歴史 11』中央文庫 p323)

インディアンの中にも、「文明化した五部族」といわれるチェロキー、クリーク、セミノール、チョクトー、チカソーの五種族は次第にキリスト教に改宗し、主として農業に従事します。彼等は独自の文字も作って

使用しています。

1851～1860 年には連邦政府は多くのインディアン種族と個々に条約を締結して指定保留地域を設けて、年金、衣食の保証などを与える約束をしています。

だが、西部への余りに急激な進出による混乱状態がアメリカ人自身の手でこれらの条約を破らせます。1860年代には白人とインディアンとの武力闘争がピークに達します。スウ族、シャイアン族、アラバホ族による駅馬車襲撃事件や、討伐に向かったカスター連隊の全滅、ジェロニモを指揮者とするアパッチ族の反乱などが有名です。

これらの紛争の原因が明らかにアメリカ人側からの条約侵犯であったので、1869年には文官からなるインディアン委員会が解決に当たり、インディアン指定保留地を維持し、インディアン個人に対して土地を与える政策をとります。1887年にドーズ土地貸与法が制定され、家族長には160エーカー(1エーカー=4,046㎡)、18歳以上の独身者には80エーカーを与えられ(譲渡禁止条件付き)、将来の合衆国市民権の賦与も約束しました。1891年からインディアンに対する義務教育も開始され、同化せぬインディアンも種族としての自治権を与えられ、次第に選挙その他の権利施行でも白人と対等になって行きます。

買収や侵略による領土の拡大： 新大陸にはアメリカ建国前に列強が思い思いに進出していたため、現在の合衆国領土はあちこちが虫食い状態でした。第3代大統領トーマス・ジェファソンは、当時、イギリスと敵対して植民地を守りきれなくなっていたナポレオン統治下のフランスから、1803年に**仏領ルイジアナ**(ルイ王朝に因む命名) 210万km²(ワイオミングからアーカンソーに到る15州にまたがり、現在のアメリカ領土の23%を占める)を1,500万ドルの格安値で購入しました。

西部開拓に伴って、スペイン領フロリダを併合しようという気運が強まります。ここがスペイン領であるため奴隷が逃げ込み、密輸入や海賊や抵抗派インディアンの巢窟となり、その取締を幾ら要求しても統治能力に欠けたスペインはそれに応えられませんでした。

結局、1819年の条約で、スペインは**フロリダ**全部を500万ドルでアメリカに譲渡しました。

テキサスは元来はメキシコ領でしたが、ここにアメリカ人が続々と入植し、人口比がメキシコ人1に対しアメリカ人10にもなりました。メキシコ政府が禁じていた奴隷労働力でプランテーションを行います。遂に堪忍袋の緒を切ったメキシコ軍が攻め寄せると、**アラモ砦**に立て籠もったデイビッド・ボウイ大佐、元下院議員デヴィ・クロケット等約250人は最後まで戦い、1836/3/6、**全滅**します。結局、アメリカ軍がその復讐戦をやり、メキシコからテキサス州を取り上げます。

南部の多くは嘗てメキシコの領土で、元々はスペイン人によって開拓されたのですが、1848年の米墨戦争の結果、ニューメキシコ州とともにメキシコからアメリカに1,500万ドルで割譲され、アメリカ領となっています。カリフォルニア州にスペイン語由来の地名が非常に多いのはそのためです。

1867年には地政学的にも経済性からも維持しきれなくなったロシアから、**アラスカ**を720万ドルで購入しました。雪と氷に閉ざされたアラスカの購入は当時は不評でしたが、アメリカ50州の最大の面積171万km²(日本の4倍)を有し、金鉱を始めとする資源も次々と発見され、戦略的にも重要な地となっています。

若い共和国のこのような領土拡大意欲はどこから生まれたのでしょうか。彼等は**Manifest Destiny**(米国が天から与えられた西半球統治の使命)という使命感を持って西部開拓、及びその後の領土拡大を遂行しています。アメリカ人は(多くのアメリカ人が無邪気に信じているように)無人の荒野を開拓して行ったのではありません。アメリカン・インディアンやスペイン人やメキシコ人が既に長年に亘って居住していた土地を奪って、「弱体な彼等にはこの恵まれた土地を治める権利はない。我々が天命に従って統治するのだ」という論理で現在の領土を我がものとしたのです。

1・2 南北戦争

人類と奴隷制度：人類は有史以来、戦争などで捕虜にした人たちを労働力として使う奴隷制度をもって来ました。ファラオのエジプトで強制労働させられるユダヤ人(出エジプト紀)を始め、古代のギリシャ史やローマ史にも数多くの記述が存在します。

最近では第二次世界大戦後に満州に攻め込んだソ連軍が連行した約109万人の日本人をシベリア開発の強制労働に酷使し、30数万人が死亡した醜い歴史があります。

近代史ではアフリカが奴隷の輸出国(強い種族が他種族を襲って奴隷とし、ヨーロッパ人に売り渡した)となり、15世紀末から19世紀初頭までの300年余りで西アフリカから大西洋を渡ったアフリカ人は約1,200万人に及び、その内、約200万人が大西洋上で命を落としたとされます。イギリスは早くから奴隷貿易に関わったが、やがて社会的に自由民権思想が普及定着し、自由主義、博愛主義を標榜する国に変貌して1834年に大英帝国内で奴隷制度が禁止され、西欧諸国では一番早く奴隷制度から脱却しました。

アメリカの北部の産業化社会に基礎を置く人たちはイギリスに倣って奴隷制度を人道に悖る(もとの)ものと非難しますが、南部の労働集約型のプランテーション農場主たちは奴隷制度から離れては生産を続けることができません。州毎に分けると、奴隷制度を禁ずる自由州と、奴隷制度を容認する奴隷州が1819年時点で何れも11州となって拮抗しました。前出の理由でテキサス州がメキシコから独立した時に、直ちに合衆国の1州に編入されなかったのは、テキサス州が奴隷州になることが確実だったから、自由州側から反対されたためです。

北部の「地下鉄道」と呼ばれる秘密組織は南部から逃亡した奴隷を匿って「奴隷逃亡法」がないカナダへと逃がします。ベストセラー小説「Uncle Tom's Cabin」を書いて多くの人々に深い感銘を与えたストウ夫人もその組織に関わった一人です。

各地で奴隷制度擁護派と奴隷制度反対派による小競り合いやテロが発生し、アメリカはこの問題を巡って騒然とします。こうして奴隷制度是か非か、合衆国の輿論は二つに鋭く分かれ、発火点に近づきます。

国家分裂の危機：新約聖書マルコ 3・24~25に「国が内輪で争えば、その国は成り立たない。家が内輪で争えば、その家は成り立たない」とあります。国家分裂の危機を前に、第16代大統領リンカーンはこの言葉を引いて国民の結束を求める演説をしています。

1860年の大統領選挙で奴隷制度反対を掲げて当選したリンカーンが憲法に定めた翌年の3/4に就任するまでの空白期間に、南部各州は次々と連邦を離脱し、アメリカ連合国を結成しました。引継ぎを待つブキャナン大統領は「大統領は憲法によってこれを防ぐ何の権限も与えられていない」と傍観しています。

この危機に対応するために、リンカーンは2/11に故郷のスプリングフィールドを専用列車で発つ時に「再びこの地に生きて帰れるかどうか判らない」と演説で言い残しています。既に彼は彼の発言を封じようとする暴漢の襲撃や脅迫を何回か受けていました。途中の停車駅でも遊説しながら進みます。

現在のオバマ大統領がその事跡を再現して、大統領に就任したのは有名なエピソードです。

リンカーンは選挙戦中に11歳の少女から「貴方の顔は非常に痩せて見える。もし、顎髭を生やしたら、もっと立派に見えるでしょう。そうすれば婦人たちは夫に貴方に投票するように勧めるでしょう」との手紙を貰っており、早速、返事を出しています。この列車遊説中にウエストフィールドに停車した時、彼は手紙の主、グレース・ベデル嬢を訪ね、列車まで連れてきて彼女にキッスしました。顎髭を生やしたリンカーンは親しみやすい柔和な顔に変わっており、グレース嬢も満足だったようです。

1861/4/12、南軍はサムター要塞に砲撃を加え、南北戦争が始まります。南部連合国のデヴィス大統領は「まるで自殺行為だ。殺人だ。北部の我々の友人を失うことになる」と嘆きます。現地司令官の暴走だったので。北部はこの事件で一致団結し、直ちに義勇兵7.5万人を募集します。6/8までに連合国に11州が加わります。奴隷州のデラウェア、メリーランド、ミズーリは合衆国に留まり、迷ったケンタッキー州も合衆国に留まり、戦争中にカンサス、ネヴァダの2州が加わって23州になります。北部の人口2,200万人に対し、南部の人口950万人(内、奴隷350万人)です。将校の1/4は開戦と共に辞職して南軍に投じます。将校

や兵士の質は南部の方が上でした。

最初の戦闘は首都ワシントンから南西に 30 マイルのブル・ランという小川を挟んで行われ、未訓練の北軍は惨敗し、最初の北部司令官は更迭されました。合衆国側はこの敗戦で長期戦を覚悟し、50 万人の兵士を 3 年間徴集する決定を行い、優勢な海軍力で南部の港を封鎖し、経済的に圧力を加えました。

一方、西部ではグラント将軍の強引な作戦が効を奏して南軍は混乱し、北軍が南部を東西に二分しました。東部では 1862/4 にリー将軍の巧みな作戦に引っ掛かって北軍が敗退します。同年 9 月に北上してくる南軍と北軍が正面衝突し、両軍共に大きな損害を受けて、一時、南軍の北進が食い止められました。この時期を捉えて、1862/9/22 にリンカーンは「奴隷解放予備宣言」を発表しました。本格的な「奴隷解放宣言」は憲法改定を行って、1865 年に発効しています。

リンカーンの奴隷解放宣言は国際関係にも好影響を与え、それまでとかく南部に同情的であったイギリスでも、各地でアメリカの奴隷解放を喜ぶ集会が開かれています。フランス、スペインからの干渉も消えて行きました。

1863/7/1~3 に行われたゲティスバーグの戦いは南北両軍の総力を挙げての激戦で、両軍の戦死者はそれぞれ 23,000 人を越え、この関ヶ原とでも言うべき戦いで遂に南軍は退却を余儀なくさせられました。戦場跡を国立墓地として鎮魂式に訪れたリンカーンは低い声で 2 分間の短い演説を行います。

Four score and seven years ago our fathers brought forth on this continent, a new nation, conceived in liberty, and dedicated to the proposition that all men are created equal.

Now we are engaged in a great civil war, testing whether that nation, or any nation so conceived and so dedicated, can long endure. We are met on a great battlefield of that war. We have come to dedicate a portion of that field, as a final resting place for those who here gave their lives that that nation might live. It is altogether fitting and proper that we should do this.

But in a larger sense, we cannot dedicate - we cannot consecrate - we cannot hallow - this ground. The brave men, living and dead, who struggled here, have consecrated it, far above our poor power to add or detract. The world will little note, nor long remember, what we say here, but it can never forget what they did here. It is for us the living, rather, to be dedicated here to the unfinished work which they who fought here have thus far so nobly advanced. It is rather for us to be here dedicated to the great task remaining before us - that from these honored dead we take increased devotion to that cause for which they gave the last full measure of devotion - that we here highly resolve that these dead shall not have died in vain - that this nation, under God, shall have a new birth of freedom - and that government of the people, by the people, for the people, shall not perish from the earth.

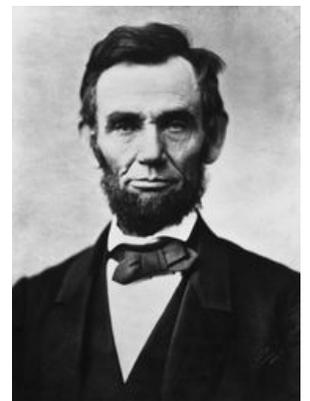
Abraham Lincoln - November 19, 1863

これは、合衆国の民主主義の精神を、最もよく表現した演説として有名です。

1864 年の選挙でリンカーンは圧倒的多数で再選され、1865/3/4 に二期目の大統領に就任し、寛容の精神をもって終戦の処理に当たろうと演説します。

その僅か 5 日後、ワシントン市のフォード劇場で観劇中に、リンカーンは南部出身の著名な俳優ウィルス・ブースに狙撃され、死去しました。

アポトマックスにおける南軍のリー将軍の降伏はその 1 ヶ月後のことでした。グラント将軍が南軍の将兵がその馬に乗って故郷に帰ることを許したのも、リンカーンの演説の精神を反映したものです。歴史上も稀に見る 4 年間の激しい内戦はこのようにして終わりました。アメリカは国家分裂の危機から救われ、奴隷制度を廃止することができたのです。



終戦時の合衆国軍の兵力は約 105 万人、戦死者約 67,000 人、戦傷死者約 43,000 人、戦病死者約 4,500 人で、医療設備が極めて悪かった事情が窺えます。

経済を大きく前進させた南北戦争： 合衆国が戦時中にとった財政政策は戦後も継続され、社会、経済、政治に大きな影響を及ぼします。従来は南部の反対(輸入に頼る経済体系) で実行できなかった**高率の保護関税**が実行され、平均約 47%の関税法が約 30 年間続けられ、輸入品に代わって国内製品の生産が大いに伸び、アメリカ産業資本主義の確立に役立っています。

南北戦争が始まった時点では 29 州にそれぞれの州法による約 1,600 の銀行と約 7,000 種類の紙幣が発行されていましたが、新しい**国立銀行法**により金融制度も紙幣も現在の姿に統一されて行きます。

南北の均衡が破られるのを恐れて、南部諸州が反対していた**自営農地法**が 1862 年に制定されています。これは 21 歳以上の一家の長に対して、160 エカの土地を無償で与えるもので、西部の開拓、農業の発展に大いに貢献しました。これは自営農業者を増やす政策であるため、奴隷労働力に依存する南部は反対でした。産業革命はここで完成し、**アメリカ経済は完全に商業資本主義から産業資本主義へと転換を遂げたのです。**

1・3 南北戦争前後の急成長期

鉄道の発展、大陸横断鉄道の開通： 南北戦争中、交通機関、特に鉄道は戦争遂行の必要もあって急速に伸び、ニューヨーク・セントルイス間やサラマンカ・シンシナティ間の鉄道は戦争中に新設されています。

1855 年当時には既に東部の鉄道がミズーリ川を越えてオマハまで達していました。これを西海岸まで延伸させよとの請願が引きも切らず、これに応じて太平洋鉄道法が 1862 年に制定されます。リンカーンの業績の一つです。国策鉄道会社として西から敷設するセントラルパシフィック鉄道会社と、東から敷設するユニオンパシフィック

鉄道会社が設立され、両側から競争で鉄道建設が進みます。東からのユニオンパシフィックは大草原なので 1 日で 10 マイル(16 km)敷設したとの記録が残されています。問題はインディアンの指定保留地を通ったためにスー族などと激しいトラブルを起こしました。西からのセントラルパシフィックは山脈を通るために開発されたばかりのニトログリセリンを使って作業効率を高めますが、事故が多発して工法を変えざるを得なくなっています。これは後ほど、ノーベルが安全なダイナマイトを発明して解決した問題でした。1869/5/10、西からは 1,087 マイル、東からは 690 マイルの大陸横断鉄道は完成しました。これは広大なアメリカ合衆国の連邦としての統合を強化する意図もあります。岩倉使節団(1871～1873 年) もこの列車に乗ってアメリカの広大さを感じています。

その後、アメリカには右上図のように縦横に鉄道網が張り巡らされ、1920 年頃には鉄道マイル数は延べ 25 万マイルを越え、全盛期を迎えます。

南北戦争後の鉄道の発達には軌道のゲージ巾が統一(4 呎 8.5 寸)されたことと、1869 年のジョージ・ウエスティングハウスによるエア・ブレーキの発明によるといわれます。同じ時期にジョージ・プルマンが寝台車、食堂車、展望車などを製作しています。右図は私の撮影によるマレイ機関車ですが、日本の



1920年のアメリカ鉄道網

(「世界の歴史 11」中央文庫 p278)



フォード博物館のマレイ機関車

D51 機関車などの優しさとは違った堂々たる威圧感を感じるでしょう。動輪 6 軸で高圧・低圧 2 段膨張式高効率スチームエンジンの巨大機関車です。この頃が蒸気機関車の技術の最盛期であり、その後は技術発展がストップしています。どのような技術分野にもピークがあるものです。

1920 年以後は自動車の普及と、航空機の急速な進歩により、鉄道の利用は後退しております。しかし、近年、地球温暖化ガス削減の観点から鉄道のエネルギー効率の高さ(同じ人・km で鉄道は自動車の 1/8 のエネルギー消費量) や利便性が見直されつつあり、世界各地で大都市間高速鉄道の建設(米国で 11 ヶ所計画中、他) や、大量輸送貨物の自動車から鉄道への Modal Shift(輸送形態の移動) が進行中です。

最後の西部開拓： アメリカは東部から始まって西部へと開拓が進みましたが、南北戦争直前の 1860 年には Frontier Line(開拓最前線) はネブラスカ、カンサス東部、テキサス中央部付近、アメリカ全土の丁度中央部当たり位置していました。それが 1890 年頃には西海岸まで全て開拓し尽くされています。「もはやフロンティアなし！」です。

それまでの西部開拓は農業開拓者によって荒野が文明化されるという開拓モデルでした。だが、最後の西部開拓はまずゴールドラッシュに群がる一攫千金の鉱山開拓者、次いで牧畜業者によって行われ、最後に農民が加わっています。その理由は、この地域は年間降雨量が少なく、草は生えてももっと水を必要とする普通の農業には適した環境ではなかったからです。その後、風車による地下水汲み上げによる灌漑で農業地帯として開拓されますが、最初はなかなか、農業をやるきっかけが掴めませんでした。

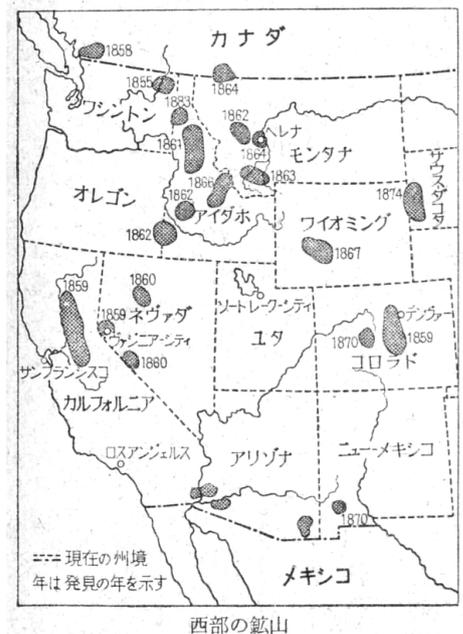
ゴールドラッシュ： 1848 年に米墨戦争の結果、カルフォルニアがアメリカ領土となり、前後してアメリカン川で砂金が発見されて空前のゴールドラッシュが沸き起こりました。ある歴史家などは「その頃から革命が起こらなくなったのは、金を求めてヨーロッパ中から人がいなくなったからだ」と言うほどのブームです。記録を見ると、農民、労働者、商人、乞食や牧師までもが、一攫千金を夢見て新大陸を目指したことが記されています。この時に集まった鉱夫たちを 49er(Forty Niner) と呼びます。

後に黒船来航で日米和親条約の締結に活躍した土佐の漂流民のジョン万次郎がカルフォルニアに採金に来た唯一の日本人とされています。また、金を掘っていると従来のズボンでは直ぐに破れてしまうので、リーバイ・ストラウスがジーンズを発明・販売しています。

1852 年にはカルフォルニアの人口は 20 万人を越すまでに急増して州に昇格しました。その後、金鉱や銀鉱がロッキー山脈地帯にも右図のように続々と発見され、南北戦争中も西部への移住者は絶えることがありませんでした。

このように西部の人口が増加することは東部の工業にとっては国内市場の拡大を意味し、大陸横断鉄道の速やかな完成が要求されたのです。金や銀の採掘で成功した者は東部の成金にも劣らぬ贅沢な生活をしました。だが、個人や仲間内だけで採掘できるのは、一部分の鉱脈の露頭だけです。地下に掘り進む鉱山開拓は大資本でなければ手に負えません。結局、大企業の鉱山業者が本当の利益を獲得しています。また、山堀りの人々たちより、駅馬車や貨物輸送業者が確実に利益を挙げたと言います。

カウボーイの全盛期： 1866 年、テキサスのカウボーイたちが約 26 万頭の牛を追って北上し、無法者やインディアンの妨害を排除し、通過する農地の農民に文句を言われながら、ミズーリ州のセダリアまで運んで来ました。相当の損害があったようですが、事業としては一応成功したので、このビジネスモデルがその後



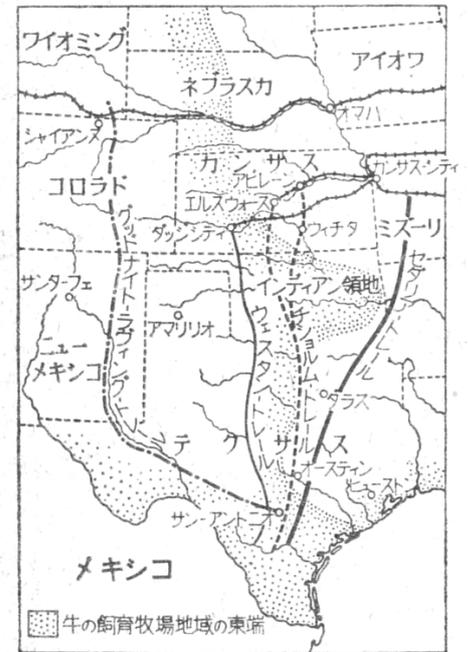
(「世界の歴史 11」中央文庫 p303)

約 20 年間踏襲されることになりました。

大平原は国有地でしたから、彼等は土地の使用権を主張しました。後に農民たちが彼等の牧場地帯に正規の手続きを経て定着すると、牧畜業者と農民は土地の使用権を巡って争いが多発しました。1880年代には景気が回復期に入り、ヨーロッパや東部での牛肉の需要が急増し、5,000ドルの投資が4年間で45,000ドルになるブームとなり、東部やイギリスの牧畜業者も争って西部にやって来ました。急激な過剰投資は供給過剰を生み、牧畜業は1880年代末期には俄に衰退しました。加えて1885年と1887年の厳冬で数万頭の牛が倒れ、その損害から牧畜業は立ち直ることができず、カウボーイ天国は約20年間で短い繁栄期を終えました。

その後の牧畜は Long Drive ではなく、今日見るような土地、土地に根ざした小規模な農業式の牧畜に代わって行きます。

このように、新たに開拓された西部フロンティア社会は、金鉱掘り、開墾する農民、鉄道建設の労働者、牛を追うカウボーイ、裸馬で疾駆するインディアンが混然とする混乱した無法状態を経験しています。



(「世界の歴史 11」中央文庫 p315)

1・4 産業資本家の勃興と大企業の政治支配

製鉄業のカーネギー：炭素含有量が多い脆い鉄(Iron)に酸素を吹き込んで炭酸ガスとして炭素を除去して低炭素で強靱な鋼鉄(Steel)にするベッセマー製鋼法が実用化されたのは1866年です。以来、アメリカの鋼鉄業は急速に発展し、20世紀初頭にはイギリスを追い越して世界の生産量を上げるに到りました。この推進役アンドリュー・カーネギーは貧しいスコットランド移民の子として生まれ、紡績工場の工員から鉄道会社の電信技手となり、次いでペンシルバニア鉄道に入り、鉄道の合同に実力を発揮しますが、1873年に製鉄業に入ります。原料や製品の輸送に使った鉄道会社から多額のリベートを受けて価格低減の原資として同業他社を価格面で圧倒し、立ち行かなくなった同業他社を吸収合併して1901年には巨大産業 US Steel となります。

石油業のロックフェラー：同じ時期に石油がアメリカの巨大産業に浮上します。それまで石油の存在は知られていましたが、灯火の燃料に使用できると判ったのは1855年のことです。1870年代にはアメリカの輸出品の第4位を占めるまでに成長し、急速に捕鯨による鯨油を駆逐しました。ペリー提督が幕府に開国を強制したのは1853年で、アメリカの捕鯨船が日本に寄港できるようにするためでしたから不思議な因縁を感じます。ジョン・ロックフェラーはクリーヴランドの仲買商店の店員でしたが、この石油に大きな将来性を見出し、数年後には同地の25の石油精油所の内20を手に入れ、1870年にオハイオ・スタンダード石油会社を設立します。彼は石油探索技術を磨き上げ、健全な財政政策を実行して資金力を強めて同業者を買収する水平統合と共に、石油倉庫業、石油樽の製造、送油管製造等の垂直統合も進め、販売網を整備して消費者に直接販売します。1882年にはスタンダード石油トラストが形成され、彼が狙った石油独占体制がほぼ完成しました。

産業資本家の功罪：産業革命の結果、これまでの南部のプランター経営者や北部の大商人に代わって、産業資本家や金融資本家が勢力をもつ時代になりました。鉄道業、製肉缶詰業、製粉業、紡績業、タバコ業など多方面に及びます。それらの資本家たちの中には全くの貧乏人や下層サラリーマンからその地位を獲得する人たちが多数いました。これらの成功者たちは、自分の成功はアメリカ伝統の勤勉、節約によるものだと固く信じています。ピューリタリズム(新教徒)的な労働美德観念がこの時代まで続いていたのです。だから、

金儲けがてきなかつた人たちは、怠惰で浪費家で知的能力に欠けているのだと考えます。

保守派の人々は経済学者アダム・スミスの自由放任思想を信奉し、賃金を引き上げるために労働者が組合を結成するとか、経済活動を政府が統制するようなことは自然の法則に反すると解釈していました。

都市の発達と都市問題の深刻化：南北戦争後のニューヨーク市では約 10 万の家族が貧民窟で惨めな生活を余儀なくされており、内、2 万家族は地下室に住んでいました。ボストンでも全市民の 5 分の 1 は貧民窟で暮らしていました。1865～1890 年はマーク・トゥエインが「金箔時代」と皮肉ったように、成金になるのにこの時代ほど速い時代は他に例を見ないし、都市生活者の貧富の格差と、都市と農村との格差が著しく激しくなった時代でした。

1860～1900 年の間にアメリカの人口は約 3,100 万人から約 7,600 万人に増加しており、その内、約 1,900 万人が主にドイツ、アイルランド、スカンジナビアからの移民でした。注目すべきは、平均年 30 万人であった移民が 1890 年代になって急増して、年約 88 万人になり、北欧や西欧諸国からの移民が減少し、東欧と南欧からの移民が主になります。1890 年代に最も多かった移民はイタリアからの 65 万人、次いでロシアの 60 万人、オーストリア 59 万人等です。これまでアメリカ社会はアイルランド移民以外はプロテスタント教徒でしたが、新しい移民はカソリック教徒やギリシャ正教徒たちで、このことが宗教面で比較的均質であったアメリカ社会に大きな影響を与えています。

既に「もはやフロンティアなし！」の時代ですから、彼等は西部に向かうことができず、主に東部の工業地帯の不熟練労働者となりました。政治的には都市の政治ボスに金権で投票を買われる時代が出現します。

特に 1869～1877 年に第 18 代大統領となった嘗ての北軍司令官のグラント將軍の治世は政治倫理面では最悪の時代として記憶されています。彼の個人補佐官が絡む巨額脱税のウイスキー・リング事件、陸軍省長官の売官収賄事件、鉄道建設会社の議員買収事件、議会がお手盛りで大統領の俸給を 2 倍、自分たちの歳費を 1.5 倍にして非難を浴びるなど、問題は枚挙に暇ありませんでした。結局、彼は荒廃した南部の再建および先住民対策に失敗し、支持が急落しています。

南北戦争後から 20 世紀初頭までのアメリカの政治は、社会の支配階級が自己の利益と繁栄のみを願って政治権力が恣意的に行使され、汚職が蔓延し、**政治と大産業資本が結びついた金権政治がアメリカ社会を支配した時代**でありました。

1・5 発明の時代

1790 年のアメリカ合衆国第一回議会で**著作権**と**特許権**の 2 制度が確立されています。個人の創意工夫を尊重し保護する精神が徹底している国家だといえます。この制度に守られて、アメリカの発明は他国より著しく多いのが特徴です。

また、アメリカは常に労働力が不足する状態であったため、省力化に関する発明が多い傾向があります。特に省力化に大きく貢献したのは 1831 年のサイラス・マコーミックによる**穀物の刈取機**と、1845 年のエリアス・ハウによる**縫製ミシン**の発明でしょう。

広大な国土に情報を瞬時に流す**電信**は画家として成功し、大學の美術教授をしていたサミュエル・モールスの 1832 年の発明です。その実用化は 1844 年のワシントン・アナポリス間です。1858 年には大西洋横断の海底電信のテストが行われます。ウエスタン・ユニオン電信会社は大陸横断電信線を敷設し、1861 年には遂に開通します。それまでニューヨーク・サンフランシスコ間で 1 ヶ月かかっていた郵便を若者が疾駆する馬で 15 日間で届けるようになったポニー・エクスプレスは、このため、僅か 1 年半で廃止になっています。

1830 年には 16 歳のサミュエル・コルトが**連発式ピストル**を発明し、アメリカとイギリスの特許権を取得しています。この頃から始まった大平原開拓で、コルトの連発銃がなければ 20 本の矢を持ち歩くインディアンの早撃ちを制することはできませんでした。

1836年にはチャールズ・グッドイヤーが**タイヤに使う硬質ゴム**の製造に成功し、1846年にはリチャード・ホウが**輪転印刷機**を発明して新聞の発達に貢献しています。

1870年にはアレキサンダー・グラハム・ベルが**電話**を発明し、10年後には約50万台の電話機が各都市に備え付けられています。

ビジネスの発展に寄与した発明としては、1868年ショールスによる**タイプライター**、1879年のリティーによる**現金出納機**、1891年のバロースによる**計算機**などが挙げられます。

産業と日常生活に革新的進歩を与えたのはチャールズ・ブラッシュの**アークランプ**、トマス・エディソンの**白熱電球**と**発電機**の改良があります。1900年には全米で2,774カ所の**発電所**が作られ、**市街電車**や**エレベーター**なども実用化されています。

1870年代にヨーロッパで発明された**内燃機関**は1890年代にアメリカで急速に改良され、1900年には幾つかの自動車会社が年間約4,000台の**自動車**を製造しています。自動車工業の発展は、やがて20世紀の重要な産業となる可能性を秘めていました。

以上で現代で世界に覇を唱えたアメリカを知るために、その建国からの歴史をおさらいしました。ここから現代史に入ります。

第1章で参考にした文献：

「世界の歴史 11／新大陸と太平洋」中屋健一／中央文庫

Wikipedia の関連記事

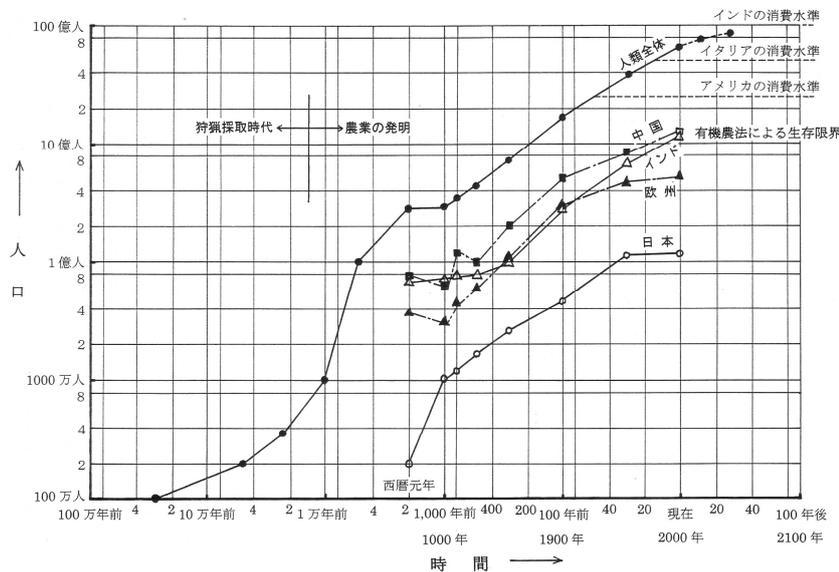
2. より良き社会を求めて試行錯誤する人類

これから人類史上最も波瀾万丈の現代史に入ります。これまではいろんなイベントやエピソードの集積として歴史を描いてきましたが、現代史は俗に言う「風が吹けば、桶屋が儲かる」ではありませんが、複数の事件の相互間の関連性が非常に強く、これらを孤立した事件として見ていると「木を見て森を見ず」で、全体像を見失ってしまいます。そこで、このテキストでは型破りですが、この章では ①現代史の全体像を把握するための粗筋(あらすじ)、②その歴史から人類は何を学んだか、を述べ、3章以下で ③歴史を形作るイベントやエピソード、を述べる3部構成で説明したいと思います。

そうすることにより、現実の歴史が何故そのように展開したかの過程を正しく理解できるのではないかと思います。推理小説が最初に種明かしをしてから語り始めるようなもので、小説としては推理の面白みを奪っていますが、歴史としてはそれを動かす力の正体が明らかになって、理解が深まるのではないのでしょうか。

テキスト「サルと別れた日」の終わり頃に挙げた右の図表を見てください。人類の人口は、指数関数的に増加しています。私は人類の人口が増加して、過去には孤立して存在していた社会

がお互いに干渉し合うようになったから、歴史の動きが早く、複雑に、大規模になったのだと考えています。さて、航海技術の発達と共に世界は狭くなり、ヨーロッパ社会、インド社会、アジア社会、アフリカ社会などの独立文明社会間の緩衝地帯が無くなり始め、力の強い西欧社会が弱いその他の社会を征服する形で干渉が段々強くなり、遂には植民地という形の侵略が行われています。



2・1 近代から現代への歴史の枠組み

西欧の侵略： 侵略したのはヨーロッパ社会、侵略を受けたのは南北アメリカ大陸、インド、アジアや太平洋諸島、アフリカなどです。侵略の第一波は時期的には約 600 年前、世界人口が約 4 億人（2014 年現在 72 億人）であった大航海時代で、最初の主役はポルトガルとスペインですが、そこに当時の世界の工場として力をつけてきた小国オランダが続きます。

イギリスの覇権： やがて農業革命と 1760～1830 年代の産業革命で力をつけ、世界の工場となったイギリスが北米を制しますが、立憲君主制という形で王制を形骸化し、人民が主権を持つ自由民権思想を普及させ、自ら撒いた思想が原因となって自由主義の国アメリカを独立させてしまいます。方向転換したイギリスは 200 数十年前からインド、アフリカ、オセアニア諸国を始めとする膨大な植民地帝国を築き、フランス、ドイツ、オランダなどのヨーロッパ諸国がそれに続く帝国主義時代が約 100 年前の 20 世紀初頭まで続きます。イギリスの世界の工場体制も 1870 年代には終わりを告げます。ドイツ、フランス、アメリカが次々と追いついてきたからです。それでもイギリスは産業立国から金融立国に軸足を移しながら、ポンドを基軸通貨 (Key Currency：貿易決済通貨) とする金融覇権を第一次世界大戦後まで維持します。この時代の世界の人口は 10 億人を超えました。

第一次世界大戦： ヨーロッパ諸国の利害が対立するようになり、1914～1918年の第一次世界大戦で新興国ドイツがイギリス、フランスを相手に戦い、ドイツが破れて莫大な賠償金を求められますが、結局は払いきれません。勝ったイギリス、フランスも大きく国力を損傷し、事実上ヨーロッパ列強諸国は共倒れ状態の「**西洋の没落**」(シュペングラー著)となり、ドイツとロシアの帝政は崩壊して中世から綿々と続いた君主制は廃絶されます。列強で統帥権を持つ君主制(天皇制)が残るのは、実質的に参戦せずに漁夫の利だけ得た大日本帝国だけとなります。この戦いで戦時物資の供給者となった**アメリカが世界の工場**となります。

世界大恐慌： こうして世界最大の経済大国となったアメリカが引き起こした1929年の株式バブルの崩壊より発した恐慌が全世界を巻き込んで世界大恐慌となり、各国の経済活動は悲惨な状態になります。イギリスでは選挙区の意向に敏感な国会議員たちが他国の製品が輸入されるから自国の産業が苦境に立っているのだと考え、「イギリス人はイギリス製品を使おう」という「**自国経済圏主義**」が巾を利かして、輸入規制と輸出に有利なようにポンドの為替レートを低めに操作します。この「**近隣国窮乏化**」戦略は相手国に同じ反応を生み、瞬く間に「**経済の自国主義**」は世界中に伝搬し、事実上、**世界経済は幾つかの経済ブロックに分裂し**、世界経済の規模は急速に縮小しました。後に、この近隣国窮乏化と経済ブロック化は絶対にやってはいけないこととして人類の叡智のリストに加えられます。

ドイツと日本の侵略： 世界大恐慌の中からドイツ国民の不満に乗って勢力を伸ばしたドイツのナチスは「世界に冠たる優秀なドイツ民族は生存のために必要な生存圏を獲得する権利がある」という強者の論理のもとに、経済規模を拡大して問題解決をしようとしてポーランド等に侵略を開始します。

日本も天皇の統帥権を私物化した軍の参謀本部の事実上の独裁体制のもとに、経済苦境を解決するために資源を得ようとして「**大東亜共栄圏**」の美名の下に大陸から東南アジアへと侵略します。結局、この段階では、各国は他国との間に貿易障壁を築き、それぞれが孤立した経済ブロックで生きようとしたのです。

第二次世界大戦： 経済的な苦境の打開を他国への無法な侵略に求めるドイツと日本に対し、それを阻止せんとする連合国との間で1939～41年に第二次世界大戦が勃発します。戦いは4～5年間に及び、ドイツと日本が一時的な占領地から追い戻され、最後は本土を徹底的に空爆されて主要都市は瓦礫と化し、日本は2発の原爆まで落とされて悲惨な敗戦を迎えます。

しかし、イギリスもドイツの空爆に荒らされ、フランスは一時ドイツに占領され、負けたドイツは何もかも失って国土をソ連と西側諸国によって二分割されます。これらヨーロッパの3大強国は第一次大戦後の国力疲弊を再び味わい、遂に中世以来、保持してきた世界のキープレイヤーの地位から脱落します。

アメリカの覇権確立： 荒廃した戦後の世界に物資を供給できる能力がある国はアメリカしか残っていませんでした。**アメリカは世界の工場**となり、その絶大な経済力を背景にした政治力と強大な軍事力により、**アメリカの世界覇権**が成立します。アメリカは産業立国で成功してほぼ完全雇用状態となり、世界の英才たちを自国に引きつけて科学技術や文化の面でもリーダーシップをとり、世界の人々が羨望の目で見詰める「**アメリカ人が最も幸福な30年間**」が出現します。基軸通貨はポンドからドルに移り、現在に至ります。アメリカが最も輝いた時代でした。

東西冷戦： 連合国側に在ったソ連が世界を共産化しようと動きだし、1949年、中国が共産化します。1950年代から1960年代にかけては、ソ連の官僚の中央集権による計画経済は非常に効率良く作動して成果を挙げました。それに対して、個別の企業が自由意思で活動する自由主義経済では、何れ追いつかれ、追い越されるのではないかと恐れられた時期もありました。

アメリカは自由主義・民主主義を守るため西側諸国の盟主となってこれに対抗し、「**自由主義**」対「**共産主義**」

のイデオロギーに基づく体制間の冷戦が始まります。敗戦国である西ドイツも日本も共産主義陣営と対抗するために西側諸国の経済圏に編入され、工業力の再建も許されました。世界恐慌時に経済圏が分裂したりせず、始めから世界共同の経済圏が維持されておれば、第二次世界大戦は必要なかったのです。

西側諸国の資源と技術に自由にアクセスできるようになった日本は、持ち前の勤勉と教育程度の高さで、みるみるアメリカに追いつき、敗戦後 10 年間くらいは粗悪品の代名詞であった「made in Japan」が、いつしか世界最高品質を意味するようになり、1980 年代、日本は押しも押されもせぬ世界の工場となりました。

こうして日本は以前なら夢想だにできなかった世界第二位の GDP にまで駆け上がりました。この時期にグローバル経済の恩恵を最も享受したのは日本でした。

右の 2 枚の図は国別の GDP(国内総生産: Gross Domestic Product) を 1990 年を基準年として物価(購買力平価)の影響を平準化して示したものです。

世界の平均値に対し、日本の 1 人当たり GDP がどのように変化したかを上図が示しています。それまでは世界の平均値前後で停滞していたのに、1950 年を起点にして 1990 年まで一気に駆け上がっている様相が明確に見て取れます。

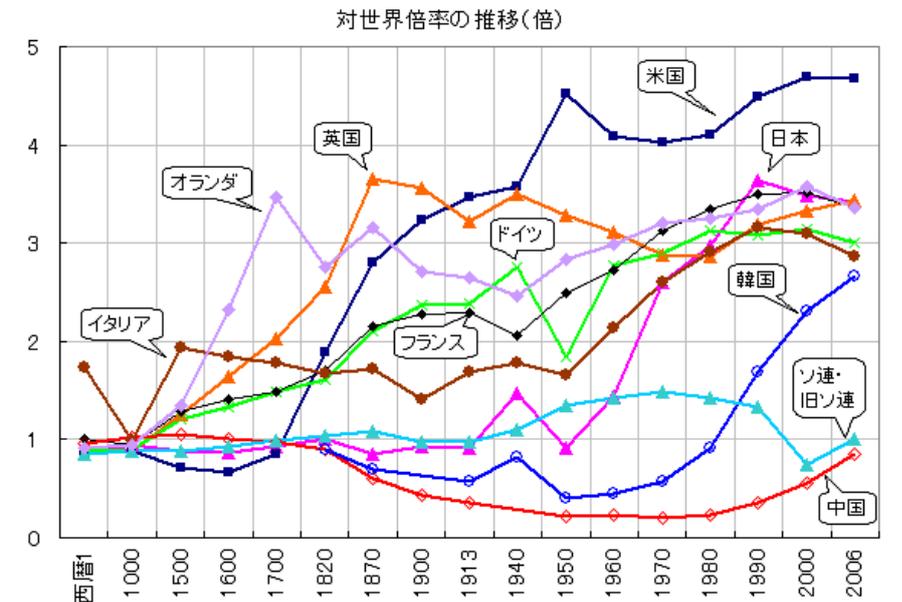
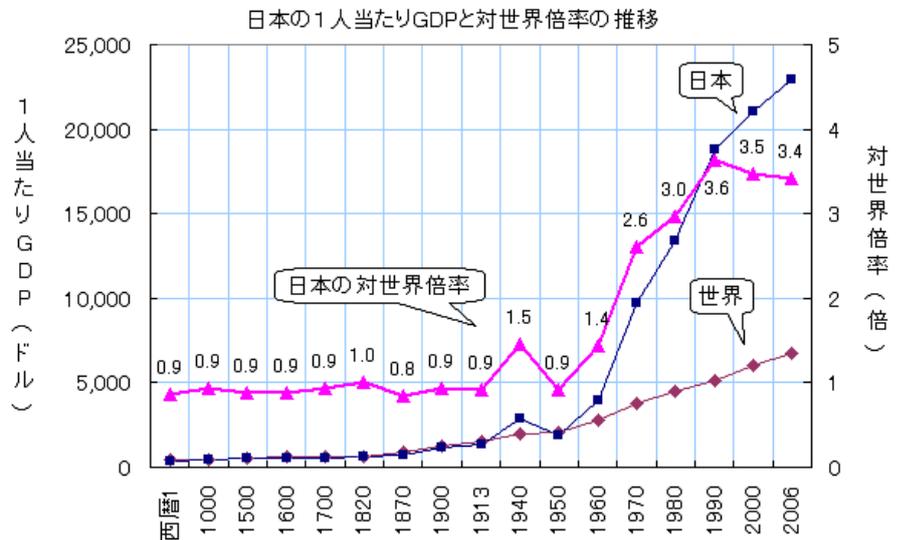
成長の原動力は付加価値が限られている農業から付加価値が高い工業への大規模な人員配置転換により、産業立国を実現したことにあります。この図表から農業に対する工業の付加価値はおおよそ 3~4 倍だと考えて良いでしょう。

なお、後で出てきますが、付加価値を上げるには世界の金融センターとなる金融立国という別のアプローチもあります。

農業からの人員供給が終わりに近づくと、工業による完全雇用状態が一時的に出現し、これをルイス転換点と呼びますが、日本のルイス転換点は 1980 年代です。失業率は殆どゼロ、収入は年々上昇する労働者のパラダイス状態で、「日本人が最も幸福だった 10 年間」とはこのことなのです。

右上図には 1600~1700 年にオランダが、1700~1870 年にイギリスが、少し遅れて 1820~1950 年にフランスやドイツやアメリカが、同じように経済の大躍進を遂げている状況が読み取れます。ソ連は一度成長しかかって挫折しており、韓国は成長中で頂点に近い、中国の本当の成長はこれからだという大局観をしっかりと

1 人当たり GDP の歴史的推移(日本と主要国)



(注) 1 人当たり GDP の単位は購買力平価で換算した実質ドル(1990 International Geary-Khamis dollars)。2006 年は世銀 WDI の '00~'06 実質成長率を使って当図録で試算した値(ただし旧ソ連 15 カ国についてはデータの得られないツルクメニスタンは除いて算出)。

(資料) Angus Maddison HP (<http://www.ggdc.net/maddison/>), WDI Online 2008.2.6

り自分のものにしてください。（この図表は各国の国力を理解する上で、際立って重要です！）

冷戦の終結とソ連の崩壊： 共産主義を信奉するソビエト連邦を盟主とする東側諸国は、自由主義・資本主義を信奉する西側諸国と互いの社会モデルの優劣を競って中立的な国家を軍事力や経済支援を駆使して自分の陣営に引き入れようとして激しい対立関係に入ります。1946/3 にチャーチルはこれを「鉄のカーテン」と呼びました。分割統治されたドイツの首都ベルリンには、文字通りの「ベルリンの壁」まで築かれました。

世界経済は大きくは西側経済圏と東側経済圏に分裂します。

初期には東側諸国の計画経済による成長は凄まじく、西側諸国内にも社会的格差が少ない共産主義を信奉する者が多数現れて、共産主義の勢いは侮り難いものでした。対立関係は益々エスカレートしますが、核爆弾と大陸間弾道弾の時代の世界大戦は共倒れ（相互確証破壊）を意味することから、双方は軍事紛争に入ることを互いに自制し、軍事力拡張競争はするが、現実の衝突には到らない冷戦状態が 40 数年間続きます。

この対立は、時間と共に自由主義陣営に有利に働き、共産主義陣営は社会停滞に陥り、レーガン大統領が 1983 年に「戦略防衛構想（通称：スターウォーズ計画）」を発表した時には、それに対抗する力は共産陣営には残されていませんでした。1989 年の「ベルリンの壁崩壊」による東西ドイツの再統合、1991 年には遂にソビエト連邦も共産主義を放棄してロシアなど 15 の主権国家に分裂、自由主義諸国は冷戦時代の経済封鎖を解き、東側諸国を西側経済圏に迎え入れました。こうして今日の**グローバル化が始まりました**。

日本の混迷： 冷戦終結の時に「冷戦は終わった。勝ったのは日本だ」と評されるほどの経済的成功を収めた日本でした。だが、都心にある皇居の土地でカルフォルニアを買えると言われたほどの**土地バブルが崩壊**してその損失が金融機関に集中します。経済の血液である金融が一気に収縮したために経済の息の根が止まったような状態になり、1990 年から大不況に見舞われ、「**日本人が一番幸福だった 10 年間**」（1980 年代）はあっけなく去り、今日に到るまで好況から見放され、「**日本の失われた 20 年**」になりつつあります。

中国の勃興： 中国は 1978 年に共産党一党独裁体制のままの経済の開放を決定し、資本主義の自由世界の技術・資本を導入開始します。統制された政治形態ながら、民族的には本来企業家精神に富み、教育程度も高い中国人たちです。彼等は安い賃金を武器として 1990 年代から見事に工業化に成功し、産業立国を実現して、**現在のグローバル世界の工場**の役割を完璧に果たしております。

古代から中世にかけて常にアジアの覇権を担ってきた実績がある中国です。たまたま近代化の波に乗り遅れて列強や日本の半植民地にされた屈辱の 200 年の遅れを今、取り戻しつつあるのです。既に 2010 年に GDP で日本を抜き去り、このままの発展を続ければ、2020 年頃には GDP でアメリカをも抜き去り、次の世界の覇権をアメリカと競う事態になると予測されています。

以上、近代から現代までの歴史を一塊の事件として述べました。これらは人類がより良い社会を求めて試行錯誤した歴史だと理解できます。「**愚者は経験に学び、賢者は歴史に学ぶ**」とはビスマルクの名言です。

近代史から現代史を通じて、人類は多くのことを学びました。そして理想の人類社会を求めて今も試行錯誤は続いています。以下に近代から第二次世界大戦の期間に人類が学んだ主な教訓を挙げてみましょう。第二次世界大戦後は現在進行中の歴史であり、私が少年期以後の自分自身の人生として実際に経験しています。人類は今もいろいろな教訓を学びつつあり、その教訓に従って社会の在るべき姿を改革しつつあります。これらは貴方の今後の人生にとっての指針にもなりますので、後のテキストで触れましょう。

2・2 人類が歴史から得た教訓

（1）王制と民主制

社会の力(経済力、文化力、戦闘力等)は統一された意思で動く人数にほぼ比例します。複数の社会間ではしばしば利害が相反して紛争が発生します。その際に社会の規模が大きい側が勝って自分の意思を通すことが多いのです。古代にローマ帝国を創設し、ルネッサンス時代には優秀な人材を輩出したイタリアが、中世では都市国家という小規模な政治形態を採っていたばかりに、一人の王の指揮下にあるフランスやオーストリアに組み敷かれて独立を保てませんでした。また、30年戦争で300弱の封建領地に分裂させられたドイツが、長年、欧州のキープレーヤーになれなかった事例からも、国力には規模の経済が強く働いていることが読み取れます。

社会が一人の統治者、或いはその側近たちの統治下にある場合を王制(帝制、君主制、天皇制、独裁制など)と呼び、多くの人たちの合意で統治される場合を共和制・民主制と呼びます。

王制とはどのようにして成立した制度なのでしょう。約3000年前、ペリシテ人(パレスチナ人)が攻め込んできた時に、12部族に分かれて神政民主主義を採っていたユダヤ人はこれに対抗するために急遽、王制を採った経緯が旧約聖書に詳細に記述されています。国家が総力戦を必要とする事態では、優秀な王やその幕僚たちの指揮による王制が極めて有効なのです。王制は必要があって生まれた社会制度なのです。

古代史では弱体化して統率力を失って烏合の衆と化した衰退期のローマ帝国が、5世紀に当時は野蛮人であったゲルマン民族が少数の指導者のもとに統制が取れた戦闘集団として雪崩れ込んだ時に、簡単に征服されてしまいました。征服者ゲルマン民族は人口比で僅か5%ほどに過ぎません。如何に統制と集中が強い力を発揮するか明らかです。

以来、ゲルマン民族出自の支配階級が王制を敷いて民衆を支配してきたのが西欧諸国の殆どの国家の姿です。この時代には国家は王や貴族の私有財産と考えられており、住民は君主の宗教を己が宗教とせねばならず、結婚の引出物として国家の支配権が動いたことさえ珍しくありません。

近世になると啓蒙主義が台頭し、人権意識が芽生えて民衆が目覚め、「何故、我々は王の支配を受け入れねばならぬのか。その根拠は何か」を問うようになって王の支配の正統性が疑われるようになります。フランスは革命で王制を打倒して共和制に移ります。激変を嫌ったイギリスは王制の形だけは残して実質的に無力化し、内実は議会制民主主義である立憲君主制に移りました。

民主制は多数の人たちの合意を形成するのに時間がかかる欠点があります。そのため有能な王や指導集団に指揮された社会の機動性に対して遅れをとることがあります。共和制ローマも戦時に限り任期1年間の独裁官制を採っていました。カエサルがローマを共和制から帝政に改革しようとしたのは、広大な版図に発展したローマ帝国には元老院での小田原評定より帝制による迅速な意思決定が相応しいと考えたからです。しかし、ネロのような暴君が現れた時には、その社会の損失は莫大なものになります。

「民主制は最悪の政治形態ということが出来る。これまでに試みられてきた、他のあらゆる政治形態を除けば、だが」は民主制の優れた点と欠点を言い得たチャーチル(英国首相)の至言です。民主制にも全員参加制、代議員議会制(2大政党型、小党連立型等)、大統領制など数多くのバラエティーがあります。

王制、民主制は国家を単位とした場合の社会制度で、その是非は以上のように歴史が答を出しています。だが、現在の企業を単位とした場合は独裁的な経営者による経営が良いか、合議に基づく集団指導体制が良いかということになります。その是非を問うのは簡単ではありません。このことはテキスト「現代(2)」で触れましょう。

(2) 資本主義と共産主義

資本主義は生産手段を資本家が独占します。資本家や起業家の創意を活かした新産業、新市場を生み出し、効率的で全体として富裕な社会を実現する利点と、社会構成員間の格差を広げる欠点があります。

共産主義は資本主義の欠点が極限に達した時に、そのアンチテーゼ(Antithese: 対立原理)として出現しており、生産手段を社会の共有財産として社会構成員間の格差をなくします。

20世紀後半で行われたアメリカを盟主とする資本主義陣営と、ソ連邦を盟主とする共産主義陣営の冷戦は、

ほぼ 40 年間に及んだイデオロギー間、体制間の優劣を競う人類の壮大な実験でした。

結果は全ての共産主義国家での恐るべき人権抑圧でした。ソ連邦のスターリンによる大粛正(2009/11/23 の BS 日テレによると強制労働 700 万人、政治犯としての処刑 100 万人!)、中国の毛沢東の大躍進政策の失敗による大量餓死(3000 万人という)と、紅衛兵を唆(そそのか)して歴史的遺産の破壊、地主や知識人虐待の文化大革命、カンボジアのポルポトによる知識人大虐殺(230~120 万人)です。何れも独裁者が異なる意見を持つ勢力を抹殺するための殺戮でした。当時の共産主義国家では、当局の監視の目や秘密警察の密告者が生活のあらゆる場面に潜んで、市民が互いに反国家的行為や思想がないか監視し、密告し合う暗い社会でした。共産主義にはこのような暗い面や非人道的暴政が伴うとは共産主義の祖カール・マルクスの著書「資本論」の何処にも書いてないし、予言されてもいませんが、現実には殆どの共産主義国家で、人民に対し想像を絶する人間性の抑圧と処刑が行われており、**人権の抑圧と共産主義は一体化**していました。

マルクスの頭で考えた理屈では、その様な人間性の問題点を見抜けなかったのです。一見、筋が通っているように見えるが、**歴史の検証を受けていない頭だけで作り上げた理論を盲信してはいけません。**

どこかに恐るべき盲点があるのを見逃している可能性があります。

また、計画経済は中央の計画に現地が従うことを強制するために、多くの人たちの創意工夫を活かす場がなく、そこからは殆ど新しい優れたものが現れません。時間と共に資本主義陣営に対する共産主義陣営の技術面、経済面、民生面での立ち後れが拡大し、その格差を覆い隠すために徹底した情報管制を敷き、必死のキャッチアップを図りますが、米国がスターウォーズ計画を発動してミサイル迎撃システム、宇宙レーザー砲台などを開発し始めた時点でソ連邦はそれに追従する経済力と技術力を有しておらず、もはやこれまでと悟ったゴルバチョフ大統領の自制心ある手綱捌きで 1991/12、ソ連邦共産党は解散され、巨大なソ連邦は平和裡にロシア共和国など 15 の主権国家に分解しました。

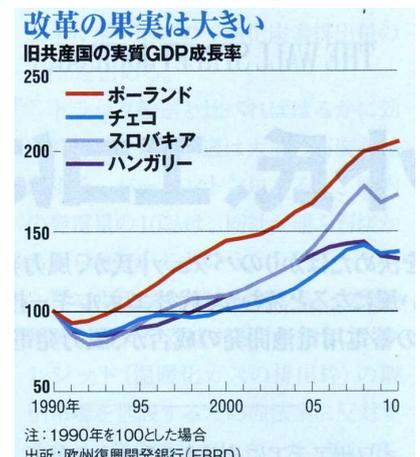
資本主義もこの対立過程で多くを学びました。19 世紀の米国のような剥き出しの自由放任主義から、政府の経済への規制・関与を強めて社会のセフティーネットを充実させ、共産主義のような「**結果の平等**」ではなく「**機会の平等**」を実現する自己改革を行いました。

例外的に中国は現在のところ、**共産党独裁体制のまま資本主義経済圏に参入**して来ていることを忘れてはなりません。既に資本家や経営者まで党員に加えていますから、「労働者や農民による独裁」を実現した本来の共産主義から相当変質していますが、現代のグローバル社会における異分子であることは間違いありません。このことが、今後、どのような形で展開して行くか、目が離せません。

また、ルーマニアでは現在も共産党時代のエリートが国を支配していますし、この 7 年間ポスト共産主義政権が続くハンガリーでは、秘密警察の重要な文書は開示されていません。

グローバル経済圏に編入されたためにアメリカ発の現在の恐慌の直撃を受けて喘ぐ東欧諸国では、今、大量失業が発生し、「共産主義時代は完全雇用で失業者はいなかった」と昔を懐かしむ人々が増えています。しかし、右のグローバル経済圏に編入された東欧諸国の実質 GDP の成長率は、ソ連邦崩壊後の一時的低下の後、著しく成長しており、資本主義が全体としてこれらの国家の経済に大きくプラスになっていることが判ります。

人類は現在も、より良い社会形態を求めて、試行錯誤中なのです。



(日経ビジネス 2009/11/23、p115)

(3) 世界の工場とバブル

オランダの場合：近世で最初の世界の工場はオランダでした。その原動力は高度に発達した造船技術と「世界の運搬人」と言われる海運力にあります。17 世紀のオランダは国内に資源を有しませんが、貿易により原材料や半製品を入手し、それを加工して最終製品として世界中に送り出しました。毛織物・絹織物産業、レン

ズ産業、時計製造業、印刷・製本業、タバコ・カカオ製造業、精糖業、木綿・絹加工業、毛皮製造業など、小国ながら見事な産業立国を実現しています。

景気が良くなれば、マネー(通貨)が国内に溢れます。設備投資等で使いきれなくなったマネーは捌け口を求めて有利な投機対象を捜し、そこに経済バブルが発生します。オランダの場合は奇妙なことに**チューリップの球根が投機対象**になったのです。当時は高級なチューリップの球根の2、3個も持つておれば、嫁入りの持参金として充分だと言われたほどでした。1630年代にチューリップの球根への投機が一段と熱狂的になり、専門家の間で行われていた先物売買に大衆が参加しました。知識人、農民、労働者、女中さんに到るまで、家財道具や土地や牛まで売り払い、全財産を投じてチューリップ球根によるマネービルに狂奔しました。ある種の球根は短期間に20倍にも値上がりし、投機熱は嫌が上にも煽られました。1636年の取引所は「まるで気違い病院のようであった」といいます。しかし、1637年2月の大暴落で全ては終わり、各州で数千人の人たちが破産しました。腹いせにチューリップ球根を食べた人たちもいました。

後から冷静に考えれば、何と馬鹿なものに貴重なマネーを投じたのだらうと誰でも気が付きます。だが、その熱狂の最中であって、貴方は冷静に判断できますか。それが問われているのです。

イギリスの場合：「人類と社会…近代」にイギリスが18世紀から19世紀にかけて世界の工場になって行く過程が述べられています。イギリスのポンドは基軸通貨となり、世界の富はイギリスに集まり、ここでも建設的な投資先では消化しきれなかったマネーは投機に向かいます。経済変動は何回か起こっていますが、その規模が特に大きいのは次の2件です。

鉄道商業化の驚異的な成功に煽られた人々が起こした株式バブル「**鉄道狂時代**」については前巻テキストの中で触れました。更に大きなバブルは、バブル史上に燦然たる存在である「**南海バブル事件**」(South Sea Bubble)です。イギリスでは二大政党制が定着しており、トーリー党(Tory Party：保守党の前身)が政権を執っていた時に国の財政危機を救うため、国債(Government Loan Bond：国の借金)の一部を引き受けさせる国策会社として1711年に南海会社(the South Sea Company)を設立します。1719年に競争入札で南海会社の株価で額面の国債と交換し、交換額と同額の株式を発行できる権利を得ます。これが「南海計画」です。この株券を売りに出せば南海会社の利益になり、利益が上があれば南海会社の株価は更に上がります。何だか怪しげなカラクリですね。こうして南海会社の株価は数ヶ月の間に10倍にも高騰しました。「買うから上がる。上がるから買う」のpositive feedback状態です。この株高騰に釣られて有象無象の会社の株までが高騰し、貴族、ブルジョワジー、庶民の区別無く、株の知識もない人々までが投機熱に浮かされて空前絶後の投機ブームが発生しました。本来、株式会社は政府の認許を受けて設立するものなのに、この時期には無許可の株式会社が雨後の竹の子の如く乱立しました。

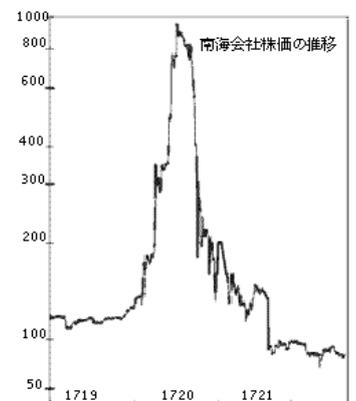
南海会社の株価は1720/1には100ポンド、5月には700ポンド、6/24には最高値1050ポンドをつけました。政府は無許可の株式会社を規制するために6/24に泡沫会社規制法を制定、8/24にはその告知令状を出すと株式市場は沈静化に向かい、やがて全ての株価が暴落する恐慌状態に陥りました。

多くの破産者や自殺者が出ました。科学者ニュートン(造幣局長でもある)も、音楽家ヘンデルも経済的に大きな打撃を受けています。ニュートンは「私は天体の動きなら計算できるが、人々の狂気までは計算できなかった」と嘆いています。南海会社の理事や、その株を賄賂として受け取った政治家に向かって人々の怒りは集中し、スタナップ政権は崩壊し、スタナップ本人も急死しました。

これを上手に收拾したのがロバート・ウォールポールで、彼は王室や政治家に

傷が付かないように終戦処理し、国王ジョージ一世の信頼を得て1742年まで政権を担当し、イギリスにおける議院内閣制の基礎を築いた人として評価されています。

1600年の東インド会社設立から始まった株式会社制度は、南海泡沫事件の手荒い洗礼を受けて、一般大衆か



(Wikipedia)

らの資金調達による事業には公正な第三者による監査が不可欠であると公式に認識され、**公認会計士制度と会計監査制度**が誕生しました。

アメリカの場合： 共産主義の計画経済なら経済活動は滑らかに保てるでしょう。だが、各企業がそれぞれの自由意思で活動する資本主義経済ではどうしても経済活動の行き過ぎ(景気過熱)とその調整(景気停滞)の大きな変動が避けられません。

経済学では**景気変動の周期**には、①3～4年の「**短期循環**」(主に在庫調整で説明される)、②10年前後の「**ジュグラー循環**」(主に設備投資で説明される)、③20年前後の「**クズネッツ循環**」(主に建設投資で説明される)、④47～60年の「**コンドラチェフ循環**」(技術革新で説明される)の4種類の景気変動があるとされています。後の3つは提唱者の名前に因んでいます。

海で時々二つの波が重なって巨大波が発生するように、経済現象でも特大級の景気変動が起こることがあります。経済バブルとその崩壊はそれに当たります。

1918年の第一次世界大戦後、1920年代にアメリカは世界の工場として「永遠の繁栄」と呼ばれる黄金期を迎え、世界最大の経済規模に成長しました。しかし、基軸通貨は依然イギリスポンドです。こういう**基軸通貨国と経済覇権国のねじれ現象**がある時には**世界経済は極めて不安定になります**。世界経済に占めるアメリカの規模が余りに大きいため、「**アメリカが風邪を引くと他国は肺炎になる**」といわれていました。このアメリカが肺炎になったのだから、他国は堪りません。(80年後の現在も同じことが起こっています！)

世界の工場アメリカがこの時に起こしたのは**株式バブル**でした。1924年から5年間で平均株価が5倍になり、1929年に突如暴落しました。

アメリカ経済への依存を深めていた第一次世界大戦の後遺症で脆弱になっていた各国経済も、有力銀行の破綻を切っ掛けに連鎖的に破綻して行きました。「**世界大恐慌**」(the Great Depression)の始まりです。

この後に起こった出来事は後の章で詳細に述べますが、ドイツにナチス政権を作り、日本の中国や東南アジア侵略を誘発しています。そして、アメリカが本当にこの不況から脱却できたのは第二次世界大戦の戦時生産ブーム時でした。世界史を動かす大きな原動力となった恐るべき**株式バブル**でした。

日本の場合： 14頁の「GDPの対世界倍率の推移」をご覧ください。日本も第二次世界大戦敗戦後の1950年頃を起点、1990年頃を頂点として一気に経済成長の坂を駆け登って経済的に先進国入りした時期があります。詳しくは後の章で取り上げますが、この時期、アメリカの技術を自由に取り入れることができるようになり、アメリカの資本は入れさせないで、1ドル360円の固定為替相場の下で重商主義の国家戦略をとってアメリカの市場に輸出しまくったのです。明らかな「**近隣国窮乏化**」戦略ですが、このような身勝手な政策が許されたのは、敗戦による日本の経済的困窮振りが余りにも著しく、アメリカ世論の同情を引いて、日本の再生のために例外的に認められたからです。

結果は予想外の大成功で、一躍、日本は**世界の工場**に踊り出ました。そして世界の工場に付き物の**経済バブル**が不動産(土地)に発生しました。このバブルの終戦処理に大蔵省と日本銀行は失敗し、現在に及ぶ「日本の失われた20年」が出現しています。**大蔵省**はこの重大な失敗の懲罰として、天皇制創設以来の由緒ある名称を取り上げられ、他国と同じ近代的な**財務省**を名乗らされることになりました。

日本のバブル崩壊は日本の経済規模が余り大きくないためか他の国に波及することなく、バブルの後始末に失敗した貴重な「**反面教師**」と見なされています。

「アメリカの場合」で説明したように、どの国でもある程度の経済変動は常時発生しています。これはエンジニアにとっては常識である「**自動制御系のハンチング(揺動)現象**」で、工学系では対策が判っています(フィードバック量を下げる)が、計量化が困難な人間の感情が入った**経済系**では、今のところ、対応できていません。このハンチングの特大のものが**経済バブル**なのです。経済バブルはあちこちで発生していますが、

世界の工場になった時にその国に集まってくる富の量は桁違いに大きく、有益な投資に使いきれなかった富は投機対象を捜してそこに殺到して特大の経済バブルを起こすのです。

振り返ると大きな経済バブルが大崩壊しかかったのに、上手に食い止めた 1825 年の金融危機(補遺 1 で説明します) もあります。経済学理論の発達が待ち望まれます。

(4) 国家と宗教の分離

敵意を持たないイスラーム教国を無理矢理侵略して暴虐の限りを尽くした十字軍、フランスで王女の婚姻の席に呼んでカソリック教徒が清教徒のリーダーたち約 4000 人を殺戮した聖バルテルミーの虐殺(1572/8/24)、ドイツを 300 余の小国に分割させ人口を半分以下に激減させた 30 年戦争(1618~1648)等、宗教こそ歴史において最も扇動的に敵というレッテルを貼り付け、非寛容に容赦なく敵を抹殺してきた要因でした。

中世の王は臣下に王の宗教を押しつけることができ、人権の大いなる抑圧原因でした。

人権に目覚めた近代国家では、政治から人権の障害になる宗教の影響を取り除くために、「信教の自由」を重要な基本的人権の一つに挙げ、国家の政治と宗教の分離を図ります。以下に代表例を挙げましょう。

フランス国憲法前文： フランスは不可分の(国家を分割させない)、民主的な社会共和国でなければならない。それは起源、人種や宗教の区別なく、法の下に全ての市民の平等を確保しなければならない。(1958/10/4)

アメリカ合衆国憲法： 修正第一条 連邦議会は、国教を樹立し、あるいは信教上の自由な行為を禁止する法律、または言論あるいは出版の自由を制限し、または人民が平穏に集会し、また苦痛の救済を求めるため政府に請願する権利を侵す法律を制定してはならない。

日本国憲法： 第二十条 信教の自由は、何人に対してもこれを保障する。いかなる宗教団体も、国から特権を受け、又は政治上の権力を行使してはならない／二 何人も、宗教上の行為、祝典、儀式又は行事に参加することを強制されない／三 国及びその機関は、宗教教育その他いかなる宗教的活動もしてはならない。

しかし、宗教の社会的慣性力は強く、一部の国では依然として憲法に国教の指定が残っています。アルゼンチン、ペルー、ボリビア、コスタリカ等はカソリック／ギリシャ、フィンランドは正教会／イングランドは聖公会／ノルウェー、スウェーデン、フィンランド、アイスランドはルター派キリスト教／多数のイスラーム国家はイスラーム教／ブータン、タイ、カンボジアは佛教です。また、国教制度をとっていませんが、イスラエルではユダヤ教が、インドではヒンドゥー教が民族宗教となっています。

嘗て共産圏にあった国家群では「宗教は阿片なり」と切り捨てられて、国教という概念はありません。現代の主流は「信教の自由」ですが、依然、精神面で中世を残している国家もあるというのが現在の世界の実情です。

第 2 章で参考にした文献：

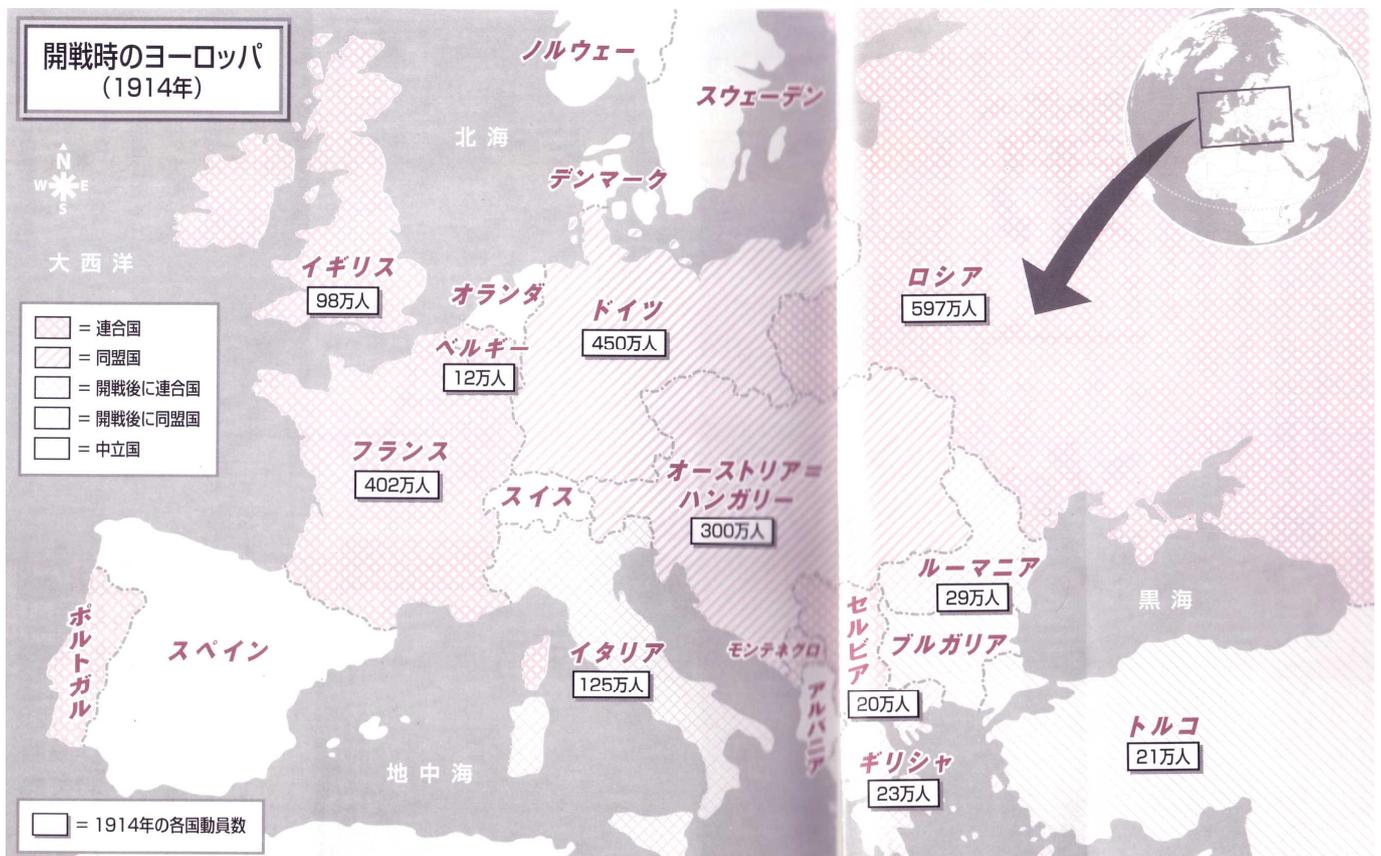
Wikipedia の関連記事、他

3. 第一次世界大戦

第一次世界大戦(1914~) ⇒ 世界大恐慌 ⇒ 第二次世界大戦(~1945) はその因果関係において、一連の事件と考えることができます。それ故、これを「**第二の30年戦争**」と呼ぶ歴史家もいます。

3・1 発端はサラエボの銃声

前巻「近代」で、1648年以来約300の弱小国に分裂していたドイツを1871年に再統一した功労者である宰相ビスマルクを1890年に解任し、自分流の政治を始めたウイルヘルム二世の治下で西欧の新興国ドイツが軍備、特に海軍力を急速に強化してイギリスから危険な仮想敵国として警戒される過程を述べました。また、1905年に日露戦争に敗れたロシアが方向を転じて東欧へ勢力を伸ばす事情を述べました。ドイツは嘗てビスマルクが1866年の普墺戦争での寛大な処置で友好国となったオーストリア・ハンガリー二重帝国と同盟関係を締結しました。これに対抗してイギリス、フランス、ロシアが1891年から1907年にかけて幾多の経緯を経て結んだ三国協商により、緩やかにドイツとオーストリア・ハンガリーを包囲します。下図を見れば、欧州で各国が互いに勢力を競い合った場合に地政学的に自然にそのような形になるであろうことが納得できると思います。



第一次世界大戦に参加した国々と初期兵力 (「11 大近代戦」p20~21/PHP 研究所)

各国の緊張関係は徐々に高まり、切っ掛けを得て爆発します。その切っ掛けになる事件はボスニアの首都サラエボで起きました。1914/6/28、オーストリア皇太子フランツ・フェルディナント大公夫妻が陸軍大演習の帰途にサラエボの中心街を行幸中に最初は爆弾で襲われて辛くも逃れ、その後、負傷者たちを見舞うために病院に向かう途中で19歳のセルビア主義者(セルビア大帝の輝きを取り戻してオーストリアの支配から離脱したい)の学生にピストルで射殺されました。

オーストリア政府は2週間の調査の結果、一切の責任をセルビア政府に被せることにし、極めて強硬な最後通牒を突き付けます。オーストリア・ハンガリー皇帝フランツ・ヨーゼフは支持を求める親書をドイツに送り、ウイルヘルム二世は十分な検討なしでそれに簡単に賛意を表し、クルーヅィングに出かけます。

この事件に最も神経を尖らせたのはロシアでした。オーストリアがスラヴ民族の国家セルビアに侵攻すれば、

ロシアの南下政策は致命的な打撃を受け、スラヴ民族に対するロシアの威信が傷つきます。また、当時のロシアの国内事情は社会主義者たちが帝政打倒を叫び、ストライキが相次ぐ内乱寸前の有様で、政府要人たちは外国との戦争が国内の不満を鎮め、国民の関心事を国外に向けさせるチャンスとも考えました。

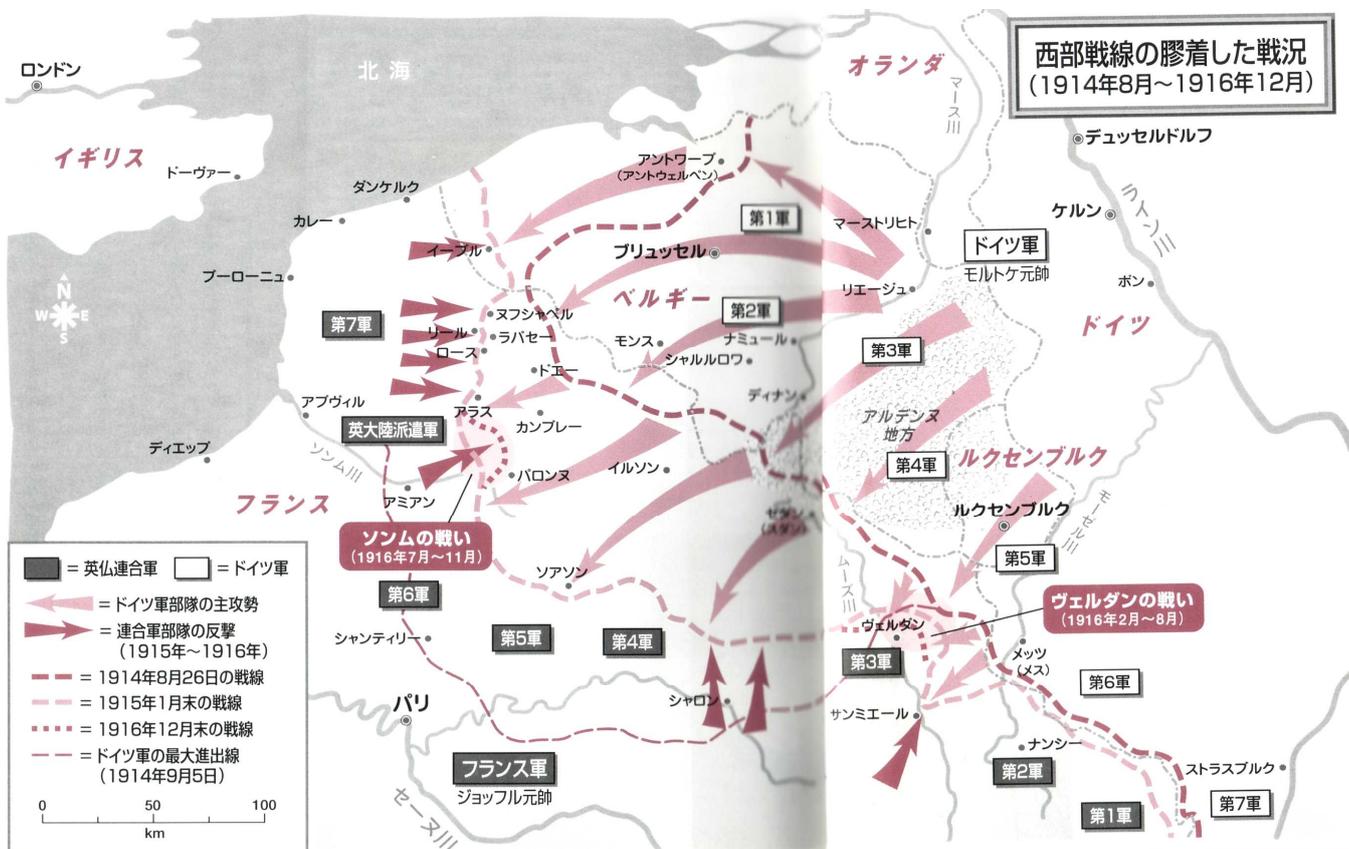
ロシアと協商条約を結ぶフランス大統領ポアンカレーは、駐露オーストリア大使に「ロシアの人民はセルビアの親友であり、フランスはロシアの同盟国である」と警告します。

セルビアは最後通牒を殆ど無条件で承諾しましたが、「犯罪の審査にオーストリア官憲の参加を認めること」という条項だけは憲法違反になるので、そこだけを拒絶しました。無条件受諾以外に妥協の余地はないとするオーストリアは直ちに国交断絶に入り、1914/7/28、セルビアに宣戦布告しました。

3・2 第一次世界大戦の開戦

戦争により国内治安の回復を願うロシアは直ちに国家総動員令を発令します。これはオーストリアの背後にあるドイツとの一戦を意味するので、こんな大事になろうとは思っていなかったドイツは回避を試みますが、時既に遅し、8/1にはロシアとフランスに対して宣戦布告せざるを得なくなります。後から考えると不思議なのですが、ドイツの作戦計画は「ロシアは動きが悪いので動員に時間がかかるだろう。その間にドイツはフランスを総攻撃して短時間で屈服させた後に兵力を東部に送ってロシアと戦う」という至って楽観的なものでした。1ヶ月半でパリまで進軍した鉄血宰相ビスマルクの偉業を再現できると思ったようです。成功体験はしばしば判断を誤らせます。8/2にドイツ軍はフランスに侵攻しました。

イギリスは中立国ベルギーにドイツが侵攻したのを理由として、ドイツに対して宣戦布告します。もはや専制君主が勝手に戦争を始めることができた中世ではなく、近代国家においては国民を納得させなくては国民から戦争に対する協力が得られません。各国とも外交文書を開示し、国民に対して丁寧に開戦に到った理由の説明をして、自国の正当性を訴えています。



西部戦線の進展状況（「11 大近代戦」p23~24/PHP 研究所）

緒戦にドイツ軍は快進撃しますが、フランス軍は整然と退却し、9/5から大反撃します。最初のマルヌの会

戦はこれまでの戦争で全く経験したことがない大物量作戦となりました。フランス軍は野砲1門当たり約1,300発の砲弾を準備していましたが、これだけの弾薬をマルヌの会戦で打ち尽くしました。ここだけで日露戦争での両軍の弾薬の全消費量を使い切っています。この戦争の最盛時には1日平均30~45万発の砲弾を製造しても充分でなかったといえます。

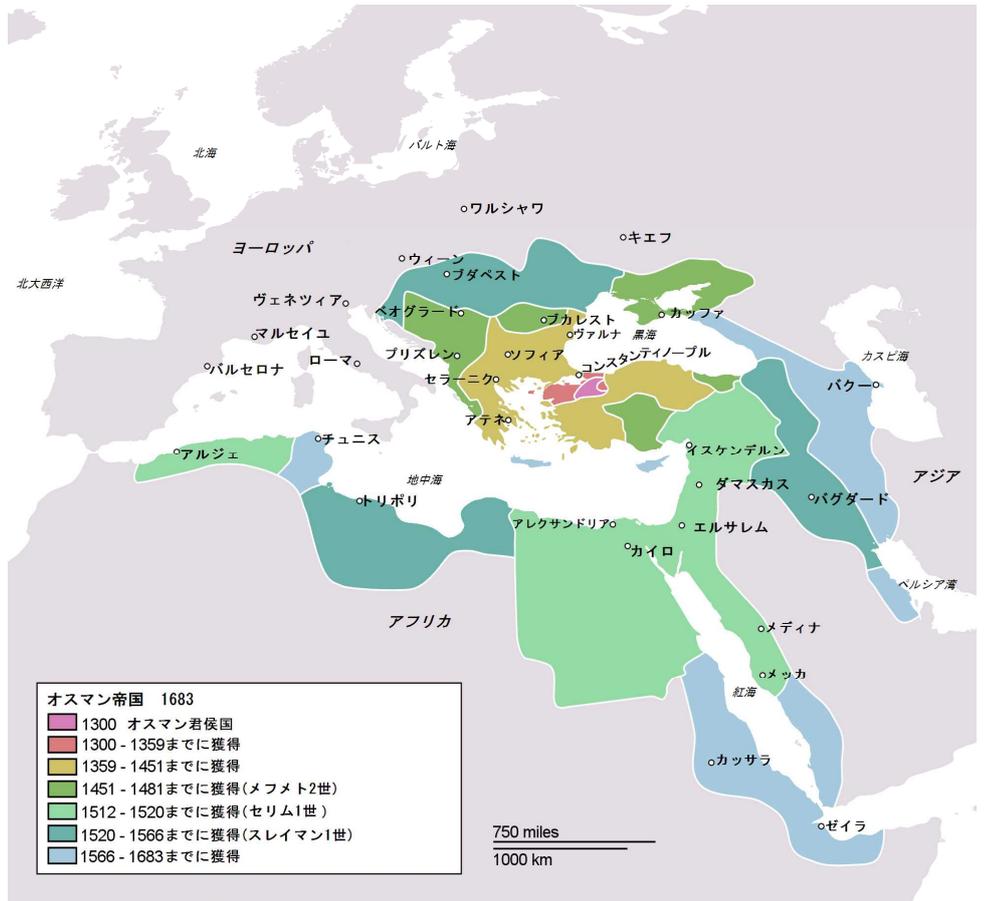
早くもこのような消耗戦に入りながら、お互いに相手を包囲しようとして北へ北へと戦線を伸張し、10月には海岸に達した後は塹壕戦となり、西部戦線の全面的な膠着状態が始まりました。ドイツの基本戦略は破れたのです。エーリッヒ・マリア・レマルクの「西部戦線 異状なし(Im Westen nicht Neues)」は戦死することになる若い兵士の目を通して、戦争の恐怖、苦悩、虚しさを書き尽くした名作として知られています。東部戦線ではロシア軍がプロセインに侵入し、ドイツ軍を圧倒しつつありました。ドイツ参謀本部は戦争直前に退役したヒンデンブルグ将軍を起用し、彼は森林湖沼が散在する地域にロシア軍を誘い込み、これを包囲殲滅しました。この戦いはドイツ軍の死傷者1.2万人に対し、ロシア軍のそれは10倍の12万人余に及び、寡兵を以って大敵を撃滅したタンネンベルグの会戦として戦史に残ります。しかし、この勝利も全体の戦局に決定的な影響を与えることができず、ドイツ・オーストリア軍はロシアの攻勢を辛うじて食い止めている情勢でした。

3・3 トルコの参戦と中東の新しい勢力図の成立

トルコ族が支配民族であるオスマン帝国(1299~1922)はイスラーム帝国の正統な後継者です。右図にオスマン帝国の版図の変遷を示します。

最大版図の中に**バルカン半島**(ギリシャ、アルバニア、マケドニア、セルビア、モンテネグロ、クロアチア、ボスニア・ヘルツゴビナ、トルコのヨーロッパ側)や、現在も紛争の火種がくすぶる**中東**(イラン、イラク、アラビア半島の各国、パレスチナ等)を包含しています。

バルカン半島は古代からいろいろな民族が入り込んでおり、更に東ローマ帝国、オスマン帝国、オーストリア・ハンガリー帝国といった多民族国家による支配期間が長かったために、西欧から単一民族による国民国家の



オスマン帝国の版図の変遷 (Wikipedia より)

概念が持ち込まれると忽ち各地で諸民族間の紛争が頻発し、**ヨーロッパの火薬庫**と呼ばれるに到ります。この地域では、今日でもボスニア・ヘルツゴビナ内戦やコソボ紛争など、宗教や民族の違いによる争いを幾つも抱えています。

要するに政治的にとてもややこしい地域なのですが、オスマン帝国やオーストリア・ハンガリー帝国の武力や統治力が強大な間は中央政府は民族間の地域紛争を許さず、多民族国家としての調和を保ってきました。

オスマン帝国は近代化の波に乗り遅れて国力を衰退させてバルカン半島の民族国家樹立やオーストリア・ハンガリー帝国への吸収を許してしまいます。そのオーストリア・ハンガリー帝国も 1866 年にプロセインと争ってドイツ再統一の盟主となる夢を絶たれ、衰退への歩みを早めます。サラエボでの皇太子暗殺事件も、このような統治力の衰弱化から起こったものです。

第一次世界大戦勃発の原因と、戦後の諸民族独立による世界情勢の激変は、このような中世の 2 大帝国の歴史的衰退と強い因果関係があります。

トルコ政府は予てからイギリス、フランス、ロシア 3 国の植民地政策に悩まされ続け、トルコ国内の治外法権の解消のため、それら権益とは無縁であったドイツと手を結んで国家の近代化と国力の増強を図ろうとします。3 国はトルコが厳正中立を守るなら、一定の時期に治外法権を撤廃すると通告しますが、トルコは最早聞く耳を持たず、1914/8、ドイツ・トルコ同盟が締結され、8/27 にはドイツの将軍リマン・フォン・ザンデルスがトルコ軍の総司令官に任命されました。

トルコは結果的には組む相手を間違えました。同年 10～11 月にかけてトルコは連合国側と戦闘状態に入りますが、最終的にドイツが敗れたために多民族国家オスマン帝国は解体され、崩壊します。重しが取れた領内の諸民族は好き勝手に独立し、戦勝国であるイギリス等が戦後処理で勝手気儘に地図に書き入れた国境線がそのまま新国家の国境となって今日に到る新しい勢力関係が構築され、現代の複雑な中東情勢を作り出しています。サウジ・アラビアの建国を指導した「アラビアのロレンス」などの活躍は、この時期のものであります。

3・4 ロシア革命

軍事物資の欠乏：東西両戦線が膠着し、長期戦必至となると、国内に革命の危機を抱え、軍需物資の準備も不十分であったロシアは、連合国との連絡を絶たれていることが重大な問題となってきます。軍需物資の不足は特にロシアにおいて深刻であり、それは戦争遂行を困難にし、社会不安を助長しました。

1914/11、前線にいる参謀総長ヤヌシェヴィッチは陸相スホマリノフに次のような書信を届けています。

「……『何故、我々は長靴もなく、飢えと寒気のために斃(たお)れなくてはならないのか？ 砲兵は沈黙を守り、我々は山鶉(やまうずら)のように殺戮される。ドイツ兵は楽に暮らしている。(捕虜になりに行こうじゃないか) ……攻撃に出て、捕虜となった 500 名の兵を奪還したコサック兵は、奪還兵によって罵られた。『誰が頼んだ、馬鹿ども。俺たちは飢えたり凍えたりしたくないのだ』。このような事件は真に悲しい。しかしながら、それは将に起こらんとしつつある事実である」と。また、彼は 1915/3 には同陸将に「貴下も知られる通り、日露戦争の際には 2 週間戦闘し、2、3ヶ月間は休止していたけれども、今日は既に 85 日間戦闘を継続している師団がある。それはもはや戦闘ではなくて、死に至る大闘争である」と語っています。これらは第一次世界大戦がこれまでの戦争の常識を覆えす激しきで戦われていること、ロシアにおいては開戦間もないのに、早くも軍需物資の欠乏が極限状態に到ったことを生々しく訴える注目すべき記録です。

食料事情の悪化：首都ペテログラード(後のレニングラード、現サンクト・ペテルスブルグ)の食糧事情は危機に瀕していました。ロシアのような大農業国で、しかも、農産物の輸出ができなくなっているのに現実に食糧不足が発生しています。農村は応召兵の家族への給与、酒類の販売禁止、工業製品の欠乏のために買うものがないのに現金がだぶつき、収穫物の換金化に全く関心を示さなくなり、一方で戦争の影響で鉄道輸送能力が著しく低下したため、前線と都市に対する食糧供給が極めて困難になったのです。1916/12 のペテログラードへの小麦着荷量は平時の 47% に止まります。武器弾薬の生産のために同市の労働人口は 2 年前の約 20 万人に対し、当時は約 40 万人になっていました。1917/3/8、7～8 万人の労働者が仕事を放棄し、街頭へ繰り出してパン屋の前に並ぶ事件となり、翌日にはストライキは 15～20 万人に及び、群集の中からは「専制政治を倒せ！」という声が聞かれています。

革命の勃発： 皇帝ニコライ二世は3/10に「戦時にこのような騒擾は許し難い。職場に復帰せよ」との強圧的な内容の布告をしますが、3/12には首都の軍隊の多くは革命側に移り、首都は完全に労働者と反乱軍に占拠され、彼等は政治犯を釈放します。食糧不足による全ての民衆の不満の鬱積に、社会主義者たちが着火して**革命が始まった**のです。

この事態を避けるためにドイツと戦を構え、挙国一致の戦時体制で乗り切ろうとしたのに、政府の無能が原因で戦時統制体制の確立に失敗し、食糧・物資の調達や輸送という国家の根幹に関わる活動分野で混乱を招き、帝政は反って自ら墓穴を掘る結果を招きました。「**食べ物の恨みは怖い**」という諺通りの展開でした。

3/11、国会議長は前線の皇帝に「首都は無政府状態。輸送体系は完全壊滅。部隊同士銃火を交えている。信望ある人物に即刻新政府の任務を委ねられよ。遅延は破滅に通ず」との内容の電報を打ちますが、皇后から楽観的な電報を受けていた皇帝はその要求を退け、「首都騒乱の責任は国会にあり」として国会に解散命令を出します。この事態を見て、労働者・兵士は国会こそ専制君主に対して戦う革命の指導機関であると考えました。内閣は総辞職しており、国政を担う機関が全くなくなっているため、取り敢えず事態を収拾するために国会は臨時委員会を組織します。

3/16、国会委員会の代表2名がニコライ二世の下へ出向き、ニコライ二世は帝位をミハイル大公に譲ることを認めます。しかし、ミハイル大公は帝位を受けず、ロマノフ王朝はあっけなく終焉を告げました。

主導権争奪の熾烈な権力闘争： 当時、ロシアの社会主義者の内、**ボルシェヴィキ**(多数派の意)の党員は25,000人ほどであったが、**レーニン**は亡命中、**スターリン**やカーメネフらの指導者も牢獄やシベリアの流刑地に在り、戦争反対の大衆運動は、これら社会主義指導者なしで勃発した自然発生的な革命へと発展しました。ペテログラードの労働者・兵士合同の「**ソヴィエト**(評議会)」が組織されましたが、この時点では弾圧によって弱体化していたボルシェヴィキは主導権を取ることはできていません。

3/14 夕刻、3月革命後の二つの権力を代表する国会臨時委員会とソヴィエト執行委員会の合同会議が開かれ、ソヴィエトは国会委員会が政権を掌握することを承認しました。前述 3/16 の事件はその文脈で実行されています。

臨時政府の閣僚は社会革命党のケレンスキーを除いては資本家代表であり、戦争の継続を望んでいました。従って欧米諸国は専制主義の権化と言うべきツァーリズム(“ツァーリ”はロシア皇帝)が崩壊したので、この大戦が民主主義国イギリス、フランス、ロシア、アメリカ 対 専制的王制国ドイツ、オーストリアの形になったことを歓迎し、進んでロシアの新政権を承認し、財政援助を申し出ました。しかし、ロシアは新政権とソヴィエトとの「**二重権力**」状態にあり、二つの権力の衝突は戦争問題を巡って早くも勃発します。

中立国スイスに亡命して「**帝国主義戦争を内乱に転化せよ!**」と主張していたレーニンは、革命を推進することでロシアの戦線離脱を期待したドイツの計らいで30人の同志達たちと共に「**封印列車**」に乗って帰国します。彼は直ちに「現在の革命におけるプロレタリアートの任務について」を發表し、「現在はプロレタリアートの意識と組織が不十分であったために権力をブルジョワジーに渡してしまった革命の第一段階から、プロレタリアートと貧農の手に権力を渡すべき第二段階に移りつつある」と総括し、「**一切の権力をソヴィエトへ!**」とのスローガンを掲げました。この方針は同じ社会主義政党の中でもメンシェヴィキや社会革命党の主張と対立します。両党は戦争継続に拘る臨時政府に閣僚を送り込んだためにボルシェヴィキとの対立は決定的になります。



民衆に演説するレーニン(「世界の歴史」14、p148)

7/1に40万人の労働者・兵士が行ったデモのプラカードは9割までが「戦争反対」「一切の権力をソヴィエト

へ！」でした。7/16~17 に約 50 万人の労働者がデモに繰り出したが、政府側の弾圧を受けて完全に鎮圧され、ボルシェヴィキに露骨な弾圧と指導者の逮捕が行われました。レーニンも火夫に変装して一時フィンランドに難を避けます。この7月事件の後、軍上層部は公然と反革命の道を進み出します。ケレンスキー首相は最高司令官コルニーロフが臨時政府を打倒して権力を奪うことを懼れて罷免しますが、コルニーロフ軍はペテログラードで軍事行動を起こしました。これに抵抗してボルシェヴィキ指揮下の部隊が奮戦し、コルニーロフ軍からも労働者に合流する者が多数出て反乱軍は敗北し、コルニーロフは逮捕されました。

この反乱に勝ったボルシェヴィキの党勢は急激に伸張し、再び「一切の権力をソヴィエトへ！」のスローガンに至る処に掲げられます。9月に入ると、革命に反対する資本家の意識的な工場閉鎖によりロシア経済は一層危機的状況となり、レーニンは亡命先からボルシェヴィキ中央委員会宛に蜂起を促し、10/20 ペテログラードに帰還します。11/6、臨時政府は蜂起を未然に防ぐために、戦線の兵士を首都に召還してボルシェヴィキの機関紙発行所を急襲させます。これに対抗して軍事革命委員会は兵士・労働者に指令を発し、武装蜂起が始まります。この赤衛軍は各連隊の兵士やクロンシュタットの水兵と共に予てからの計画に従って夜半までに諸官庁、停車場、郵便局、電信局、国立銀行などを占拠し、11/7 に軍事革命委員会は、臨時政府の倒壊と、ソヴィエト政権の樹立、講和会議の開催、地主的土地所有の廃止などを宣言しました。この日の内に全市は制圧され、臨時政府の最後の拠点・冬宮もネヴァ川にあった巡洋艦オーロラから砲撃を受けて革命軍に占拠されました。その後も各地で臨時政府勢力による巻き返しがありましたが、ことごとく赤衛軍によって鎮圧されました。

以上の 11 月革命の進行と並行して憲法制定会議の選挙が始まっており、比例代表制によるロシア最初の普通選挙になる筈でした。11/25 に予定通り行われた選挙の結果は社会革命党の勝利、ボルシェヴィキの敗北に終わります。ここで権力の正統性を巡ってソヴィエトか憲法制定会議かという決定的対立が生じますが、全ロシア執行委員会は憲法制定会議の解散布告を発し、勝負が着きました。この事件は、既に赤衛軍の最終的勝利を現実のものとして受け入れたロシア国民の間で、もはや関心を持たれなかったといえます。

無合併・無償金・民族自決の戦争終結宣言： ソヴィエト政府は 1917/11、全交戦国に講和を呼びかけます。

11/28 には全交戦国の国民に直接呼びかけ、連合政府が講和提案に応じないことを非難します。

しかしいろいろな経緯があって、ソヴィエト政府の統治を確実にロシア国内に定着させるのが最優先課題だとのレーニンの判断に基づいて、1918/3/3 にはドイツが提案する条件により講和条約が調印されます。

ロシアはフィンランド、ポーランド、バルト地方を失い、ウクライナからも撤退し、60 億マルクの償金を支払うこととなります。レーニンは「これは講和ではない。単なる息抜きである」と言いました。彼は猛然と共産主義ロシアの内部固めに邁進します。

3・5 日本の参戦

濡れ手に粟でドイツの極東利権を手にする日本： 1902 年当時、列強によって半植民地化された中国に権益を得ていたイギリスは、ロシアの南下による権益侵害を警戒して、ロシアと正面から対峙していた日本と**日英同盟**を結びます。日本はこの同盟関係を理由に、1914/8/23 にドイツに宣戦布告して交戦国に加わり、陸軍は2ヶ月後には青島(チンタオ)を落とし、後背地である山東のドイツ権益を奪って管理しました。海軍は9月にはドイツ領南洋諸島の赤道以北を占領しました。主戦場はヨーロッパであり、連合国からの度々のヨーロッパでの直接参戦の要請にも理由を設けて断り続けています。中国での権益確保を争ってきた英仏露3国がヨーロッパでの戦争に没頭して中国へ力を割けなくなった好機に、好都合にも敵国となったドイツの権益を奪って中国の権益確保競争での出遅れを挽回しようという火事場泥棒的行動だったのです。

それが判っていても背に腹は代えられません、日本の軍事力を引き出すために 1917 年 1~3 月に英仏露 3 国は秘密条約によって、事後承認的に「山東のドイツ利権と赤道以北のドイツ領南洋諸島が日本に譲られるべ

き」ことを日本に対して保証しました。利権の確定の代償として 1917/2 に日本海軍は駆逐艦隊を地中海に派遣して、始めてヨーロッパでの戦争に積極的に参加しています。

ウイルヘルム二世があれだけ力を入れていたドイツ海軍はどうなっていたのでしょうか。ドイツの海軍力増強はただならぬものでありましたが、海軍国イギリスも負けずに海軍力の増強を行っています。そのため、開戦時のイギリスの海軍力は依然、ドイツのそれを上回っていました。日本に追い出されたドイツの東洋艦隊もチリのコロネル沖海戦ではイギリス艦隊を破りますが、アルゼンチンのフォークランド沖海戦ではイギリス艦隊に撃滅されました。ヨーロッパで両軍は何回か戦いますが、双方互角の戦いが多く、海上で戦闘が行われる度に、生き残る艦船の数で勝るイギリスが優勢になり、遂には制海権を完全にイギリスに握られてしまい、全港湾の海上封鎖を受けました。

ドイツは海上に艦船を出せなくなったのです。その対抗手段として、ドイツは制海権に関係なく敵地に侵入できる潜水艦を活用して、連合側側の輸送船を主なターゲットとして無差別通商破壊攻撃を開始しました。英仏連合軍は地中海を通じてインド兵、モロッコ兵を西部戦線に送り、大量の物資も送らなくてはなりません。これら大輸送船団を護衛するために、広大な太平洋向けに乗組員の居住性を犠牲にして優れた航続力を実現していた日本の駆逐艦隊は大活躍しました。

なお、日露戦争の時も、青島・山東攻略の時も、捕虜に対する日本側の取り扱いは極めて人道的で、世界から好評を得ています。現鳴門市のドイツ捕虜収容所での地元民との心温まる交流は有名で、1918年の第九交響曲の日本初演は有名で、日本人ほど年末に第九交響曲を好んで聴く民族はいないといわれる発端となったそうです。また、カール・ニューハイム氏は戦後は日本に定住し、バームクーヘンを日本に広めています。

シベリア出兵の愚： ロシアが東部戦線から撤収したためにドイツは西部戦線に兵力を振り向け、連合側は苦戦します。ドイツの目を再び東部に向けさせるためと、ロシアの革命政権を倒す目的で、連合側は「チェコ軍捕囚の救出」を大義名分に極東のウラジオストクにアメリカ軍約8千人、イギリス軍1,500人、カナダ軍約4千人、イタリア軍1,400人の派兵を行って、ロシアの革命政権への干渉戦争を始めます。

地理的に近い日本は大規模な派兵を要請され、列強各国の承認の下にロシアを侵略できる絶好の機会を得て日本は73,000人と巨額の戦費を投入して、1918/8~1922/10の間、シベリアに出兵します。赤軍(革命軍)と戦うロシアの白軍(皇帝軍)による傀儡政権樹立を意図していたようです。結果は労働者・農民が組織したパルチザン(人民抵抗軍事組織)によるゲリラ戦に苦戦し、1918/11のドイツ停戦で目的を失った連合は夏までに撤兵し、日本だけがその後4年間に亘ってシベリアに残って、目的が不明瞭で大義名分を欠く戦争を続ける奇妙な展開になりました。

「駐兵4年、戦費9億円、軍司令官の交代3回、戦争目的の変更3回、……兵力不足、戦略不徹底のために尼港(ニコライエフスク港)虐殺事件、田中大隊全滅、大川大隊全滅の惨事を惹起し、海外に我が野心(シベリアの植民地化)を猜疑され、内に国民の不満懷疑を重ね、遂に一物も得ずして撤兵したる、悲しむべき大事件である」と太平洋戦争直前の1941年の「国防史」に総括される愚かな戦争を行いました。

残念ながら、この頃から日本の世界戦略は迷走し始めたようです。明治維新には、列強の植民地にならないという明快な国家目標がありました。シベリア出兵の頃には、一応、日本は西欧諸国の文明にチャッチアップできています。そうなると、次に何をやればよいのか、自分で考えなければなりません。日本は追従者としては素晴らしいし力を発揮できるが、先頭集団に追いついた段階でモデルを見失い、真に愚かな行動を行う傾向があるようです。20世紀後半の日本の勃興は、これまた世界史に燦然たる快挙ですが、「Japan as No.1」といわれた1990年代になってからは国家目標を見失い、今日に到る迷走状態を続けています。

モデルがなければ動けない、戦略的思考が苦手な国民性が心配です。

貴方は戦略的思考の重要性を認識して、それを涵養するように努力してください。

第二次世界大戦後に、大量の日本兵がシベリアに抑留されて強制労働に倒れたのも、ソ連の人々の間では「シベリア出兵の仕返し」だといっています。民族間の争いの恨みの恐ろしさを、よく知っておいてください。

3・6 アメリカの参戦

アメリカの産業は 1914 年には不況期に入りつつありましたが、ヨーロッパで戦争が起こり、中立国アメリカの輸出は一気に活況を呈します。1915/9 から連合国に対する借款が始まっており、輸出で過剰になった通貨の受け先として借款が大事になっています。アメリカが連合国側で参戦することは避けられない条件が整ってきました。ドイツの無差別潜水艦戦による被害を理由に国交を絶ち、1917/4/6 にドイツに宣戦布告をします。大工業国アメリカの参戦は戦争の流れを決定的なものとしします。

3・7 戦争の長期化

開戦当時、ドイツは電撃作戦が利いて、数ヶ月で戦争が終結すると思っていたようです。対するイギリスはキッチナー陸将(右の徴兵ポスターの人物)等が「長期戦になり、海軍だけで勝負が決するのではなく、大陸での数次の大会戦で決せられる」と正しく予測し、開戦時に 5 師団であった小陸軍を増強し、1 年後の 1915 年秋には西部戦線に 27 師団の大兵力を派遣しています。



兵器や戦術の進歩も非常に急速でした。1915/4/25 にはドイツ軍がベルギーのイーブル攻略で塩素ガスによる**毒ガス**攻撃を行っています。1916/7/1 から始まった英仏軍によるソンムの大反撃ではイギリスが新兵器**タンク**(戦車)を投入して近距離塹壕戦の膠着状態を破る目覚ましい効果を挙げますが、遺棄されたタンクがドイツ軍に捕獲され (「世界の歴史 14」 p85)ると、忽ち、ドイツ軍からもタンクが現れました。**飛行機による爆撃**も始まります。

各国とも国民総動員の総力戦体制に入り、ドイツでは 17~60 歳の男子は軍需物資の製造に動員されます。食糧の不足も厳しくなり、ドイツ人は 1 日 1 人当たり 3,000 カロリーは必要ですが、1916 年秋には食糧配給は 1,344 カロリーにまで減少していました。

イギリスやフランスでは民主主義左翼の政治家が労働者党の支持を得て戦争を遂行していますが、ドイツではヒンデンブルグとルーデンドルフという反動的な二人の人物によって独裁的な過酷な政治が行われており、労働者の反感が蓄積しつつあり、失敗に終わった後日のドイツ革命の伏線となります。

1918/3/3 のソヴィエト政府との講和が成立すると、ドイツは東部戦線の師団を西部戦線に移して数回に亘り大攻勢を掛けます。連合軍も英軍と仏軍の間の戦線を突破されて一時は危機に瀕しますが何とか持ちこたえ、8 月には英仏軍はソンム川北方の地域で攻勢に出てドイツ人捕虜 3 万人、砲 700 門を捕獲しました。

3・8 ドイツの降伏

ドイツの国民感情：ドイツ、オーストリア、トルコ、ブルガリアの 4 国同盟側のブルガリアが連合国とのマケドニア戦線での戦闘に敗れ、9/29 に降伏します。このバルカン半島に生じた空白を埋める力は、もはやドイツに残っていませんでした。しかし、これまで軍部は国民に対して「ドイツ軍は必ず勝つ」と宣伝しており、国民の側は最近はちょっとドイツ軍の形勢が良くないようだが、よもや負けることなどあるまいと信じ切っていました。

ドイツ人は誇り高い民族で、社会の上から下まで「ドイツ民族の中部ヨーロッパにおける使命」や「ドイツの実力」を疑っていません。できればロシアが退いた東部ヨーロッパを広くドイツの占領下において、負け戦となった西部国境地帯での領土喪失の埋め合わせをしたいとも考えていました。実際にはそうはならなかったために、負けたことに納得できない戦後のドイツではその反動で強烈な右翼運動が起こり、遂にはヒトラーのナチスが台頭する下地を整えます。

下からのドイツ革命：10/28、海軍首脳部がイギリスに対する最後の決戦をしようと出航命令を出したのに、

水兵たちは勝てる見込みのない戦いに8万人の若者たちが命を捨てるのは余りに馬鹿馬鹿しいと考えて、機関の火を消して出航を拒みました。キール軍港では水兵と労働者が大規模デモを行い、解散を命じた陸軍将校が発砲し、水兵が撃ち返します。11/4には武装した革命兵士4万人がキールを支配し、全ての軍艦に共産主義革命を意味する赤旗が掲げられました。反乱は急速に北ドイツに広がり、11/9にはベルリンで「ドイツ共和国宣言」がなされます。このまま進めば、ドイツもロシアと同じ共産主義国家に転換せんとする情勢です。前線にあった皇帝ウイヘルム二世は革命の鎮圧を軍の幕僚将校たちに諮りますが、彼等の評決では、もはや軍による革命鎮圧は無理との結論が出ました。

これまでです。皇帝はドイツ皇帝からは退位するが、プロセイン王として故郷に戻る決意を表明しますが、事態は一刻を争うと判断したマックス公は、ベルリンで「皇帝はドイツ皇帝及びプロセイン王の地位を放棄し、皇太子は皇位と王位の継承権を断念した。摂政が設置されることとなり、後任宰相としてはエーベルトが推薦された……」とのニュースを流して既成事実化させ、全ての決着が着きました。

ウイヘルム二世は王制が残っているオランダに亡命します。

振り返ってみると、彼は鉄血宰相の異名を取りながらも、内実は巧妙にイギリス、ロシア等を味方に付けてフランス包囲網を作っていた外交の達人ビスマルクを罷免し、気位だけ高く、頼りにならない落日の王朝ハプスブルグ家のオーストリア・ハンガリー帝国と手を組み、海軍力の増強で最強の海軍国イギリスを仮想敵国に追いやり、軽率な判断でオーストリア・ハンガリー帝国の逃げ場がない過酷な最後通告に賛同して第一次世界大戦を引き起こしてしまいました。

端的に評価すれば、この王は血気に逸(はや)る思慮深くない人物です。王制が怖いのは、王に人を得ない時にはその政治はしばしば王の独断で暴走し、このような無惨な結末を迎えることです。

神聖ローマ帝国の直系の後継者としての誇り高いドイツ民族は、1871年に223年に亘る分裂国家を再統一し、一時は軍国ドイツとして中部ヨーロッパで勢威を振るったものの、僅か47年間で第一次世界大戦に敗れ、失意のどん底に落とされました。この鬱勃(うつぼつ)たる感情は、後にナチスの勃興として結晶化します。

終戦処理：新政府は連合国からの降伏条件を受け入れ、1918/11/11に停戦が成立しました。東部戦線では直ちに撤収するとロシアの赤軍が生じた真空を埋めて進撃するのを抑えるために、連合国側が進駐するまでの間、ドイツ軍が占領地の確保を命じられます。このことも西部での損失を東部で埋め合わせできるかとの儂(はかない)希望をドイツ国民に抱かせたのでした。

軍部は共産主義による赤色革命と戦うために政府の指令に従うと宣言して政府と共同戦線を張り、新しいドイツ政体の中に帝政ドイツの支配勢力の中核であったドイツ軍将校団をドイツ義勇軍やトゥーレ協会を隠れ蓑にして温存させます。彼等は連合国側に引き渡しを命じられていた兵器の相当部分を隠匿します。これらは後のナチスの台頭の場面で活用されることになります。

新しい体制はロシアに成立した共産主義の波及を懼れる民主主義国家(資本主義国家でもある)である連合国側にも好都合でした。このようにして、ドイツでは革命の後でも帝政を支えた支配階級が権力を維持し続けます。

付け加えますと、1919/4には黒海のフランス艦隊でロシア革命に刺激された反乱が発生、シベリア出兵をしていたアメリカ軍、イギリス軍の中でも同様の反乱が発生し、これ以上の駐兵は連合国自身の兵士をボルシェヴィキ化させる危険があるために、シベリアからの撤兵を急いだ事情がありました。20世紀初頭の共産主義革命の波は、嘗ての18世紀の啓蒙主義による人権運動が中世から近世へと世界を突き動かしたと同じく、この時期のロシアに限らない世界的な動きだったのです。

一方のロシアでは成功した赤色革命(共産主義革命)が、殆ど同じ際どい情勢まで行きながら、ドイツでは何故不成功に終わったのでしょうか。ロシアには共産主義の理論的指導者であり、行動的指揮官でもあったレーニンがいたが、ドイツにはそれに代わる人物がいなかったということかも知れません。

それは歴史の面白さでもあり、複雑さでもあります。

3・9 ヴェルサイユ条約

フランスの太陽王ルイ 14 世が建立したヴェルサイユ宮殿こそは、1871 年にドイツを再統合したウィルヘルム一世がドイツ皇帝として即位した場所です。連合国は意趣返しにここでドイツとの講和条約の調印式を行いました。1919/6/28 のことです。ヴェルサイユ条約はアジア、アフリカのドイツ植民地の解放を大義名分としています。実態は戦勝国が敗戦国に戦争で生じた損害を補償させようとするものでした。

ドイツはその GDP の 20 年分に相当する 1,320 億金マルクを課せられたのです。更にドイツ民族が住む地下資源が豊かな地域をドイツ周辺の国家に割譲させられ、ドイツ国民の民族意識はいたく傷つきました。

イギリス代表として加わっていた経済学者 J.M.ケインズを始め、多くの識者が、「そのような過酷な賠償請求は、将来、確実に次の戦争を招くことになる」と厳しく警告しています。

結局、後に 1935 年にはヒトラー政権は一方的にヴェルサイユ条約を破棄します。そして間もなく、更に被害規模が大きい第二次世界大戦が勃発しています。人類はこの苦い学習から、第二次世界大戦では将来に戦争の種を残さないように、戦勝国は敗戦国に賠償を要求せず、むしろ敗戦国の経済的復興を助けます。

第 3 章で参考にした文献：

「世界の歴史 14／第一次大戦後の世界」江口朴郎／中公文庫

Wikipedia の関連記事多数

追記：第一次世界大戦の教訓／挑発が招く惨事回避を（ロレンス・フリードマン／2014/7/17 日本経済新聞）

…1914 年直前の数年間は、主要大国でナショナリズムが高まり、愛国心を示す好機として主戦論が強まっていた。また、欧州は政治的に二極化し、大国は互いに同盟関係を結んで対立を深めていった。その結果、オーストリア=ハンガリー帝国と、セルビアの間の地域紛争で済んでいたはずの出来事が大規模な武力対決に発展してしまった。最近の研究文献の多くは、紛争回避の機会が失われ、危機管理が失敗した原因として、いくつかの不適切な意思決定を指摘している。ただし、どの国の決定が最も不適切で戦争の主因になったかについては意見は一致していない。セルビアはテロの後ろ盾となったことに責任があり、オーストリア=ハンガリー帝国はためらった末に過剰反応したことに責任がある。ドイツはオーストリアの選択に「白地小切手」を与え、敵の同盟が強大化する前は平和が保たれていたにもかかわらず好戦的だったことに責任がある。ロシアは時期尚早な総動員令を下したことに、フランスと英国は他国に冷静になるよう説得する努力が不充分だったことに責任があるとされる。このうち意見の一致が見られそうなのは、ロシアとドイツの強硬かつ野心的な戦争計画が事態を急展開させ、対立を深刻化させたという点である。オーストリアがセルビアに最後通牒を突きつけた 7 月危機を振り返ると、政治家が軍部の計画に疑義を呈しなかったことに驚かざるを得ない。ロシアはセルビアの援護に専念するとしながら、ドイツに対抗して動員令を発した。ドイツの参謀本部はロシアが戦闘配備に手間取る間にフランスを叩く計画を早いうちから立てていた。そして計画の結論も必要性も見直すことなく、ベルギー経由でフランス侵攻を開始した。ドイツがベルギーの中立を侵犯したため、英国は参戦を決意する。戦争後期には、ドイツの無制限潜水艦作戦が米国の参戦を促した。17～20 年にフランス首相を務めたジョルジュ・クレマンソーには「将軍たちに任せておくには、戦争は重要すぎる」という名言がある。譲歩による平和的解決の試みよりも大胆かつ攻撃的な軍事行動を好む軍部の発想から戦争は始まり、そして長期化した。決戦の結果としてのみ勝利は得られるとしか考えられない将軍たちは、その目的に国家の資源を全て注ぎ込むことを要求し、そのための犠牲などお構いなしだった。…危険なのは、ある特定の領土について自国の権益を主張する小規模な行動で相手を挑発するだけなら、大規模な武力衝突は回避できるという思い込みである。これはサラミ戦術と呼ばれる。サラミ一切れなら争う価値はないと見せかけて、最後はまるごと一本取ってしまう戦法だ。サラミ戦術の危険性は、最初の行動よりも、それに対する行動にあるといえよう。…次第にどちらも抑制的な対応ができなくなっていく。……

4. 世界大恐慌

4・1 世界経済を支えたアメリカ

永遠の繁栄を謳歌するアメリカ： 中世から近代にかけて世界の主役を演じてきたのは、ポルトガル、スペイン、オランダ、イギリス、フランス、ドイツ、ロシアでした。第一次世界大戦で、これら西欧列強はお互いに国力を傷つけ合い、「**西欧の没落**」といわれる状況が出現します。

代わって、参戦時期も遅く、出兵数も少なく、戦線の遙か後方に在って戦争の被害を受けず、連合国側の軍事物資供給基地として生産活動に専念できたアメリカは、戦争中に他の連合国への物資供給の対価として多額の金を受け取り、或いは借款を与えました。この戦争での収益により、アメリカは建国以来の債務国の立場を返上して、この時点から債権国の立場に立ち、世界における発言力が格段に強くなりました。

アメリカは本来、肥沃で広大な農地を有する大農業国であり、石炭、石油、鉄鉱石を始め多くの天然資源に恵まれ、常に人手が不足する社会構造に刺激されて労働の機械化が進み、優れた生産性を有する工業国です。第一次世界大戦前には生産性の向上に需要が追いつかず、不況期入りしていました。だが、1914年の大戦の勃発と共に、連合国側ではあらゆる物資の需要が急増し、アメリカの産業界は空前のブームに沸き立ちました。1919年に大戦が終わった後も、復興事業のために需要は減りません。1920年代にはアメリカは「**永遠の繁栄**」と呼ばれる永続的な経済成長を享受し、**世界の工場**の地位を不動のものとしします。

繁栄の構図： ドイツからの賠償金の支払いは初期には滞(とどこお)り、1923年には業を煮やしたフランスが地下資源が豊かなルール地方を占領する騒ぎとなっています。1924年からは支払い方法が合理化されてドイツからイギリス、フランス、イタリア、ベルギーなどに賠償金が確実に支払われるようになります。

この金は各国のアメリカに対する戦時借款への支払に廻されます。アメリカはヨーロッパから支払われた金を更にドイツなどに貸し付けて利益を挙げると共に、ヨーロッパ経済の再建を投資で助けたので、アメリカの商品も益々ヨーロッパでよく売れ、アメリカの繁栄を一層強化します。経済の好循環、技術用語でいえば **Positive Feedback** 状態です。当時、全世界の金の半分がアメリカに集まっていたといえます。アメリカからの金が流入し続ける限り、ヨーロッパは購買力を維持することができ、アメリカもヨーロッパが商品を買ってくれる限り、繁栄し続けることができる、相互依存関係が繁栄の構図でした。

危険の兆候は既に実体経済に現れていた： 1920年代に各国の産業生産は素晴らしく成長しましたが、主に従業員を減らしながら最新の機械を使って能率を向上する傾向にあり、生産が増えても雇用が増えないために消費者の購買力は伸び悩み、需給ギャップにより、在庫が増加します。1923~1925年の平均値に対する農業、鉱業などの一次産業の在庫水準は1929年には1.92倍に積み上がっています。供給過剰のため、農産物の価格水準は半分以下になり、農業恐慌が植民地と後進国を襲い、元来、生活水準が低いこれらの地域の農民は飢えに苦しみ、住民の不満と怒りに起因する革命運動と民族独立運動が世界各地で勃発します。これに引き続いて1929年には、需要不足による工業の事業不振が表面化しています。

4・2 株価の大崩落

アメリカの株式市場は1924年から長期上昇トレンドに入り、投機資金が株に向けられて、5年間でダウ平均株価は5倍まで上昇していました。「**買うから上がる。上がるから買う**」といった株の熱狂時代が、ここ数年、継続しており、各地に株長者が輩出し、人々の熱狂は益々激しさを増していました。冷静さを失った人々は、少し前から実体経済が悪化して危険信号を発しているのに、気にも留めていません。

現在のリーマン・ショックでも1年以上前にアメリカの住宅価格が明白にピークを打ったのに、その後も株価は上がり続けていましたから、事情は1929年でも2008年でも全く同じです。株価は、理論的には、事業から挙がる将来の配当を先取りしているのです。株価だけ見ても、株の将来の動きは判る筈がありません。

事業が将来どのように発展するかが、判断材料にならなくてはなりません。実体経済を無視した熱狂的上昇が何時までも続く筈がありません。残念ながら、株の世界では「歴史は繰り返す」ようです。

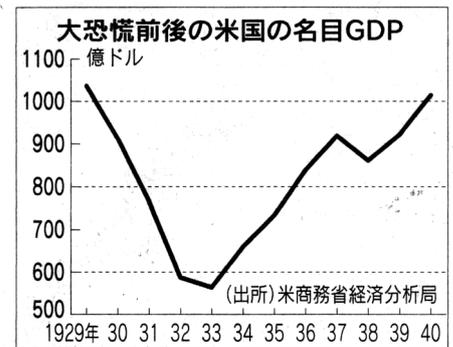
しかも経済バブル状態で上がり過ぎた株価を見直す時は、南海泡沫事件で学んだように、必然的に暴落の形をとります。1929/10/24にそれが起こりました。株取引所では殆ど予告もなく、突如、売り一色となって取引が成立せず、シカゴとバッファローの市場は閉鎖され、この日だけで 11 人の投機業者が自殺しました。歴史に残る「暗黒の木曜日」(Black Thursday)です。

28日には投資家は莫大な株の損失を埋めるために、様々な分野や地域から急速に資金を引き揚げ始めました。この日は「悲劇の火曜日」(Tragedy Tuesday)と呼ばれるようになります。穏やかな経済の上昇局面が下降局面に転じる場合は、変化速度が緩やかなためにその衝撃は穏やかに経済システムの中で吸収されます。

しかし、限度を超えた急激な下降局面では、経済システムの至る処で回収不能な不良債権が発生し、そのしわ寄せは資金を提供した銀行に集まります。どの銀行が最も大きな不良債権を抱えたか、お互いに疑心暗鬼になって、銀行間の資金取引が極端に細ります。銀行はキャッシュ(現金)切れにならぬように貸出債権の回収を急ぎ、経済界の資金の流れは一気に貧血状態になり、忽ち全ての経済活動は重篤な停滞状態になります。これが大不況が発生するメカニズムです。2008年に起きたリーマン・ショックでも、初期にはこれと殆ど同じ現象が発生しました。幸い、人類はこの大恐慌(the Great Depression)から得た教訓を活かして、各国協調の下に素早く対応し、概ね不況が深刻化するのを防ぐことに成功しているようです。

残念ながら、この時は世界的に対応を誤り、世界中が 10 年間以上に亘って深刻な経済不況に喘ぎ、結局は第二次世界大戦にまで発展する原因になって行きます。火元のアメリカも果敢に改革に挑み、一時は持ち直したかに見えましたが、結局は再び落ち込み、**第二次世界大戦の軍需景気で始めて景気回復が実現**しました。

なにしろ、世界中に向かって資金の貸し手であったアメリカが投資した資金の回収に動いたので、借り手はたまったものではありません。一気に世界中の景気は冷え込み、その影響は特に社会的弱者に強く現れ、社会不安を引き起こし、遂には国際紛争にまで燃え上がります。



4・3 イギリスは経済圏を囲い込む

イギリスの銀行は、アメリカから短期で資金を借りて、ヨーロッパへ長期で資金を貸し出していましたから、アメリカが資金を突然に引き揚げたために資金が欠乏し、賠償問題も国際貸借問題も暗礁に乗り上げた状態になります。一気に不景気になり、貿易や国内需要は急減し、税金は減って失業手当等が増えて、政府の財政赤字は巨額となります。イギリスの経済が危機に瀕していると知って、1931年後半に外国人の資本が大挙して引き揚げられました。

この非常事態に対応すべく、労働党と保守党が連携して挙国一致内閣を編成します。失業手当も国家公務員や軍人の給与も引き下げられ、各種の増税をして財政の均衡化を図ります。それでも金(きん)の国外への流出は止まず、遂に 1931/9/21 にイギリスは**金本位制を停止**しました。これらの政策の組合せでイギリスの財政はようやく安定し、ポンドの価値はほぼ以前の 2/3 の水準で止まりました。この為替レートの切り下げによりイギリスの輸出競争力はアメリカやドイツより有利となり、輸出産業が潤います。輸入物価も世界恐慌のために下落しており、輸入物価高騰によるインフレも起こらずに済みました。また、政府は輸入関税を高額にしてイギリス連邦内の産業を守り、貿易相手国に品目毎にきめ細かく輸入数量の割り当てを行いました。イギリス連邦は外に向かって強固な貿易障壁を築き上げて、世界恐慌の影響からいち早く脱出しました。これは典型的な**近隣窮乏化政策**で、他国の貿易上の犠牲の下に自国経済を立て直そうとするものです。

相手国も対抗上、同様の政策をとります。世界はイギリス連邦のスターリング・ポンド・ブロック、アメリカのドル・ブロック、フランスのフラン・ブロックなどの**ブロック経済圏に分割**され、世界貿易量は劇的に減少しました。

イギリスは近代史の中で蓄積した膨大な植民地経済が財政建て直しに有利に働きましたが、ドイツや日本のように、輸出で喰っていたような国にとっては、死活問題になりました。

この時代に、「英国経済は『長期的には』立ち直るであろう」と述べた批判論者たちに対して、著名な経済学者ケインズは「長期的には我々は皆死んでいる」と応じています。

4・4 ドイツではナチスが台頭

ヒトラーとナチス：ヴェルサイユ条約によって1920年内にドイツの国防軍が従来の1/4の規模に削減された時、旧軍将兵と大量の武器・弾薬が、実質的に国防軍の別働隊として働く右翼団体に横流しされました。地方政府は赤色革命を志す左翼団体を牽制するために、これら右翼団体の活動を黙認する形で使います。

このような情勢の中で、そのような右翼団体の一つである**ナチス**（国家社会主義ドイツ労働者党 *Nationalsozialistische Deutsche Arbeiterpartei*）が台頭してきます。反ユダヤ主義・反共産主義を掲げて国内の団結を固め、民族生存圏確保を求める帝国主義的主張を、民衆の生活向上と社会福祉の徹底の約束に結びつけて近代的宣伝技術を駆使して国民に説いたから、反革命運動として成功し、多くの精鋭分子を組織に取り込むことができました。

その首領・**ヒトラー**(Adolf Hitler) は1920年3月に軍隊を伍長で退役し、以来、政治活動に専念していますが、戦勝国に対する復讐心が強く、現政権の無力に絶望する民衆の共感を得て、3人で始めたナチス党は同年末には3000人規模まで党員を急増しています。大衆心理の把握に長けた雄弁家ヒトラーが、各地で挑戦的反社会主義アジ演説をして廻り、反対派の野次を受け、頻繁に乱闘事件が起きました。これに対抗するために100人単位で警護団が幾つも編成され、やがて隊の名は突撃隊(SA)となります。

ドイツ内には無数の極右団体が発生していましたが、社会主義運動に対抗できるだけの内容ある主張を持ち、突撃隊といった戦闘集団を持ち、大衆を動員できたのはナチス党だけでした。ヒトラーは党内の左翼勢力を追い出して独裁権を獲得し、党を軍事的組織に作り替えます。

1923年1月にはフランス軍がルール地方を不法占拠し、ドイツ国民は挙国一致でゼネスト運動を9月まで続けて、フランス軍を追い出します。だが、それによりドイツが受けた経済的損害も大きく、前代未聞の**ハイパーインフレが発生**します。同年8月にはマルクの価値は戦前の110万分の1に、10月には60億分の1にまで暴落して、飢餓暴動と物価騰貴に抗議する暴動が全国到る所で発生しました。この国内混乱の最中にバイエルン政府が右翼勢力を結集してベルリンの中央政府に抵抗し、あわやベルリンへ向かって進軍する寸前まで事態が緊迫します。しかし、この期に及んでも躊躇するバイエルン政府に決起を促すために、1923/11/8にヒトラーが当地の有力者たちをビヤホールに監禁して行った一揆は国防軍将校団に阻まれて失敗に終わり、彼は有罪判決を受けて同志40名と共に禁固刑に服します。彼は獄中で有名な「我が闘争」を口述により著作します。彼等は翌年末に釈放され、ナチスはもはや敵対してしまつた国防軍の支援を受けることができず、他の右翼団体との共闘も絶たれて、孤立した政治活動を始めます。突撃隊(SA)は疑似軍隊から政治大衆団体へと衣替えし、党内の秘密警察と指導者の身辺警護のための親衛隊(SS)が作られます。

世界大恐慌とナチス独裁政権の成立：1924年からは賠償問題も合理的に解決され、ドイツは久しぶりに経済的繁栄を謳歌することができまし



演説するヒトラー総統

(Wikipedia)

た。海外の資本もドイツを有望な投資先と認めて、大量に流れ込みます。

しかし、世界大恐慌はドイツ経済に破滅的な打撃を与えました。中産階級と農民は中間派諸政党を見限ってナチスに走り、社会民主党を支持する労働者は続々と共産党に転じます。

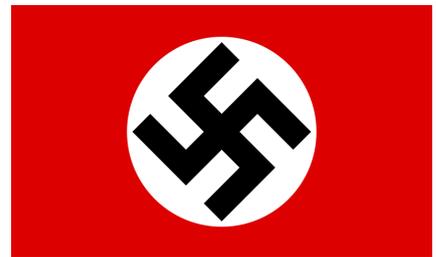
社会革命の危険性を痛感した金融資本家、重工業資本家、ユンカーと大地主は、1932年に続々と共産革命に対抗できそうなナチスの支持に傾き、遂に1933/1/30ヒトラー内閣が出現しました。同年2/27の極左労働者によるとされる国会議事堂放火事件を機に、ナチスによる徹底した恐喝政治が行われ、3/5の総選挙でナチスは有利な立場に立ち、保守帝政派の支持を得て3/24に全権委任法案を可決させ、**ナチスによる一党独裁支配体制が確立**しました。

ナチスが独裁政権を得たのは、憲法に則った合法的手続によるので、決して非合法手段によるものでないことに注目してください。平和的な憲法を遵守しているから、我々はこのような事態とは無関係だと思っはなりません。同じようなことが、何時また起こるかも知れません。

共産党と社会民主党は、ナチスが動員する暴力的大衆運動と過酷な弾圧によって組織が崩壊しました。5/2には労働組合が禁止され、7/14以降はナチス以外の政党を組織することが禁止されました。

どうしてこんなことが起こったのでしょうか。ナチスが主張する民族主義はドイツの国民的伝統を継承する形をとっていましたし、強力な祖国とその栄光を説き、国民生活の安定と向上、社会福祉の充実を約束するヒトラーの主張はドイツ精神そのものと一致しているように見えたから、誰にとっても反対することは難しいことでした。更に、ビスマルク以来のドイツ国民主義と正統派愛国心とは、権威主義と軍国主義に立脚していましたから、ナチズムはドイツの国民的な精神風土と一致し、矛盾するようには見えなかったのです。ナチズムの成功を考える時、単に同党の宣伝技術の上手さや組織運動の巧みさだけでなく、それがドイツ精神そのものと結びついていることを考えなければなりません。決して偶然に咲いたあだ花ではないのです。

ナチスの欧州制覇計画：ナチス支配のもとで、ドイツ経済は急速に復興してきます。道路建設、土地改良事業、飛行場の創設、兵営建設等が進められ、更に諸官庁の膨張などにより、失業率は殆どゼロになります。婦人には結婚資金が貸与され、職場を去ることが奨励されました。1935年には青年による6ヶ月間の義務的勤労奉仕制度が施行され、1年現役制による義務兵役制が施行され、翌年にはそれが2年現役制に延長されました。このようにしてドイツは急速に軍事大国となっていきます。



ナチス時代のドイツ国旗

(Wikipedia)

1937/11/5の秘密首脳会議でヒトラーは次のように言っています。「一方では巨大な国防軍を維持して行かねばならないし、他方では生活水準が低下し、出生率が減少する見通しがある。この窮状から脱出する途は只一つ、1944年から45年までの間に、ドイツの生存圏問題を解決するために行動する決心をすることである」と。ヒトラーはドイツ民族の生存圏を確保するために東欧に広大な領地を獲得し、ドイツ民族をそこに植民し、自給自足経済を確立することによって欧州制覇を実現しようとしていたのです。

ナチスは独ソ開戦後に次のようなヨーロッパ新秩序計画を立てています。「……スラヴ人の大半は西シベリアへ移し、故郷に残留する者には武器を与えず、教育も授けず、只自分の名前が書けて500まで数えられるだけでよい。また、命令が判る程度のドイツ語を教える。次に彼等の出産率を低下させる方法を取り、特に、病気になっても病院には入れない。町村落の生活についての自治は与えるが、それ以上の権利は許さず、部落相互間の連絡も許さない。もし不穏な形勢を示す町村があれば、強力な爆弾2、3発で片付けてしまう。……スラヴ人たちは、劣等な奴隷階級として生存させられ、ドイツ人の東欧植民者に奉仕する。……」。

(「世界の歴史15」p396:中公文庫)

4・5 日本は二つの恐慌に翻弄される

関東大震災： 1918 年末に第一次世界大戦が終結し、戦争特需が終わって反動で不況になることが予想されました。幸い、日本は日清戦争や日露戦争で戦争慣れしていたためか、戦後半年間で不況から抜け出しています。欧州では戦後復興のための特需が発生し、アメリカと日本は輸出による好況を謳歌します。だが、欧州諸国も復興を成し遂げ、戦前通りに製品がアジア市場に戻ってくると、まだデザインや品質面等で競争力が充分でなかった日本の製品は徐々に輸出量が減少し、**戦後不況**といわれる状態になりました。

そこに**関東大震災が襲来**します。1923/9/1(大正 12 年) 11:58、相模湾沖合 80 km で M7.9 の海溝型(プレートが日本列島の下に潜り込んで蓄積した歪みが解放される) 大地震が発生しました。千葉県、茨城県から静岡県東部までの広い範囲に日本災害史上最大級の被害をもたらしました。死者・行方不明者 142,800 人、負傷者 103,733 人、家屋全壊 128,266 戸、家屋半壊 126,233 戸、家屋焼失 447,128 戸という統計が残っています。翌日の未明には中央気象台が最高 46.4℃を観測していますから、火災の規模と激しさは想像を絶するものでした。公園として造成中であった広場に避難した人たちを火災旋風が襲い、3.8 万人の人たちが犠牲となった**陸軍本所被服廠跡地惨事**はその中でも最大のものでした。鎮火したのは 2 日後の午前です。相模湾と房総半島沿岸部では高さ 10m の津波による被害も発生しています。新聞も発行できないため、朝鮮人が放火・暴行を働いているとのデマが飛び回り、日本人に襲われて数百人の朝鮮人が殺されています。また、この混乱に乗じて、日頃は手を下せなかった社会主義者や自由主義者を陸軍や憲兵隊が殺害した甘粕事件、亀戸事件、王希天殺害事件などが発生しています。

4 週間後に帝都復興院が設置され、後藤新平総裁(補遺参照)は画期的な帝都復興計画を提出します。被災地を全て地主から公債で国が買い取り、100m 道路やライフライン(電気、ガス、電話、上下水道等) の共同溝化など現代から見ても理想的な都市計画を実施した上で売り戻す計画でした。これに多くの地主が反対し、地主を支持基盤とする政敵であり野党である立憲政友会が後藤の前に立ち塞がりました。国民的人気が高い民政党の後藤が復興で成果を挙げ、また国民の支持を受けつつあった普通選挙法を持ち出してくると、立憲政友会は政治的に大打撃を受けると考えて反対しています。関東大震災という国難の前には過去の確執をひとまず置き、挙国一致で当たるべきであったのを、このような非常時でも常に政権党の足の引っ張り合いに終始したことが、後に政党政治を短命に終わらせた理由の一つであったと後世から評価されています。結局、提出した復興予算 30 億円は 5 億円まで圧縮され、当初の計画は実現できませんでした。これが国家的な大きな機会損失であったことは、第二次世界大戦時の東京大空襲時の火災による被害状況や、戦後の自動車社会になって思い知ることとなります。

最近は何も見ませんが、20 世紀中は取引の決済を「手形」という一種の借用証で行うことが一般的でした。経済界がこれだけの被害を受けると、手形に記載してある返済期限が守れなくなる企業が多数発生します。手形が決済できなければ破産です。するとその手形を持っている企業に連鎖倒産が及び、経済が破局的事態になりかねません。この経済の連鎖的破綻を防ぐため、政府は銀行に手形の割引(記載金額から決済日までの利息相当分を差し引いて支払うこと) をさせ、その手形を日本銀行が再割引して引き受け、発行企業が復興できて借金が返済できるようになるまで、日本銀行の危険負担で手形を保管することにしました。これを**震災手形**といいます。非常事態下における国庫による被災企業への救済策です。

昭和金融恐慌： 大戦中の 1917 年にアメリカが金交換一時停止をしたのに追従して、日本も同じ措置を取り、戦後に再び金本位制に復帰する機会を窺っていました。旧為替レートは 100 円が 49.875 ドルでしたが、関東大震災後は復興のために輸入が増え、当時の実力は 100 円が 40 ドル程度でした。しかし、円の切り下げは国辱であるとの意見が強く、政府は高い為替レートを目指した緊縮財政と為替レート誘導策を取ります。当然ですが、輸出は低迷し、物価は下落して日本国内の景気は悪化しました。更に海軍力の軍縮条約のために造船需要がなくなり、不況は深刻さを加え、軍需で一大発展を遂げた鈴木商店が国策銀行であった台湾銀行を

巻き込んで 1927 年に大型倒産します。これが引き金となって全国の銀行に取り付け騒ぎが起こり、高橋是清大蔵大臣は 2 日間の支払い猶予令を發布、各銀行の店頭で現金を山のように積んで預金者を安心させて、一応、金融恐慌を沈静化させました。この非常事態のため、金解禁は延期されました。これ以後、国民は小さい銀行に預けていると危ないと考えるようになり、三井・三菱・住友・安田・第一など五大銀行に預金が集まるようになり、これら財閥の力を一層強化する要因となります。

昭和恐慌：日本経済は慢性的な不況が継続していますが、井上準之助蔵相は金解禁を行うことで為替レートの安定化を図ろうとします。日本は緊縮財政により正貨(金交換を保証する通貨) 3 億円を準備し、1930/1 に旧為替レートによる金解禁を行います。これは実質的な円の切り上げになり、井上蔵相の思惑とは反対に輸出は激減し、解禁後僅か 2 ヶ月で 1.5 億円の正貨が海外に流出しました。経済を正しく理解していないために起こった政策的な大失策でしょう。また、1929/10/24 の「暗黒の木曜日」で始まった世界大恐慌の始まりと重なったのは、運が悪すぎました。

同年 3 月には株式・商品相場が暴落し、生糸・鉄鋼・農産物等の物価は急激に低下します。中小企業の倒産が相次ぎ、失業者が街に溢れました。当時は超エリート層であった大學・専門学校の卒業生の 3 分の 1 が就職できない惨状です。都市部も大打撃を受けましたが、農村部はそれを上回る経済的打撃を受けました。世界大恐慌のために生糸の対米輸出が激減し、デフレと豊作が重なって米価が下落したために、農村は壊滅的な状態となりました。困窮の余り、**青田売り**が横行して買ったたかれ、**欠食児童**や**女子の身売り**が多数出て、社会的に深刻な問題となります。入隊する若者の姉妹が苦界に身を落とすケースも多く、そのような社会的不条理に義憤した青年将校たちが国内で**5・15 事件**(1932/5/15 海軍青年将校たちが首相官邸に乱入して犬飼毅首相を射殺) や**2・26 事件**(1936/2/26 陸軍青年将校率いる麻布連隊が起こしたクーデタ未遂事件。高橋是清等が暗殺された) 等の反乱事件を起こします。これら個々の事件は目的を達せず不成功に終わりますが、この有様を見た国民は恐怖に凍り付き、以後、逸脱が益々激しくなる軍の専横や暴挙に対して、声を挙げる者が殆ど出なくなり、日本は軍人たちがやりたい放題の軍事国家に変貌します。

明治憲法の欠陥・統帥権が遂に現実のものとなる：前巻「人類と社会…近代」の「3.頑張りすぎたドイツ」に「日本の統帥権問題の起源」の項がありました。伊藤博文はドイツ皇帝ウイヘルム一世の助言により、明治憲法 11 条に「天皇ハ陸海軍ヲ統帥ス」と入れました。これは国政は内閣が行うが、戦争は天皇の専管事項だという一国に二つの指揮系統を持つとんでもない条項なのです。君主がその自由意思で他国と戦争を起こせた中世の政体の遺物です。この条項を持つロシア帝国とドイツ帝国は既に第一次世界大戦で滅び、大國でこの条項を持つのは日本だけになっていました。

さて、第一次世界大戦後も戦勝国は海軍力の増強に努めますが、日本では GDP の 1/3 がその建造に当てられるなど、各国の財政負担も厳しい事情がありました。このため、各国の艦船の保有比率を決める軍縮会議が開催され、1922 年にワシントン条約で、英・米・日・仏・伊 5 カ国の戦艦保有比率を 5 : 5 : 3 : 1.75 : 1.75 に取り決め、日本の政府責任者はこれで財政的に少し楽になると内心ホッとしたのです。

ところが国家財政問題など何のその、軍備拡張を強行したい軍や右翼団体はこれでは収まりません。次の 1930 年のロンドン海軍軍縮条約で各国の巡洋艦以下の補助艦艇保有量比率を取り決めたところで、軍の統帥を行う天皇の輔佐を担う海軍軍令部の許可なしで兵力に関わる重要事項を政府が決めるのは統帥権を侵すものだとの論に、野党の犬飼毅と鳩山一郎が同調して浜口雄幸内閣を責め立てます。浜口首相は昭和天皇の裁可を得て、この条約は発効します。収まらない右翼団体の青年が東京駅頭で浜口首相を襲い、首相は受けた傷のために数ヶ月後に亡くなりました。幣原(してはら)喜重郎外相の国際協調外交は後ろ盾を失って行き詰まります。同じ立憲民政党から第二次若槻(わかつき)礼次郎内閣が組閣されますが、早々に倒され、対立していた立憲政友会が犬飼毅内閣を組閣します。

この事件後、日本の政党政治は弱体化し、**軍部が政府決定や方針を無視して暴走を始め、非難に対しては「天**

皇に逆らうのか」と統帥権を行使され、政府がそれを止める手段を失いました。政局のためには軍部の統帥権干犯批判に乗っかってでも相手政党を政権の座から引きずり下ろした犬飼・鳩山両氏の党利党略は、現在では政党政治の自殺であったと認識されています。

軍備拡張にひた走る日本： 犬飼毅内閣の高橋是清蔵相は、直ちに金輸出を再禁止して管理通貨制度へと移行します。民政党政権が行ってきたデフレーション政策を 180 度転換させ、軍事費拡張と赤字国債発行によるインフレーション政策を執ります。金輸出禁止政策は成功し、円相場は一気に下落して円安に助けられて日本の輸出は急増し、1933 年には他の主要国に先駆けて恐慌前の経済水準に戻しました。景気回復に成功した高橋蔵相は、急拡大した軍事費を平常水準と思われるレベルへ引き下げようと試みますが、勢いづいた軍部がこれに従う訳がありません。高橋蔵相は **2・26 事件** で陸軍の青年将校に暗殺されます。

この日本の輸出急増がイギリスの貿易障壁構築の原因になっているのですから、「因果は巡る糸車」です。世界のブロック経済化が進むと、窮地に立たされた日本は、日満支(日本・満州・中国)円ブロックの構築を目指して、大陸進出を加速させます。それは当然、欧米列国が既に中国に持っている権益を何らかの形で侵すことになり、欧米列国は日本に対する不満を蓄積させて行きます。東アジアにも硝煙の匂いが漂う気配が濃くなってきました。第二次世界大戦のマグマは噴火点に近付きつつあります。今になって、あの時点でこうしておけば、アメリカと戦争にならなかったという人がいますが、世界史の視点からは、もう、この時点で、日本は引き返せないポイントを越えてしまっているようです。

この過程を見ていると、ウイルヘルム二世のドイツ帝国が軍備拡張にひた走って、第一次世界大戦を引き起こした経緯と似通った面が多いようです。日本の有力者には「歴史に学ぶ賢者」がいなかったのでしょうか。

4・6 アメリカの不況対策

不況が浸透するアメリカ： 建築は 1925 年にピークを付け、工業生産指数は 1929/6 にピークを付けており、何れも 1929/11 の株価の暴落以前に実体経済の不況が始まっていました。景気の最悪期は 1933/3 であり、好況期(1923~25 年)を 100 とすると、卸売物価は 66、工業生産指数は 60、建築は 14、工場雇用者数は 61、工業労働者賃金は 38 に減少し、精神病者の数は 3 倍に増えています。

失業者を最も多く出したのは、耐久生産材と建築の分野で、何れも不況期には購入を先延ばしすることができる性格のものです。しかも、未熟練労働者より熟練労働者の方が打撃が大きく、また、中高年層よりも青年層に失業者が多かったです。将来への希望が全く失われ、生活費を切り詰めて行かねばならぬ状態では、人間は決して幸福にはなれません。

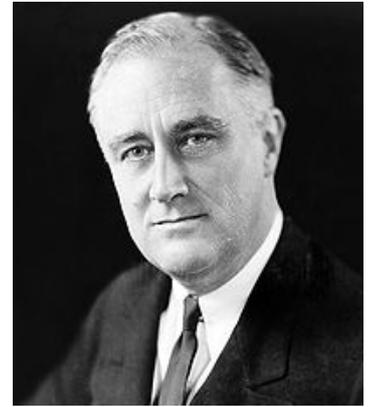
人々は新車購入を控え、若夫婦たちは親の家に居候し、旅行や観劇が控えられて米国のシンボルのようなパーティも減り、休日には家に引きこもる人が増え、洋服の新調も躊躇するようになります。こうして不況はスパイラル状に悪化して行きました。紳士が帽子を被るのを止めて、無帽が定着したのも、お手伝いさんが一般家庭から姿を消したのもこの時期です。

フーヴァー大統領は公共事業を活発に行い、政府自身の雇用拡大に努め、外国移民の流入を食い止めて国内の雇用を守ろうとします。しかし、その程度の対策では、恐慌の進行を食い止めることはできませんでした。

ルーズベルト大統領の登場： 共和党のフーヴァー大統領は貧しい農家の出身で、自分の努力により地位と富を得た立志伝中の人です。彼がこの非常事態にも民間会社に対する政府の干渉を極力排除しようと努めたのは、彼がアメリカは機会の国、自由の国という伝統的価値観に捕らわれていたからです。

対照的に大統領選挙の民主党の挑戦者フランクリン・ルーズベルト (Franklin Delano Roosevelt) は、名家の出身で、社会的地位と富に恵まれていましたが、社会改革を恐れない進歩的な考え方の持ち主でした。政治家としてのキャリアの途中で小児麻痺に冒され、苦しい闘病生活を経て政界に復帰しています。彼は車椅

子の身ながら、人も驚く精力的な選挙活動を実行し、恐慌の最中の 1932 年に大統領に当選し、ホワイトハウスに入るや否や、精力的に活動開始します。3/4 の大統領就任式は土曜日で、月曜日には全国の銀行に 4 日間の閉鎖を命じ、9 日には緊急銀行救済法が議会を通過し、特に不健全な銀行以外は再開し、最悪の事態は免れました。最初の 100 日間に彼は予め用意した多くの New Deal(新しい取り組み)諸法案を成立させたので、これに感銘を受けた人々は、この期間を One Hundred Days と呼んでいます。これらは CCC の創設、農民救済、テネシー溪谷開発公社(TVA)、全国産業復興法、住宅所有者再融資法、連邦緊急救済法、通貨インフレの権限賦与法などです。多数の失業者や資金困窮者を政府が直接救済し、景気回復のための大型公共投資を行う政策であり、資本家も労働者も共に大歓迎しました。



ルーズベルト大統領

(Wikipedia)

彼は 3/12 からラジオを通じて「炉辺談話」と称し、繰り返し「みんな自信を持って景気回復に取り組もう」というメッセージを親しみやすい口調で判りやすく国民に語りかけます。

国民はそれに励まされて、勇気を取り戻して行きました。

CCC(Civilian Conservation Corps) とは失業率が特に高い青年層(17~28 歳) を志願で募集し、技術を教え、軍隊的な団体訓練により協調性涵養とモラル向上に努め、道路建設、山火事の予防工事、土壌改良工事、植林などの国家公共事業を行い、1 ヶ月に 30 ドルの給与を渡したが、その内の 25 ドルは強制的に家庭に送金されました。雇用から外れた青年たちの救済事業です。団員として 2 年間働いた者は多くの雇用者が争って雇ったというから、New Deal 政策の中でも最も成功したものでしょう。1935 年には団員は約 50 万人います。全国青年局は学業途中で困窮のために退学する者のために、各種のアルバイトを与えたり、奨学金を支給する救済事業も実施し、1937 年には約 63 万人がその恩恵に浴しました。

New Deal は多数の失業者を直接救済することから始め、大規模な社会保証制度を創設し、農村の復興計画や婦人や少年の保護にまで政策が及びました。

1930~1933 年の政府歳出は平均年額 40 億ドルでしたが、New Deal が始まると、政府歳出は 1934 年には 60 億ドル、1937 年には 84 億ドル、1940 年には 96 億ドルに昇りました。このための資金は、連邦政府が発行する国債(国の借金)で賄われます。それまで連邦政府が発行していた国債は約 160 億ドルでしたが、1930 年代には約 420 億ドルにまで膨張しています。幸い、国債は支障なく消化(買い取られる)されています。

政府は増税も行います。1931 年の連邦税収合計は 27 億ドル(GDP の 4.5%)ですが、1941 年には 76 億ドルに達しています。New Deal は**富の平準化、社会格差の緩和**という社会政策の実施を税制改革で行っています。例えば、土地資産税は 4 倍に引き上げられ、付加価値税や配当金課税等を引き上げ、1936 年には年間 10 万ドル以上収入のある者は、50%以上を国税として収めています。ルーズベルト大統領は「年間 35,000 ドル以上の実収入は不必要だ」とまで断言しています。

ジェファソンの時代には、「弱ければ弱いほど良い政府だ」といわれていたアメリカが、政府により大規模な統制経済が行われる社会主義国になったような大変革でした。

個人の権利は勿論尊重されますが、社会の平等を無視することは許されなくなったのです。自由主義による野放しの資本主義は修正され、全ての企業がある程度の政府統制を受けるようになりました。

ケインズ経済学が取り入れられ、ケインズによれば「賢明に管理された資本主義」、ガルブレイスによれば「社会的に管理され、方向付けられた資本主義」にと大きく変貌したのです。

1937 年には景気が自律回復したと誤認して、**財政健全化のために金融引き締め**に転じ、再び景気の悪化に見舞われ(ルーズベルト不況)、世界の他の工業国に比べてもアメリカの景気回復は遅れています。New Deal だけでは工業の回復までは果たすことができず、第二次世界大戦に入る直前のアメリカの潜在工業生産力は

1929年に比べて約25%も増強していましたが、失業者の数は依然950万人に達していました。New Dealは庶民の購買力拡大には有効でしたが、それだけでは工業生産の活況を取り戻すには不十分だったのです。これは大変に微妙な問題を孕んでいます。要約すれば、当時のアメリカは国内外の需要を上回る工業生産力を保有していたのであり、平時では活用しきれない工業生産力は、戦争のように物資を無制限に消耗する状況で始めてフル生産を達成できるということです。ある意味、何らかの**戦争特需が秘かに期待されている**のです。こんな恐ろしい工業国を相手に、戦争を仕掛けた日本の軍部は何を見ていたのでしょうか。

4・7 ソ連の計画経済

5ヶ年計画の成功：1917年の赤色革命(共産主義革命)成功後、ロシア国内では赤軍と白軍(旧体制派)との内戦が1922年まで続きました。内戦終結後に第一回全連邦ソヴィエト大会が開催され、1022/12/30にソヴィエト社会主義共和国連邦(ソ連)の樹立が宣言されます。(“ソヴィエト”は“評議会”の意。この国名は地域要素が入っていない稀な例)

1028年からソ連の第一次五ヶ年計画が始まり、以後、第二次、第三次と継続して実施されます。これは一党独裁体制を固めたソ連邦共産党の指導による重工業重視、農業集団化、大規模公共事業、電力網建設等を核とする総合経済政策であります。ソ連政府の公式発表によると、1928年→1932年→1937年で鉄鋼生産高は330万ト→620万ト→1450万ト(4.4倍)、電力能力は550万kW→1,350万kW→3,620万kW(6.6倍)など、重工業部門で大きく生産量を伸ばしています。ソ連外の研究によると、この10年間の増加率は、GDP(国内総生産)が年率4.6%、鉱工業生産が年率10.5~16%、機械工場数が年率27.4%となっています。

この成功により、ソ連はソ連型社会主義と呼ばれる独特の社会体制を構築しました。以後もゴスプラン(国家計画委員会)による長期経済政策の策定、各機関による計画の実行が行われます。この国家による計画経済の目覚ましい成功は、大恐慌で落ち込んでいる世界各国に大きな驚きを与えました。イギリスに政府が積極的に経済政策へ介入する**ケインズ経済学が登場**し、自由主義の国アメリカでルーズベルト大統領が社会主義的色彩の濃いNew Deal政策を実行できたのも、ソ連の計画経済の大成功がその援軍となっています。

スターリン時代の始まり：この計画経済を推進したヨゼフ・スターリン(Joseph Stalin)とはどんな人物なのでしょうか。20世紀には絶対権力を握って国民に大きな犠牲を強いたカリスマが何人も現れています。結果を見ると、カリスマが国民のためになっているケースは殆どありません。**カリスマは国民にとって不必要で危険なだけだというのが歴史の教訓です。**その一人、スターリンは共産主義革命をロシアとソヴィエト連邦に徹底するために、国民に**処刑とシベリア送りの恐怖政治**を以て国家を運営した恐るべき人物です。

ロシア共産主義革命(赤色革命)の功労者レーニンが1924年に逝去すると、直ぐに後継者の座を争って、権力闘争が始まります。スターリンは1922年に共産党の書記長の座に着き、目立たぬようにですが書記局を核とする党の諸機関をがっちり把握します。まず、三頭指導体制の仲間二人を使ってレーニンに次ぐ革命の功労者トロッキーを政治的に失脚させて国外追放し、亡命先のメキシコに刺客を送って暗殺します。次にその仲間二人を「右翼偏向」のレッテルを貼って解任し、処刑します。1926年に「ソヴィエト刑法」を成立させますが、それは「社会主義に有害な行為は全て犯罪となり、犯罪者は刑罰でなく社会防衛処分に付される」と規定しています。これは自分の政策路線に合わない者たちには「**社会の敵**」のレッテルを貼って、皆、流刑か処刑にできる恐るべき内容です。ソ連には人間の人権など存在しなくなりました。ドイツのナチス刑法がこれと同様の内容を持っています。全体主義国家は反対意見を認めず、反対者には「**人民の敵**」とのレッテルを貼って排除するのです。



スターリン
(Wikipedia)

1929年にはスターリンの指導権は完全に確立され、あらゆる新聞雑誌が彼の写真を大きく掲げ、功績と栄誉を褒め称えます。共産主義における個人崇拜の始まりです。恐怖政治の下、スターリンはソ連の神になったのです。

そして、この構図が中国、ベトナム、東欧諸国など、これから共産主義政権ができるところで再生産されます。何と言いつても、共産主義と人権無視はセットになっていることを歴史が証明しています。

農業集団化の真実：確かに農民は革命前より生活環境は良くなりましたが、消費物資等が不足気味で、農民の生産意欲は高まりません。総人口は増加するのに、農業生産物は天候に支配されて、1927年以後、都市への食糧供給が不足し始めます。

費用を掛けずに確実に食糧を都市に供給するために、スターリンは食糧危機はクラーク(富農)がサボタージュしているためだとでっち上げ、クラークをscape-goat(身代わりの山羊)に仕立てます。「貧農大衆は英雄的な党に指導されて、搾取者クラークに対する階級闘争に立ち上がれ」というプロバガンダ(宣伝)を流します。

1928年の夏、クラークと見なされた農家は家捜しされ、穀物を没収されます。

農民たちはどこそこの家が穀物を貯め込んでいるとお互い同士で告発し合うことが奨励されます。1929年の秋にはクラーク攻撃は最高潮に達し、クラークとその家族の土地財産は没収し、追放させます。

併行して農業集団化が始まります。村単位でコルホーズという集団農場を構成し、農民は土地や生産手段を共有し(共産し)労働の質と量に応じて現物や貨幣で分け前を貰う仕組みです。新しく作られたMTS(機械・トラクター・ステーション)が農業機械を独占し、一定の収穫量の代償としてコルホーズに技術サービスを提供しますが、同時に党の眼・耳・腕としての農民の政治教育をやり、集団化の敵、体制の敵を除く政治的機能を果たしていました。集団化を通じて、農業は社会主義化された経済と一体化されました。

農業集団化には大きな犠牲が伴いました。1929～1932年に少なくとも500万人の農民がクラークとの烙印を押され、財産は没収されて生活の手段を奪われ、約100万人が死亡しました。

また、1933年の天候不順による大飢饉でも軍隊を動員して穀物を取り上げられたために、ウクライナ等でおよそ700万人(300～1,000万人の推定あり)の農民が餓死しています。

この施策で政府が得たのは、農業生産物の流通量が2.5倍になったことですが、これは総生産量が増えたためというより、むしろ、農民の取り分が減らされたためです。ロシア農民はスターリンの野望のために、再び、ツァー(ロシア皇帝)時代のように農奴化されたのでした。

農業集団化により新しい特権階級(ノーメンクラトゥーラ：“登記された人々”の意)が出現しているのを見逃してはなりません。MTSの役人や技術者、コルホーズの議長や書記、現場監督などは農民に対して権力を振るう一種の特権階級となったのです。この特権階級を手足のように使って、スターリンは国家の隅々までを支配します。これは一種の分割統治(Divid & Rule)です。この支配構造は、その後、国家の隅々に行き渡ります。即ち、特権階級に対する大衆の妬みを掻き立てながら、特権階級には大衆を抑える大きな権力を与えています。こうすることにより、お互いに信頼し合う気持ちをぶち壊し、お互いに自発的に連携することを不可能にし、結局は体制に対する無条件の忠誠心を強めています。

働け！働け！働け！！：第一次五ヶ年計画の初期には労働力の流動性が高いのが悩みの種でした。1930年から数次に亘り規則強化が始まり、1938年には全ての賃金労働者に「労働手帳」が渡され、簡単に勤務先を換えることができなくなりました。国防産業等では公の許可無く労働を放棄すると、軍法会議にかけられて5年以上の強制労働を課されます。

このような強制手段だけでは、労働生産性は上がりません。政府は報奨手段にも訴えます。「社会主義競争」に参加する突撃労働者たちは生産競争をやり、生産記録を破った者は「労働英雄」となり、衣食住で優遇されました。1935年には炭坑で大記録を打ち立てた労働者の名に因んで「スタハノフ運動」が大々的に宣伝されます。あるスタハノフ主義者の記録が破られると、破られた記録が賃金計算のノルマ(基準)となります。

「遅れた労働者」はこのノルマの重圧に苦しみ、賃金格差は非常に大きくなりました。こうして労働者階級は選ばれた労働貴族と、大多数の貧しい労働者との奇妙な組み合わせになりました。共産主義革命の平等主義の原則は、どこかへ消えてしまいました。

粛清の凄まじさ： 第一次五ヶ年計画の好成績な総決算が出て、1934年に「勝利者たちの党大会」と名付けられた第17回党大会が開かれました。この年末、スターリンの右腕と言われたキーロフが党本部で暗殺されます。これに復讐する名目で大量の共産主義者が粛清されました。第17回党大会の139名の中央委員の70%が逮捕、銃殺されました。代表1965名中、1180名が「反革命の罪科」で逮捕され、刑務所、強制労働収容所に送られました。他の機関にいた数千名の党員も犠牲になりました。一般市民でも現体制に単に敵意を持っているとみなされたグループに属している人たちも逮捕されました。

1937年には赤軍建設の功労者・参謀総長トハチェフスキー元帥以下8将軍が銃殺刑に処され、5000名の将校が反逆者として死んでいます。

非ロシア諸民族での粛清も凄まじく、ポーランドの例では、共産主義者は殆ど銃殺または投獄され、1938年にはポーランド共産党はコミンテルンによって正式に解散されています。

粛清の実行責任者の名に因んで「エジョフシチナ」と呼ばれる大粛清の最後は、秘密警察そのものでした。1938年、エジョフはそのポストを追われ、姿を消しました。警察の要人、強制労働収容所の所長、粛清を処理した裁判官が犠牲者と同じ運命を辿りました。

大粛清には三つの意味がありそうです。①競争者や批判者を一切排除する、②容赦ない粛清により人民に恐怖心を植え付け、恐怖政治を行い易くする、③人民を抑圧する中間層を粛清して、人民の歓心を買う。

何れにせよ、**五ヶ年計画と大粛清**により、ソ連は**全体主義国家**として確かなものとなりました。

第4章で参考にした文献：

「世界の歴史14／第一次大戦後の世界」江口朴郎／中公文庫

Wikipediaの関連記事多数：フランクリン・ルーズベルト／昭和恐慌／昭和金融恐慌／ソビエト連邦／第一次5ヶ年計画／等

5. 日中戦争

5・1 大日本帝国が手掛ける絶え間ない戦争

第一次世界大戦(1914~)⇒世界大恐慌⇒第二次世界大戦(~1945)を「**第二の30年戦争**」と呼ぶ歴史家もいるくらい、この30年間は戦争だらけで、世界大恐慌の間でさえ、世界のどこかで戦争が行われています。特に大日本帝国はひっきりなしに戦争をしており、それが最終的にアメリカとの太平洋戦争に雪崩れ込んでいます。その経緯を説明しましょう。

前巻「人類と社会・・・近代」で、日本が危うく西欧諸国の植民地になる危機を「明治維新」という特大級の革命で短期間で近代化を果たして切り抜けた事情を説明しました。西欧諸国の力の源泉が、近代化した技術と社会組織にあることを見抜き、相手の武器を自分に取り込むことで相手に対抗したのです。

このような事例は、歴史上、無数にあります。エジプト人は一時期、中東のヒクソス人に支配されながら、相手の戦い方を自分のものとしてヒクソス人を追い払いました。ダビデはペリシテ人の傭兵となって相手の鉄製武器と戦術を自分のものとして、ペリシテ人を究極的に追い払い、ユダヤ国家を強固にしました。

アメリカン・インディアンは西欧人が持ち込んだ馬と鉄砲を自分のものとして、アメリカ人と戦っています。

驚異的な短期間で近代国家となった日本は、国運を賭けて日露戦争を行い、辛うじて勝ちを得ますが、それですっかり有頂天になり、今度は近代化が遅れているアジア諸国を、手にしたばかりの近代化の力を行使して、自分の植民地に組み入れる醜い帝国主義国家に変貌しています。

最初の内は中国の東北地方(満州)からロシアを排除して鉄道や鉱山の利権を確保し、第一次世界大戦ではタナボタ式に中国でのドイツの利権を奪います。大戦末期の**シベリア出兵**ではロシア東部を新たなターゲットにしますが、共産主義革命で大混乱状態にありながらも流石にロシアの民衆の抵抗は手強く、4年間の出兵にも拘わらず日本軍は遂に何物も得ることなく、惨めな撤退をさせられます。

勝てそうな相手は誰か？日本は目を中国に転じます。中国(当時は清国)は国家体制の近代化に失敗して、西欧諸国の侵略を受け、半植民地状態にありました。このダメージは大きく、世界史で常に世界人口のほぼ1/5を占め、アジアの宗主国家であり、文化の発信基地であり続けた中国が、「**失われた200年**」と呼ばれる暗黒時代に陥ります。結果的に、弱体化した中国に最も露骨に付け込んだのが日本でした。この過程で、中国内に既に権益を確保している西欧諸国との激しい利害衝突が起こります。それが日本への強烈な反感となって蓄積し、多くの欧米諸国を敵に廻す伏線となります。

5・2 日中戦争の全体像

右の地図を見てください。ピンク色の部分は、日中戦争で日本軍が攻め込んで行った中国の領土です。貴方が中国人だったら、日本人に対してどんな感情を持つでしょうか。

200年の眠りから覚め、再び大国の地位を回復した中国と、否応なく付き合い行かねばならぬあなた方の世代は、この過去の不幸な歴史を忘れてはなりません。

日中戦争は宣戦布告なしに1937/7/7に始まっており、日本側では支那事変、日華事変などと呼んでいます。戦争と銘打つと、



日中戦争により日本軍が侵略した地域 (Wikipedia)

開戦の大義名分を世界に明らかにしなければならないのを避け、中国の弱味に付け込んで得た日本の権益や、その権益を仕事の種とする居留民を守るための自衛行動だと矮小化した定義付けをしているのです。だが、この侵略範囲の広さを見ると、これが侵略でなくて何なのでしょう。

一方、中国側も日本に対して宣戦布告をすると、戦時国際法上、日本と戦争していない諸外国は中立を守る義務が生じ、中国に武器・弾薬・軍事物資を送り、軍事顧問団等を派遣することができなくなります。これを避けるために、敢えて宣戦布告をしません。

近代化では出遅れたものの、中国でも人権思想は高まり、民族国家としての意識が高揚しています。しかも中国は国際社会から独立国家として承認されています。そこに異国の軍隊が政府を威圧して得た権益を守るために中国の国土に進駐しているのですから、軍や民衆の反日感情が高まり、問題が起こらない方が不思議です。

日本の行動パターンは、①中国の国力の弱さに付け込んで権益(鉄道敷設・運営権、鉱山開発権、港湾利用権等)を獲得する、②権益と日本人居留民を守る名目で日本軍を派遣する、③中国軍と日本軍が何らかの理由(居留民の安全が脅かされた、中国軍から攻撃を受けた等)で戦火を交える、④悪い中国軍を懲らしめるためとの名目で、中国軍を追って日本軍が奥地に進軍する、⑤占領地を支配し、更に権益を拡大する、です。

中国軍に自国を守る実力が備わっていれば、中国の国土の中で日本軍にこんな勝手な行動をさせる訳がありません。あなたが中国人だとして、日本軍に対してどんな思いをするだろうか、自分で考えてご覧なさい。翻って、現在の日本は第二次世界大戦の惨禍に懲りて、日本国民は日米防衛協定に安住して日本国の防衛をアメリカに任せ、仮にアメリカ軍が敵に攻撃されても日本は助けに行かないと決めた現在の憲法(或いはその解釈)が、国際常識から見て、正気の沙汰ではないと気が付いてください。

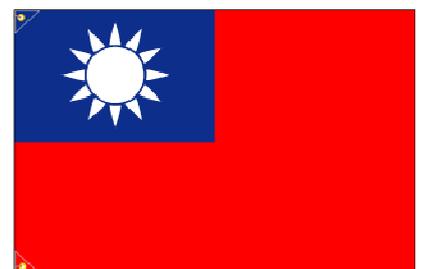
当時の中国は 1912/2/12 に 268 年間続いた満州族が支配した清王朝が滅び、孫文等が国民国家として創設した**中華民国(the Republic of China)** はまだ全国を統一しきっておらず、清王朝により地方に配置された複数の方面軍がそのまま居座って地方政府機能を持つ軍閥となり、**中国各地に軍閥が割拠**していた時代です。中国の歴史は、王朝が倒れ、地方に群雄が割拠し、その中の最強の者が新しい王朝を設立するというパターンの繰り返しです。ところが、今度は満州族のような騎馬民族ではなく、西欧や日本のような強力な近代国家が、中国の弱味に乗じてその支配権を狙っているのですから、事態は過去より遙かに深刻です。

日本は満州からロシア勢力を駆逐し、満州鉄道の権益と日本人を守る守備隊を進駐させ、その線状の勢力範囲を、何れ機会を見て面状に広げたいとの大きな野望を抱いていました。

1928年に南京中央政府に迎えられた蒋介石は国民革命軍総司令官に任命され、東北部(満州)に本拠を置く軍閥を南京中央政府に従わせるために、大挙して北伐を再開します。済寧が落ち、界河が占領されると、嘗てドイツから奪取した山東の利権を中国軍に荒らされないように守る名目で、日本の田中内閣は 1928/4/19、第二次山東出兵を行います。結局、済南城を守備していた日本軍と、済南城に入城してきた国民革命軍との間で衝突する済南事件が起こってしまいます。

済南事件で北上の氣勢を削がれはしますが、国民革命軍は南から北京に迫ります。安国軍総司令官張作霖は北京で最後の戦いを志しますが、田中内閣はその戦いで張作霖が敗れば、敗兵が雪崩を打って満州に逃げ帰り、国民革命軍がそれを追撃して折角支配権を拡大しつつあった満州が戦乱で混乱することを恐れ、張作霖に速やかに奉天に帰り、満州の治安維持に当たれと説きました。それを信じた張作霖が特別列車で北京を去り、彼の本拠地である瀋陽に近づいた時、日本軍の謀略により爆殺されます。

張作霖の後を継いで新しい満州の支配者となった息子の張学良に対し、



青天白日旗 (Wikipedia)

日本は彼を傀儡として満州の支配権を得ようと接触してきますが、張学良は本心を表さず治安の維持に努め、1928/12/29、彼の支配下にある奉天、吉林、黒竜江の東北三省は一斉に南京国民政府の旗である青天白日旗を掲げ（東三省易幟）、南京中央政府の支配下に入ったことを宣言します。

張学良は父の宿敵である南京中央政府と組み、**小異を捨てて大同に就いて、中国を統一国家となして日本の侵略から守ろうとしたのです。**

日本にこれ以上、勝手な真似をさせたくない列国も相次いで南京政府を中国の中央政府として承認し、南京政府による**中国再統一**は成就しました。国名は中華民国とし、政府主席には蒋介石が就任します。

蒋介石は中央集権のために各地に群衆する軍閥の徴税権や武器製造権を南京国民政府に帰属させようとしませんが、各地に残存する軍閥は清の滅亡で得た一時的な権力を手放したくなく、これに反撥して反蔣運動が繰り返し発生しています。しかし、アメリカを中心とする諸外国の経済支援は次第に南京国民政府の経済基盤を強固にし、南京国民政府による全国統一が軌道に乗るかと思われた時に事件が起こりました。

5・3 満州事変

1931/7/2 の万宝山事件(朝鮮農民と中国農民の用水争い)、日本の密偵隊が禁止地域に立ち入って中国軍に殺害された中村大尉事件を経て、関東軍と中国軍の緊張が高まります。

1931/9/18 夜、柳条湖付近で満州鉄道線に爆破事件が起こりました。実行したのは関東軍なのですが、関東軍は事件の張本人は中国軍だと宣言して、張学良の精鋭部隊を攻撃しました。

日本政府は翌 19 日に緊急閣議を開き、幣原外務大臣はこれは侵略をしたいために関東軍の謀略ではないかと疑惑を表明し、外交活動でこれ以上の事件の拡大を防ごうとしますが、21 日には林銑十郎中将が率いる朝鮮軍が独断で越境して満州に侵攻したため、柳条湖事件は国際的な事変に拡大しました。

関東軍参謀は、本間司令官を押し切り、政府の不拡大方針や、陸軍中央の局地解決方針を無視して、自衛のためと称して戦線を拡大します。独断で越境した朝鮮軍の増援を得て、管轄外の北部満州にまで進出し、各地の張学良軍は掃討され、1932/2 月のハルビン占領によって、関東軍は中国の北東部(満州)を制圧しました。

陸軍参謀の暴走が始まる： 出先の関東軍や朝鮮軍が、中央政府の不拡大方針に従わずに自分勝手に戦線を広げ、中央政府がその既成事実を追認する、指揮系統が機能不全に陥った日本の姿は、もはや近代国家の態をなしていません。これも前年の統帥権干犯問題で、犬飼・鳩山氏らの政党人が**党利党略を優先して政党政治を弱体化させ、軍部の独走態勢が成立した**ためのことです。

軍部の中でも参謀たちが事実上の決定権を握り、執行者であるべき司令官はそれに従わされるプロシヤ陸軍型の危険な指揮体系が成立します。本来なら作戦の成否の全責任は司令官にあり、参謀は作戦の助言者であり、脇役であるべきです。ところが、日本陸軍では参謀本部から派遣されて方面軍参謀課に入った参謀は、本部への報告を通じて人事権に介入でき、人事権をちらつかされて司令官は参謀の意見に半ば強制的に従わされてきました。それでいて、戦争に負けると参謀は責任を回避し、「自分は意見を述べただけで、負けた責任は勇気や知力が不足した司令官にある」と責任を擦(なすり)付けます。現実にこの行動パターンがこれから起こるノモンハン事件や、太平洋戦争や、敗戦後の戦犯責任問題などで繰り返して現れます。海軍では参謀は戦略・戦術の助言、司令官が自己責任で決断を行なう指揮原則が守られていました。

実は、この「権限がない筈の人が、大きな権限を振るう」パターンが敗戦後の自民党の政治にも色濃く現れています。本来、役職を離れて責任を持たない筈の閣将軍田中角栄や金丸信が、キングメーカーとして幾人もの歴代首相を決め、思いのままに国政を操っています。他にも院政に似たケースは日本の随所で見られ、恐ろしい事ですが、この行動パターンは日本人の DNA に染みこんでいる可能性があります。

普通の近代国家では、参謀の助けを借りながら、**司令官が自分の責任で作戦計画を決断し、実行する**ものです。如何なる場合も、**全責任を負うラインが優先すべきで、スタッフを優先させてはなりません。**

5・4 満州国の建国

日本軍の満州への侵略は、中国の軍事的弱体に付け込んだ横暴な振る舞いとして国際社会から激しい非難を浴びます。とても朝鮮のように、満州を日本に併合することは無理だと見た関東軍の特務機関は、清朝のラストエンペラーであった宣統帝・愛新覚羅溥儀に働きかけ、溥儀は満州民族の国家である清朝の復興を願って1932/3/1に満州国が建国され、溥儀が執政に就任しました。

3/12には犬飼毅内閣は「満蒙は中国本土から分離独立した政権の統治支配地域であり、逐次、国家としての実質が備わるよう誘導する」と閣議決定します。政府として満州国を承認することに慎重であった犬飼首相は、同年の5・15事件で海軍の青年将校たちに暗殺されます。

国際社会における日本の力関係を良く理解し、無謀な軍事行動を押し止めようとする良識ある国家中枢の要人たちが、次々と青年将校たちに暗殺され、日本は暴虎馮河(ぼうこひょうか:“虎を手で打ち、河を歩いて渡る”「無謀な勇氣」「血気の勇に逸る」の意)の勢いで大陸侵略へ突進します。

1932/9/15、日満議定書により日本国民が満州国内に有する特権が確認され、日本軍の満州国内での駐屯が正当化され、日本政府は満州政府を正式に承認しました。翌年3月、溥儀は満州国皇帝に即位し、再び宣統帝となります。

5・5 日本の国際連盟脱退

中華民国は国際世論を背景に国際連盟(League of Nation)に日本の暴挙を提訴します。国際連盟は実情調査のためにリットン調査団を派遣し、約5ヶ月に亘って各地を調査し、1932/10月に報告書を公表します。報告書は慎重な言葉遣いながら、満州事変の責任が日本側にあることを明確に指摘し、国際連盟の管理下で満州を事件前の状態に戻すことが事態の円滑な解決方法であると提案しました。次いで国際連盟は臨時総会を開き、アメリカ、ソ連を含む19カ国からなる委員会に満州問題の解決提案を委託しますが、19カ国委員会の提案も満州国を否認し、中国の主権が満州に及ぶことを前提にしたものでした。1933/2/24、19カ国委員会の報告書が国際連盟で採決され、賛成42、反対1、棄権1で採択され、日本側代表 外相・松岡洋右は評決を不服としてその場で退席します。

日本は国際連盟を脱退し、軍事制裁規定を持たぬ国際連盟からはそれ以上打つ手はありませんでした。

日本は国際連盟を無視し、力づくで満州国を既成事実化します。第二次世界大戦後に結成された国際連合(United Nations)は、この欠陥を補って、国連の勧告に従わぬ場合は国連軍を編成して、軍事的に制裁できるシステムを採っています。

尚、国際連盟を脱退したのは日本だけではありませんでした。1935/10/21にはドイツがジュネーヴ軍縮会議で、ドイツだけが不平等に扱われているとの理由で国際連盟を脱退します。

イタリアはエチオピア侵略を非難されて各国から経済封鎖を受けて1937/12/11に国際連盟を脱退します。

ソ連はフィンランドを侵攻したことを非難され、1939/12/14に国際連盟を除名されています。

日本の横車に怒った各国は、個別に軍事物資の提供や、軍事顧問団の派遣などで南京政府への支援を始めます。この時点で、日本は世界を敵に回し、破滅への戻れぬ道を歩み出しているのでしょう。

アメリカは嘗て満州鉄道を日本と合弁で建設・経営する契約を成し、中国市場の開拓を期待して日露戦争講和の仲介の労まで執ったのに、調子が良くなった日本が約束を踏みにじって中国の権益を独占し、更なる膨張を目指すのを牽制するために、武器や軍事物資を提供し、軍事訓練教官等を派遣します。1937年からは義勇軍と称して空軍 Flying Tigers を派遣して、事実上、日本と交戦しています。

ソ連は中国における共産勢力の拡大のために、紅軍(中国共産党軍)を始めとする抗日武装組織に大量の武器・弾薬の支援を行い、後の張鼓峰事件やノモンハン事件では現実に関東軍と交戦しています。

ドイツは第一次世界大戦で東アジア・太平洋地域でのドイツの権益を、日本が奪取したことへの恨みで、ヒッ

トラー承認のもとで軍事顧問団を派遣して陣地構築の指導、軍事訓練や武器の輸出を行っています。中国側にはこれらの強力な応援団が付き、日本の軍部が抱いていた「対支一撃論」(中国侵攻は強力な一撃により短期間で達成できる)の雲行きは怪しくなってきました。

只、中国側にも一枚岩でない弱味がありました。国際的に国家として承認されたのは蒋介石率いる中華民国ですが、蒋介石の採る督戦隊戦法(自軍の兵士を逃げられないようにして強制して戦わせる)、ゲリラ戦法、焦土戦法は、兵や民衆の犠牲が大きすぎてとてもついていけないと中華民国政府から袂を分かって1938年に中華民国南京国民政府を立ち上げた汪兆銘のように、日本とは「一面抵抗、一面交渉」を志した人もあります。各地の軍閥でも張学良のように小異を捨てて大同につく国士的な思想の人もいれば、満州国の驚異的な近代化の進展を見て、日本に秋波を送る軍閥もいます。更に共産主義革命を目指す紅軍もいます。これらが時々の情勢に応じて、蒋介石側についたり、日本側についたりして複雑な様相の戦いになっていました。1934～36年頃は蒋介石は日本と正面から争って体力を消耗するよりも、内政の強化による体力涵養を優先し、当面の目標を、①紅軍の討伐、②直属軍以外の雑軍の整理、に置いていました。このため、日本軍との間には、一時的な平穏状態が生じていました。

満州から追い出されて北京・天津地区に駐屯していた張学良の東北軍は雑軍扱いで、紅軍との戦いを担っていましたが、張学良は紅軍は同胞で、本当の敵は日本軍だとの強い信念があり、東北軍と紅軍の間に一種の休戦状態がありました。戦意を失った東北軍を督戦するために、1936/12月、蒋介石が自ら西安に乗り込んできます。張学良はこれを捕らえ、周恩来を含む共産党の代表者3名を飛行機で招き、監禁中の蒋介石に紅軍幹部らは内戦停止と抗日戦の発動を説いたといわれます。釈放された蒋介石が南京に帰り、張学良は自ら罪に服するために南京へ赴き、**国民党と共産党の内戦は停止**しました。この**西安事件**の後、中国側には国家としての総力を挙げて、日本の侵略に対抗できる態勢が整いました。

5・6 日中戦争勃発

1937/7/7、夜間演習中の日本北支派遣軍の一部隊が北京郊外の**廬溝橋**付近で、中国軍から射撃を受けます。日本側と中国側の対応が互いに相手を刺激する方向に進展し、事態は急激に悪化し、7/28、日本の北支駐留軍は中国軍に対して、総攻撃を開始しました。8/9には似たような事件が起こり、8/13から国際都市**上海**で各国居留民の面前で、中国軍の精鋭と日本軍の戦いが繰り広げられました。当然、諸外国のメディアは戦争の状況を生々しく報道し、**諸外国の世論は中国側に同情的になります**。それこそ、蒋介石の真の狙いでした。11/6には日本軍は杭州湾に敵前上陸し、首都南京へ迫ったため、背後を衝かれた中国軍の防衛戦は崩壊し、12/13に南京城が占領されます。中国軍の司令官は逃亡し、指揮系統を失った兵隊は大混乱に陥り、軍服から平服に着替えたために兵士と市民の見分けができなくなり、悪名高い**南京大虐殺**が発生しました。

翌1938年に日本軍は海沿いに青島(ちんたお)、威海衛、廈門(あもい)、連雲港、広東(かんとん)を逐次占領、南北両方面から迫った日本軍は50万人の中国軍と徐州で開戦して破ります。同年10月に、国民政府は奥地の重慶へ退きます。同年1月、近衛文麿首相は「国民政府を相手とせず」との声明を発表して、蒋介石の重慶政権を否定し、**国家総動員法**を成立させ、日本は日中戦争に全力を投入して、国力を徐々に損耗させることとなります。軍部が信奉した「対支一撃論」はとんでもない破滅への理論でした。

蒋介石はアメリカ社会のメディアを始めとする各方面への働きかけを積極的に行い、その効果が徐々に現れてきます。**アメリカでは日本製品の不買運動が拡がり**、1939年には、**政府も日本との貿易を制限する政策を発動**します。

中国共産党の毛沢東が率いる八路軍も、各地で日本軍に対するゲリラ戦を展開して行きます。宣戦布告無き日中戦争は、いよいよ泥沼状態に入り込んで行きます。

5・7 ノモンハン事件

喧嘩腰の国境紛争： 清朝が 1734 年に定めたハルハ東端部(外蒙古) とホロンバイル草原南部の新バルガ(内蒙古) との境界は、1913 年のモンゴル独立後も関係国間で踏襲されていましたが、1932 年に成立した満州国は、従来の境界から 10~20 km程南に位置するハルハ河を境界と主張したため、互いに同じ土地を自国のものと主張する境界紛争地が出来てしまいます。将来の紛争に備えて、辻正信参謀が起草し、関東軍司令官から示達された「満ソ国境紛争処理要綱」は「万一衝突せば、兵力の多寡、国境の如何に関わらず必勝を期す」と極めて好戦的な方針を述べています。

第一次ノモンハン事件： パトロール中のモンゴル軍と満州軍が遭遇して戦火を交わし、これを切っ掛けとして子供の喧嘩に親が出る形でソ連軍と日本軍の戦いに発展します。この第一次ノモンハン事件は 1938/5/11~31 の間戦われ、歩兵の数では日本軍が勝ったものの、火砲と装甲車輛ではソ連軍が勝っていました。月末にはソ連の自動車化狙撃師団の援軍が到着し、敵中に分け入った東中佐の搜索隊は全滅させられます。日本軍の戦闘機は練度で圧倒して、空中戦で終始優勢を保ちました。

第二次ノモンハン事件： ソ連政府は日本軍の次の攻撃は更に大規模になると考え、かつ、ここで日本軍を徹底的に叩いてソ連軍強しとの教訓を日本に与えておけば、将来、ドイツと戦火を交える事態になっても、日本が極東側からソ連に攻め込むことを躊躇するとの、高度の戦略的決断をします。

新しく任命されたジューコフ司令官は**兵力の集中と兵站(兵員、武器・弾薬、軍需物資の物流)の改革**を行って、いざ戦いとなれば大量の戦力を一気に集中投入できる態勢を整えます。これまでの常識では、兵站は船舶か鉄道によって行うもので、港や駅から遠い場所に大量の戦力を集中投入するのは難しいことでした。この場合の駅からの距離は日本側 200 km、ソ連側 750 kmですが、ジューコフ司令官は大量の軍用輸送車を動員して、驚くべき大量の戦力を短期間で戦線に送れるようにします。

6/17 から増強されたソ連軍航空機が自国主張の国境を越境して爆撃を開始し、日本軍はモンゴル領の後方基地に大規模な空襲を行います。大本営は越境空襲を事後に知らされ、このままではソ連との全面戦争に発展する口実を与えると驚愕し、本部の指令を聞かない関東軍を従わせるために、昭和天皇から「係争地を無理に防衛する必要はない」との大命を発してもらい、参謀総長は敵の根拠地への空襲を禁ずる指示を出しました。7/2 の夜襲から戦闘が始まり、7/6 には防御陣地に攻撃を掛けた戦車隊が壊滅し、装甲部隊の急激な損耗を憂慮した司令部の判断で、装甲部隊は兵力温存のために後方へ退きました。残された兵士は装甲部隊の援護無しで戦うことになったのです。

ソ連側では自動車による大量輸送が始まり、8 月に入ると歩兵と砲の数で日本軍の倍に及ぶ兵力を集結しています。8/27 には日本軍の諸部隊はソ連軍に背後に廻られて包囲され、個々の陣地も小さく囲まれました。限界に達した日本軍は、各個部隊毎に夜陰に紛れて退却します。ソ連軍は自国主張の境界線内に止まり、日本軍はその線の外で再集結しました。東京の大本営は 8/27 までは関東軍の楽観的な報告で戦闘は有利に展開していると認識していましたが、急激な事態の悪化を知り、9/3 には作戦を中止して、係争地から兵力を離すように命じます。

ソ連空軍は前回は上回る航空機と練度の高い乗員を揃え、日本軍も前回の様な戦果を上げられなかったばかりか、損害が目立つようになりました。結果として、ソ連側の損傷は計 249 機、日本側の損害は 157 機で損耗率 60%に及びました。結局、装甲車輛の数で日本側は約 100 輻に対し、ソ連側は約 1,000 輻ですから、日本兵は機械化部隊に白兵戦で挑んだような戦いでした。

国境画定交渉は翌年 6 月に締結し、8 割はソ連の、2 割が日本の主張の位置で纏まりました。

国境位置から客観的に判断して、ソ連側の勝利です。戦死者は日本側 8,440 人、ソ連側 7,974 人でした。

戦いから教訓を学ぼうとしない日本陸軍： 村上徳治軍医中將は著書「爆弾下の報告」の序文で次のように総

括しています。「一口で言うなら、負けたことがない日本が、大東亜戦争を敗戦悲曲として奏でることになったが、ノモンハン事件は正にその前奏曲であった。もしノモンハン事件の苦い経験が、大東亜戦争の危険信号として役立っていたら、まだ良かったと思う。但し、当時の日本軍としては兵力関係が劣勢で、勝味のない戦況にあっても、無形的戦力、即ち**精神力と統帥指導力の優越感**を払拭することができなかつた」。必勝の精神力さえあれば、近代兵器にも打ち勝つことができるという精神論が、陸軍内部で支配的であったのです。そこには、近代戦は兵器と兵器の戦いであるとのリアリティー(現実的精神)が見受けられません。

対するソ連では、軍の幹部たちには「戦争の帰趨を決定するのは、1時間当たりに敵陣にぶち込む弾薬の重量を如何に多くするかだ」という物量信仰とも言うべき即物的な作戦思想が行き渡っています。理性的に判断すれば、この戦いは始めから勝負がついていたというべきです。

だが、フォローが充分でない日本陸軍がこの戦いで得た教訓は火炎瓶が戦車に有効ということくらいで、本質的な戦術の見直しにまで発展されていません。そのため、同じことが、この後で起こる太平洋戦争で、より大規模に繰り返されます。

「事後に入念にフォローアップし、得た教訓を次の行動で役立てる」ことがなく、「反省もなく、同じことを繰り返す」欠点は、「予算を決める時は熱心だが、事業が終わってもフォローが無い」現在の国政にも色濃く現れており、刹那的な日本民族の欠陥ではないかと心配されます。

陰惨な戦後処理：この時に退却してきた将校たちは辻正信参謀によって自殺に追い込まれ、自殺を拒否した連隊長は予備役に編入され、結局は自殺に近い形で病死します。その一方で、関東軍の独断専行を主導して惨敗を招いた辻正信・服部卓四郎ら関東軍参謀らは一時的に左遷されたのみで、僅か2年後の太平洋戦争開戦時には陸軍の中枢部に返り咲き、再び、同じタイプの大惨事を繰り返すのです。

この**仲間内で庇い合い、信賞必罰を徹底しない**ために、**同じ人物が同じタイプの失敗を懲りずに繰り返す**愚かなパターンが第二次世界大戦中の日本軍に数多く見られます。そして、これまた、現代の日本社会にもよく見られる将(まさ)に日本人のDNAに染みこんでいる国民性ではないかと思われる欠陥です。

総退却ですから当然に多数の日本兵捕虜が発生していますが、関東軍は捕虜の存在そのものを認めません。日本陸海軍将兵は絶対に敵側の捕虜になることが許されない不文律があり、捕虜はない建前になっています。「軍人勅諭」の忠節の項にある「只々一途に己が本文の忠節を守り、義は山嶽よりも重く、死は鴻毛より軽しと覚悟せよ。その操を破りて不覚を取り汚名を受けるなかれ」が将兵を雁字搦めにしていたのです。嘗ての戦国時代の武士たちは戦いに破れた後、敵側に仕えることも多く、武士道では捕虜が不名誉だという訳ではありません。日露戦争でも日本軍から約200人の捕虜が出ていますが、赤十字を通じて故郷に送られている手紙を見ても、失敗したが、そのこと自体をそれほど深刻に考えていません。**捕虜が死に値するという軍人のモラルが確立されたのは上海事件後(1937/8)のことです。**第二次世界大戦で米英の軍人があつてなく捕虜になるのを、日本兵たちは理解できなかったといえます。

結局、ノモンハン捕虜たちは故郷では戦死者として扱われ、日本人であることを捨てて、現地人として生涯を送らざるをえなくなりました。「生きていた英霊」問題です。

5・8 仏印進駐

日中戦争で、日本軍はイギリスやアメリカから蒋介石を援助する物資輸送路「援蔣ルート」となる中国の主要な港湾を占領しますが、その都度、援蔣ルートは変化します。遂にインドシナ半島のルートを遮断する目的で、日本は1940/7月に成立していたフランスの親ドイツ政権であるヴィシー政権と外交交渉を行い、その了承のもとで1941/7/2より仏領インドシナ南部に進駐します。

この日本軍の行動は、タイを除く東南アジアの殆どの地域を植民地として領有していたイギリスやアメリカ

やオランダなどの警戒と強烈な反撥を招きます。

既にドイツと戦闘状態にあったイギリスも、まだ中立を保っていたアメリカも、共に日本軍の進駐を「正当な交渉の結果」とは認めず、対抗手段として英領ビルマに新ルートを建設することで、蒋介石への援助を続けました。

世界経済の決済通貨国アメリカは日本の貯め込んだ対外ドル資産を凍結し、日本への主要物資の輸入はストップし、日本は世界の大半地域でお金を使えなくなりました。困り果てた日本は、生糸と石油の物々交換を提案しますが、アメリカはそれを一蹴し、石油の禁輸処置を執ります。(日本から生糸が入ってこないのも、ストックキングの原料に困りますが、それを救ったのがデュポン社の新合成繊維ナイロンでした)

ここまで来ると、お互い、引くに引けなくなり、国際間の緊張は、やがて頂点に達します。事態はもはや太平洋戦争は避けられない段階に踏込んでしまいました。

5・9 外務省革新派の危険な存在

これまでの説明からは、日本が道を誤った全ての責任が軍事官僚にあると読めます。戦前の外交官は「幣原外交」に象徴されるように、親英米の現状維持派が主流で、横暴な陸軍によって引き摺られたとのイメージがあります。現実には外務省にも軍部以上に強硬な主張を行う「外務省革新派」グループが存在し、世論形成に大きな影響力を持ちました。代表格は靖国神社合祀で昭和天皇が「不快感」を示されたとされる白鳥敏夫です。彼等はワシントン体制打破、対ソ必戦論を唱えただけでなく、次第に教条的になり、「皇道外交」を提唱、「世界維新戦争たる大東亜戦争」勝利のためには「錦旗粛々とアメリカ大平原を進撃」せねばならぬとまで主張します。彼等の言論は世論を先導し、より強硬になった世論により日本の政策決定の幅を狭めて行きました。(「読書」 庄司純一郎/「日本経済新聞」2010/8/22、p21)

心ある日本人は、このような自国の世界中をを敵に回すような危険な行動を密かに憂慮します。以下は著名な作家 永井荷風の「断腸亭日乗(日記)」からの一文です。

「支那(中国)は思うように行かぬ故、今度は馬來(マレー)人を征服せむとする心ならんか。あちこちを荒らし、あちらこちらを嚙り、台所中荒らし回る老鼠の悪戯にも似たらずや」(1941/1/28)

「(日中戦争の原因は)日本軍の張作霖暗殺および満州侵略に始まる。日本軍は暴支膺懲(ようちよう:懲らしめる)と称して支那の領土を侵略し始めたが、長期戦争に窮し果て、俄に名目を変じて聖戦と称する無意味の語を用いた。……欧州戦乱以後、英軍振るわざるに乘じ、日本政府は独伊の旗下に随従し、南洋進出を企画するに至れり。しかれども、これは無智の軍人らおよび猛悪なる壮士らの企てるるところにして、……国民一般の政府の命令に服従して、南京米を喰いて不平をいわざるは恐怖の結果なり。麻布連隊反乱(2・26 事件)の状を見て恐怖せし結果なり。……」(同 6/15)

「余は、かくの如き傲慢無礼なる民族が武力を以て隣国を寇することを痛嘆して措かざるなり。米国よ。速やかに起ってこの凶暴なる民族に改悛の機会を与えしめよ」(同 6/20)

第5章で参考にした文献：

「世界の歴史 15/ファシズムと第二次大戦後の世界」瀬村興雄/中公文庫

「ノモンハン/それは、日本陸軍崩壊の序章であった！」楠裕次

Wikipedia の関連記事多数：満州事変/日中戦争/15 年戦争/仏印進駐/太平洋戦争/太平洋戦争の年表/第二次世界大戦/等

6. 第二次世界大戦／ヨーロッパ戦争

この大戦はヒトラー総統が率いるドイツが民族の生存圏を求めてフランス、イギリスと戦うヨーロッパ戦争として始まり、大日本帝国とアメリカの太平洋戦争が始まった時点で全ての列強が敵味方に分かれて戦う世界大戦へと発展しました。この大戦はドイツ、イタリア、日本などの**全体主義国家**と、イギリス、フランス、アメリカ、ソ連などの**自由主義国家の戦い**と位置づけられています。生まれた時から民主主義にどっぷり漬かった貴方には全体主義という用語は馴染みがないと思いますので、以下にその定義を記します。

全体主義(totalitarianism)とは、個人の全ては全体に従属すべきとする思想または政治体制の1つである。この体制を採用する国家は、通常1つの個人や党派または階級によって支配され、その権威には制限が無く、公私を問わず国民生活の全ての側面に対して可能な限り規制を加えるように努める。政治学では権威主義体制の極端な形とされる。通常は単なる独裁や専制とは異なり、「全体の利益を個人の利益より優先する」だけではなく、個人の私生活なども積極的または強制的に全体に従属させる。反対の概念は**個人主義**または**民主主義**である。(Wikipedia/全体主義)

日本も明治時代は立憲君主制ではありましたが普通の近代国家ですし、大正時代は**大正デモクラシー**という言葉があるくらい、政党政治による人権尊重の自由主義が行き渡っていました。それが昭和時代に入ってからリアリティーを失って精神論を振り回す若手の軍事官僚たちがのさばり始め、特に1930年の統帥権干犯問題頃から、政党にもこれに迎合する動きがあり、一気に全体主義国家へと変貌したのです。

日本の明治と昭和では、全く別の国家であるかのように思えます。

若い人たちが主導権を取れば、日本の将来は必ず良くなるとは言えない冷厳な実例がここにあります。

上記の定義の「1つの個人／党派」は、ドイツではヒトラー総統／ナチス党、イタリアではムッソリーニ統領／ファッショ党、日本では**天皇**(実質的には軍事官僚)／**軍部**、ソ連ではスターリン書記長／共産党です。ソ連は明白に全体主義国家ですが、ドイツと敵対したために「**敵の敵は味方**」の論理で、第二次世界大戦では民主主義陣営に加わっています。その矛盾は第二次世界大戦後に間もなく**米ソ冷戦**として現実化します。

6・1 当時の世界情勢

1920年代のヨーロッパの覇者は、第一次世界大戦で勝ったフランスでした。しかし、フランスも世界大恐慌で手痛い打撃を受け、鉱工業生産は1929年を100とすると1938年で75と減少して国民は自信を喪失し、社会も分裂状態に陥っています。対するドイツは、1933年から1938年にかけて鉱工業生産は倍増し、ヒトラーの指揮のもとで敗戦の恥辱を晴らそうと、国民は一致団結していました。

全体主義体制にあるドイツとイタリアの目覚ましい経済発展と軍事力の充実を見て、中国侵略問題で国際社会で孤立状態に陥っていた日本陸軍の主流派はこれらの国との同盟を強く主張します。

オーストリアの併合：プロシヤがドイツ帝国を復活させた時に、ビスマルク等は「小ドイツ主義」を採り、ドイツ民族だけで占めている地域をドイツ帝国としました。ドイツ民族だけでなく、スラブ民族やハンガリー人が多数居住する地域までを包含していた神聖ローマ帝国の復活は「大ドイツ主義」と呼ばれます。

もともとオーストリア出身のヒトラーは、大ドイツ主義路線でドイツ民族の生存圏を確保しようとします。オーストリアの中にもその意図に呼応する強力な動きがあり、1938/3/12、ドイツ軍が進駐を始めると、それを市民たちは熱狂的に歓迎し、ドイツによるオーストリア併合は抵抗無く成立しました。ヒトラーは故郷に錦を飾ったのです。

チェコスロバキアの併合：ヒトラーの次のターゲットは、オーストリア・ハンガリー二重帝国の遺産を継

承したチェコスロバキア、ポーランド、ハンガリー、ルーマニア等に及びます。

チェコスロバキアに居住するズデーテン・ドイツ人の自治要求は激しさを加え、ドイツは外部から彼等を支援してチェコスロバキア政府を威嚇します。この問題を解決するために1938/9/29、ドイツのミュンヘンでイギリス、フランス、イタリア、ドイツによる国際会議が開催されます。イギリスの首相チェンバレンは、「これ以上戦争すれば、イギリスの国力は疲弊し、植民地に対する覇権が失われる」と考え、イギリス衰亡へ向かう戦争を避けるために、フランスと共に、ヒットラーの領土拡張の要求はこれで最後だとの条件付きで、チェコからドイツへのズデーテン地方の割譲を認めます。この**ミュンヘン協定**はドイツをつけ上がらせた悪しき融和政策の典型として、非難されることが多い政治決定でした。

1939年に入ると、多民族国家チェコスロバキアでは、スロバキア人、ルテニア人たちの自治要求運動が激化し、事態が紛糾の極に達した時、スロバキア人たちはナチスを後ろ盾として独立宣言を行い、ボヘミア、モラヴィア両地方のドイツ保護領化を要求します。これに呼応して1939/3/15、ドイツ軍は国境を越えて侵入し、即日チェコ全土を占領しました。

ハンガリーはカルバト・ルテニア地方を奪い取り、どさくさに紛れてイタリアはアルバニアを占領します。ドイツは次の目標をポーランドに定めます。

独ソ不可侵条約の締結：事ここに至ってドイツの疑う余地なき東欧侵略計画を阻止しようと対独宥和策を捨てて世界の警察官を演ずるべく、イギリスとフランスはポーランドに対し、ドイツが侵攻した場合は軍事支援を与える旨の軍事支援協定を締結・公表します。また、ソ連をドイツ侵略の東方の防波堤にしようと、英仏ソ3国軍事会談を開きます。

アメリカがこの動きに加わらないのは、アメリカには伝統的にヨーロッパの問題には関わらずに、南北アメリカ大陸だけを自らの関心範囲と考える「**モンロー主義**」が国民の間に根強いためです。大統領だけがその気になっても、国民が着いてきません。

さて、3国軍事会談が延々と4ヶ月も続いている間に、そうはさせじとヒットラーは犬猿の仲とされていたスターリンと手を組み、1939/8/23に「独ソ不可侵条約」を締結します。この条約には秘密議定書が存在し、バルト3国、ルーマニア東部のベッサラビア、フィンランドをソ連圏として認め、独ソ両国はカーゾン線でポーランドを分割占領する合意が成されています。まるでジャングルの強者同士が獲物を分け合うようなこの条約は、開戦となって東方のソ連と西方の英仏両国の両面に敵を迎えたくないドイツと、前年のノモンハン事件以来、日本と緊張関係にあって、西方のドイツと東方の日本を同時に敵に回す両面作戦はやりたくないソ連の思惑とが一致した地政学的判断に基づくものです。

ポーランド戦争の勃発：1939/9/1 早朝、ドイツ軍はポーランド侵攻を開始します。イギリスとフランスは軍事支援協定に基づいて、ドイツに対し宣戦布告をします。この時点が第二次世界大戦の始まりとされます。ドイツ軍は地上軍150万人の規模で多方面から同時に侵攻し、急降下爆撃機、装甲部隊、歩兵部隊が緊密な協同作戦を展開し、騎兵隊が重要な役割を占める旧式な編成のポーランド軍を苦もなく撃破して9/27には首都ワルシャワを陥落させ、再興ポーランドは消滅しました。9/17にはソ連もポーランドに侵攻し、独ソ不可侵条約に従って、ポーランドはドイツとソ連に分割・占領されました。

立ち遅れたイギリスとフランスは戦争準備ができていないために行動できず、只、傍観するだけでした。ソ連は英仏のポーランド軍事支援協定の枠外であり、ドイツと英仏との戦争に関しては中立の立場を表明します。同じくポーランドに攻め込んでいながら、ソ連にはお咎め無しとは、何とも釈然としない事態です。更にソ連は1939/11/30よりフィンランドに侵攻して冬戦争を起こし、この侵略行為を非難されて国際連盟から除名されながら、翌年3月にはフィンランドから領土を割譲させます。

バルト3国(バルト海沿岸のエストニア、ラトビア、リトアニア)にはまず軍隊を駐留させ、1940/6月に大

軍で侵攻し、8月にバルト3国を併合しました。

日独伊三国軍事同盟：日本陸軍の主流派は、日中戦争に対する国際世論の非難により国際的に孤立した現状を打開したく、予てよりドイツとの軍事同盟を主張しており、日本の国力を冷静に評価すればそれは無謀なことだと反対する海軍や良識的な政治家との間で、国論を二分する論争が行われていました。

共産主義の浸透を恐れるドイツからの働きかけで、1936/11/25には**日独伊防共協定**が締結されています。

第一次近衛内閣の後を受けて 1939/1 月に組閣された平沼内閣は、三国同盟の賛成者と反対者が入り乱れて暗躍する中で三国同盟加盟の是非に関して 70 数回の閣議を開催するも結論を出せないでいるうちに、ドイツが突然、天敵であった筈のソ連と独ソ不可侵条約を締結します。折角進めていた三国同盟交渉は中絶し、「**欧州情勢は複雑怪奇なり**」との珍言を遺して、8月に短命であった平沼内閣は崩壊します。

第二次近衛内閣の外務大臣として登場した松岡洋右は独断専行の人で、極端な秘密主義で急速にドイツと接近し、一挙に日独伊三国軍事同盟を作り上げ、日本では御前会議(天皇が臨席する会議)を経て、1940/9/27に同条約に調印しました。松岡外相としては、日独伊三国に不可侵条約を結んだソ連を加えた国際勢力なら、アメリカも容易には手を出せないように牽制できて日中戦争を有利に解決できるだろうとの考えでした。後で判明しますが、この条約に関して、ドイツ側では 30 数冊の入念な事前評価ファイルがあったのに、日本側にはそれに相当するものが存在せず、同盟可否の判断材料の全ては松岡外相の直感というか、胸の中にあっただけでした。一国の運命を左右する大事な決断が、こんな状態で行われて良いのでしょうか。

1941/3 月、松岡外相は訪欧の途中でモスクワに立ち寄り、ソ連と交渉して日ソ中立条約を締結します。当時、東欧を巡って、独ソ間の関係が悪化していたため、この中立条約はソ連側からは非常に歓迎され、喜んだスターリンはクレムリンで親しみを込めて松岡外相を抱擁しています。この条約は、太平洋戦争末期の日本が一番当てにしたタイミングで簡単に一方的に破棄され、ソ連軍は一気に樺太とカムチャッカ半島を回復し、満州を抑え、朝鮮の半分を奪います。この種の軍事条約は互いの軍事力の均衡が破れると全く信頼できないというのが、冷厳な歴史的現実です。貴方は日米防衛条約をどこまで信頼できますか。

6・2 ドイツのフランス侵攻

1940/4/9、ドイツはスカンディナヴィア(旧称:北欧)に対して軍事行動を起こします。デンマークは即日降伏し、ノルウェーも首都オスローや沿岸の重要な港湾都市を占領され、ノルウェーに派遣されたイギリス軍も、撤退を余儀なくされます。

北方からの脅威を取り除いたドイツは5/10、120師団(1師団は1~2万人編成)で次頁の各ルートで侵攻を開始し、僅か5日間でオランダを征服、5/17にはベルギーの首都ブリュッセルを占領します。

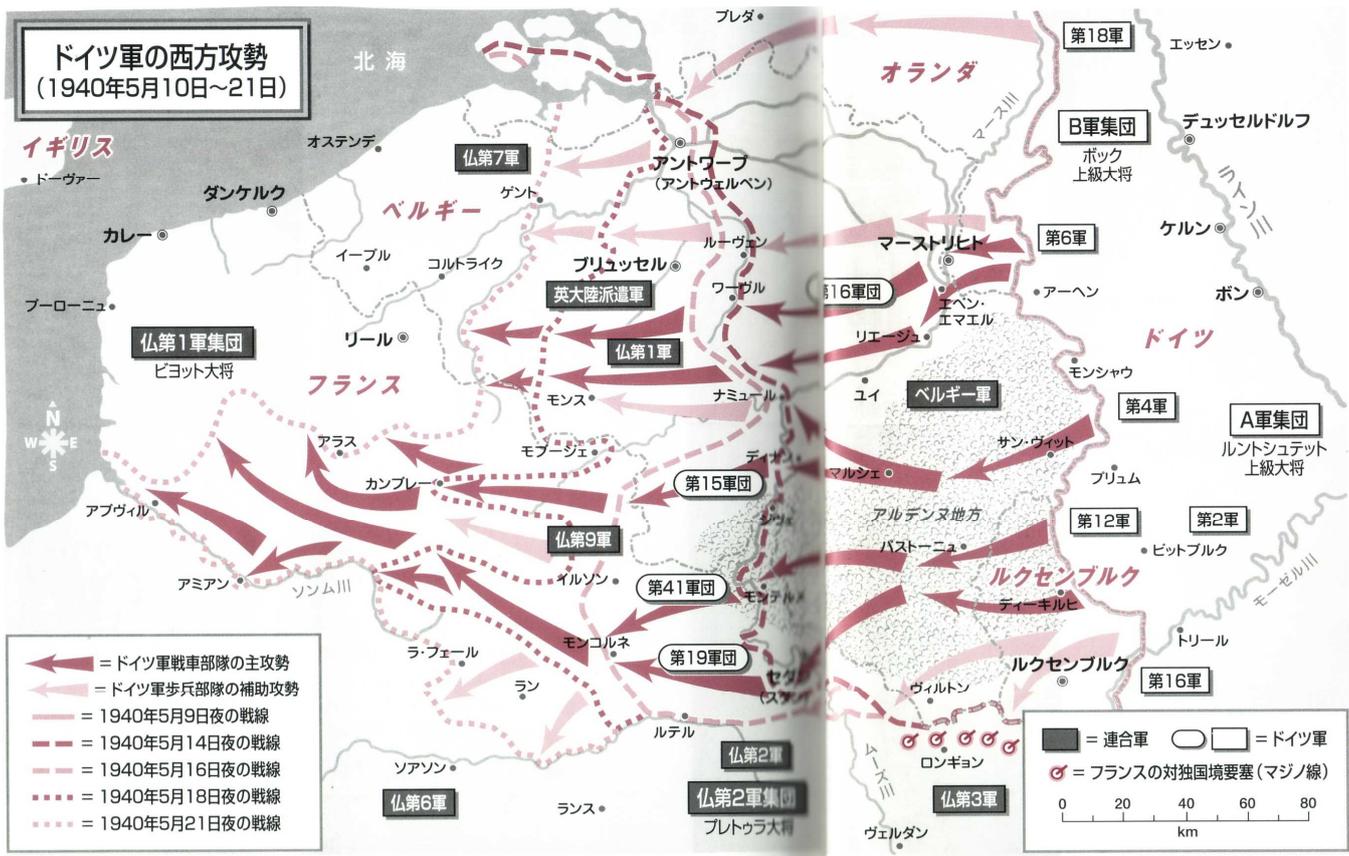
フランスの南方は難攻不落の要塞「マジノ線」で守られており、中部のアルデンヌ地方は道路事情が良くなくて大部隊の移動には適さないから、ドイツ軍が来るとしたら北部のベルギー方面しかないとの固定観念で、主力軍を第一次世界大戦で侵攻されたベルギー方面に向けてしまっていたのです。

ドイツ軍は大量の無線機を各部隊に配備していますが、フランス軍は民間回線の電話か、オートバイの伝令により命令伝達を行っています。このため、フランス軍は直ぐに主力部隊を引き返させて再配置させる手配が出来ませんでした。

作戦開始3日目にドイツ戦車軍団はフランス国境の要衝セダンに現れ、ムーズ川対岸のフランス軍砲兵陣地をドイツ急降下爆撃機が各個撃破して障害を除き、ここを橋頭堡としてフランス領内に急速に侵攻します。第一次世界大戦では大口径の大砲戦が戦いの帰趨を決しましたが、ドイツは移動速度が遅い大口径砲の代わりに、速く、かつ、狙いが正確な急降下爆撃機を活用したのです。

侵攻11日目にはドイツの先遣戦車部隊は英仏海峡のソワイエルに到達し、フランス陸軍主力部隊と、イギリ

スから派遣されていた英大陸遠征軍の各部隊は、退路を断たれて絶体絶命の危機に陥りました。ドイツ軍は包囲した北部の英仏軍とベルギー軍残存部隊を海岸へと追い立てて、6/4 までにフランス東北部から敵軍を一掃しました。英仏軍の敗残兵約 34 万人は、ダンケルクとその周辺の港から船でイギリス本土



ドイツ軍のフランス侵攻ルート (「11 大近代戦」p30~31/PHP 研究所)

に命からがら脱出しましたが、兵器や戦車や大砲は全て海岸に捨てられており、彼等が新たな戦闘部隊として回復することは不可能でした。

ドイツ軍は首都パリに向けて進撃を開始します。軍隊の主力を失い、フランスの首相はパリを Open City (無防備都市) であると宣言し、6/14 にはドイツ軍がパリに無血入城します。1940/6/22 にフランス政府はドイツに対する降伏を受諾し、抵抗を停止しました。開戦から僅か6週間で、嘗てのヨーロッパの覇権国フランスは崩壊しました。塹壕戦で粘り勝ちになった第一次世界大戦とは、全く異なった展開でした。

あれだけ鉄血の誓いをした同盟者イタリアは、意気地なく開戦時は中立宣言をしてドイツを唾然とさせますが、このドイツの快進撃を見て、戦果の分け前に与るべく、6/10 にヨーロッパ戦争に参戦しています。出無精のヒトラーは、この時、第一次世界大戦でドイツが降伏調印した休戦会議場に使用された鉄道車輛をその時と同じ場所に引き出させ、その中でフランスの降伏使節を引見し、日帰りで帰国しています。

フランス軍の敗因をフォローしてみましょう。要するにフランス軍は、第一次世界大戦での成功体験の罫から抜け出せなかったのです。総司令官ガムランは、今次大戦でも機動戦の主役は騎兵が担うと思込み、速度と航続距離を向上させる新型戦車の開発を遅らせています。軍の中枢部は老齢の将軍たちが支配し、近代戦を提唱するシャルル・ドゴール (後の大統領) のような若手軍人は用いられませんでした。

各部隊の間の通信手段も時代遅れのお粗末なものでした。ドイツ軍の侵入経路を決定的に見誤りました。移動速度が遅い大口径砲の戦いになると思い込んで、急降下爆撃機を使うドイツ軍の進撃速度を過小評価しました。ドイツ軍はそれら何れの面でも、新技術をふんだんに取り入れてフランス軍を圧倒していました。

「将軍たちは前の戦いを戦い、古い将軍たちは更に一つ前の戦いを戦う」との諺通りの結末でした。但し、ドイツ軍もこの戦いの望外の成功を過信し、軍部の上層部に「電撃戦」の効果を過大に見積もる風潮

が広がります。その過ちは、次のソ連侵攻時に余りに楽観的な予測を立てて、長期戦に必要な兵站管理の計画を殆ど練り上げないままに、見切り発車でソ連相手の大戦争を始めた点に現れています。

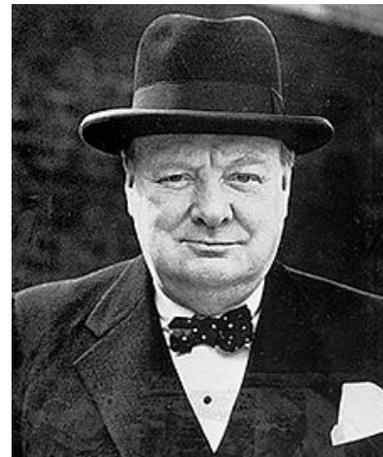
「勝って兜の緒を締めよ」は誰にでも容易に実行できることではないようです。

6・3 大消耗戦となったバトル・オブ・ブリテン (Battle of Britain)

ヒットラーの予想では、フランスが降伏した段階で、イギリスは戦争継続意欲を喪失して、講和交渉に応じる筈でした。だがチェンバレンに代って英首相に就いたチャーチル(Ser Winston Leonard Spencer-Churchill)は不屈の人でした。彼は徹底抗戦の構えを見せ、国民に対独戦への集結を呼びかけます。ヒットラーは演説などを通じて何度も戦争終結を呼びかけましたが、イギリスの抵抗精神にはいささかの揺るぎもありません。

そこでヒットラーは本格的なイギリス侵攻作戦の準備を陸海空各軍に命じ、それにより、イギリスの世論を戦争回避に向けさせようとしています。しかし、この決定を聞いて一番ビックリしたのはドイツの各軍高官たちでした。彼等はイギリス本土への侵攻など、想定したことがなかったからです。彼等は手持ちの兵器を遣り繰りして、この作戦を遂行せねばなりません。

イギリス本土防衛軍は大砲や戦車の数が少なく、ドイツ軍を上陸させない段階で撃退しなければなりません。幸い、イギリスには1930年からヒュー・ダウディング空軍大将の尽力で、本土防衛態勢が整えられていました。彼はHawker HurricaneとSupermarine Spitfireの2種の最新鋭戦闘機を核として本土防衛網を構築しています。また、レーダー基地を沿岸部に配置し、探知した情報を地区毎の作戦指揮所へ素早く伝達して、



チャーチル首相 (Wikipedia)

待機していた戦闘機部隊を迅速に敵航空部隊の進行方向へ差し向ける早期警戒システムを整備しています。

1940/4には月産256機であったこれら戦闘機は増産体制に入って、9月には467機のペースになりました。

8/12からドイツは猛爆を開始し、レーダー基地、飛行場、飛行機製造工場、港、交通路を破壊します。しかし、8/12の例でもドイツ側の損害は75機に対し、イギリス側の損害は34機であり、常にドイツ側の受ける損害はイギリス側の損害に比べて非常に大きく、急速にドイツ空軍は減耗して行きます。

ドイツ側の重大な弱点は、イギリス本土を直接攻撃すること

が、本来の計画に入っていなかったために、戦闘機の航続距離が短く設計されており、イギリス本土の奥深くまでは爆撃機を護衛できないのです。護衛戦闘機がつかないドイツ爆撃機は、機銃砲塔でイギリス戦闘機を迎え撃ちますが、この勝負はどうしても凶体が大きく、速度が遅い爆撃機に分がよくありません。

また、目的が本土上陸にあるなら、制空権を取るためにイギリス戦闘機の製造工場を集中的に叩くべきですが、そうはせずに途中で都市爆撃に転じています。事実、この時期にイギリス側の戦闘機の台数は120機ま



Aircraft: Supermarine Spitfire Mk.IX
Nation: Great Britain
Manufacturer: Supermarine Division of Vickers-Armstrong Ltd.
Type: Fighter
Year: 1942
Engine: Rolls-Royce Merlin 61, 12-cylinder V, liquid-cooled, 1,565 hp
Wingspan: 36 ft 10 in (11.22 m)
Length: 30 ft 6 in (9.30 m)
Height: 11 ft 5 in (3.48 m)
Weight: 7,500 lb (3,400 kg) loaded
Maximum speed: 408 mph (656 km/h) at 25,000 ft (7,620 m)
Ceiling: 44,000 ft (13,400 m)
Range: 434 miles (700 km)
Armament: 2 x 20 mm cannon; 4 machine guns
Crew: 1

Supermarine Spitfire

(World War II Combat Aircraft)

で減耗しており、本土防空戦力は壊滅寸前でしたが、爆撃の目標がロンドンに移ったために戦闘機部隊は辛くも息を吹き返し、瞬く間に 200 機にまで機体数を増加させています。9/7 から 11/3 まで連夜 200 機の爆撃機がロンドンの夜間爆撃を行います。この時に爆撃機が受けた大きな減耗から遂にドイツは立ち直れなくなります。結局、イギリス本土決戦でドイツが敗れたのは、戦略、作戦、使用兵器の全ての面で準備不足であったためと言えます。脅かせばイギリスは折れるだろうと考えたヒットラーの読みの甘さが根本原因です。

6・4 ドイツのソ連侵攻

東西両面作戦を始めたヒットラー： 東欧を征服することは予てよりの計画であったので、ヒットラーはフランス征服直後に対ソ戦を準備します。ソ連は第三次 5ヶ年計画によって国力が着々と増強されつつあったし、ドイツは時と共に戦争により国力を消耗させているのに、この自信はどこから出たのでしょうか。

1941/6/22、ナポレオンがロシア遠征を始めたその日に「独ソ不可侵条約」を破り、ドイツ軍は無警告で北はフィンランドから南は黒海までの線で、イタリア、ルーマニア、ハンガリーなどの枢軸国と共に、約 300 万人の軍で対ソ侵攻作戦(バルバロッサ作戦)を開始しました。

スターリンは自国の諜報機関から繰り返し警告を受けていましたが、ソ連を対独戦に加えたいイギリス諜報部の策動であると判断して、何の対策も取っていませんでした。そのため、ソ連軍は不意を突かれて大敗北し、ドイツ軍が国内に深く入り込むことを許してしまいます。

ドイツ軍は 7/16 にはスモレンスク、9/19 にはキエフを占領、更に北部のレニングラード(現：サンクトペテルブルグ)を包囲、10 月中旬には首都モスクワに迫り、ソ連政府は 960 km 奥地のクイビシエフへの疎開を余儀なくされました。だが、ソ連は撤退しながらも、各地の工業施設を東方の奥地に疎開させ、直ぐに生産を再開させ、武器弾薬の供給に支障が出ないようにします。その頃からドイツ軍はぬかるむ悪路に足をとられ、兵站線が伸びきって補給が追いつかなくなり、前進が困難になります。また、ソ連軍の新型戦車群やカチューシャ・ロケット砲などに苦戦し、冬装備も不十分なままで例年より早めに襲来した冬将軍に苦しめられます。冬の間ソ連軍は逆襲に出て、相当の地域を奪回し、戦線を立て直すことができました。ヒットラーがドイツ軍の敗北を怒って、多くの将軍を罷免し、軍の作戦プランに強引な干渉を始めたのがこの頃からです。

連合国側に加わるソ連： ソ連を国際連盟から除名するなど、それまでソ連と距離を置いてきた連合国側は、独ソ戦開始後、ソ連を連合国側に受け入れることを決定し、武器貸与法に従って膨大な軍事物資の援助が始まります。ドイツは日本に対し、東方からソ連を攻めるように要請しますが、日ソ中立条約を締結した日本は資源が得られる東南アジア・太平洋方面への進出を決め、対ソ参戦をしません。ここにもヒットラーの誤算がありました。日本に送り込んだスパイよりの情報でそのことを知ったソ連は、極東ソ連軍の一部をヨーロッパに振り向け、そのことがその後の戦況に非常に大きな影響を与えます。

コーカサスの石油を狙うドイツ： 1942/6/28、ドイツ軍は夏季大攻勢「青」作戦を開始します。右図の黒海とカスピ海の間位置するコーカサス地方を抑えて、同地に集中する油田地帯を制圧せんとするものです。

中間目標として「要衝ヴォロネジ(兵器製造基地)の占領とスターリングラードの制圧」が挙げられていました。



ドイツ軍が侵攻した地域の地図

(「11 大近代戦」p53/PHP 研究所)

最初の内はドイツ兵とソ連兵の能力の違いが大き過ぎて、ソ連軍は全く抵抗拠点を築けないまま、退却に次ぐ退却の有様でした。これで相手を甘く見たヒットラーは、兵力をコーカサスに向かうA軍団とヴォルガ川方面に進むB軍団に分けます。これは致命的作戦ミスでした。軍隊の戦闘力はランチェスターの2乗法則に従うもので、各軍団の戦闘力は一つだった時の凡そ1/4に低下しています。

A軍団は山岳の地形を巧妙に利用したソ連軍の抵抗に遭って進めなくなり、司令官は激怒したヒットラーによって更迭(こうてつ)されます。こうなると、意地でも敵の元首の名前が付けられたスターリングラード(現：ヴォルゴグラード)を占領して、体面を保たなくてはなりません。しかし、こんな形で焦った時の戦いは碌なことにならないのが、「世の習い」です。

転換点となったスターリングラードの攻防戦： B陣団の司令官は実戦経験がない参謀出身の人でしたが、ヒットラーの強圧的な指令に従って主力部隊をスターリングラード市内に突入させ、待ち伏せるソ連の狙撃兵に悩まされながら、何とか市内の9割を制圧します。

ここに極東から西方の戦線へ移動してきた戦(いくさ)上手のジューコフ司令官が登場します。彼は即座の反撃を催促するスターリンのプレッシャーを跳ね返し、ドイツ軍に意図を悟られないように、完全に準備が整うまでは大反撃のそぶりを一切見せません。彼は最前線付近に指揮所を設け、戦況を肌で感じながら、的確な命令を下し続けます。彼の巧妙な作戦に引っ掛かって、ドイツ軍30万人は市の外側から包囲されて袋の鼠となります。それを救出するために派遣されたドイツ軍は逆に撃退されて、万事休すとなり、1942/12月には約10万人のドイツ軍はソ連軍に降伏します。戦いの流れが変わったのです。

この頃から作戦に関するヒットラーの干渉は、軍事専門家にとって耐え難いものになりました。彼は内政と外交の諸問題を部下に任せておきながら、作戦だけに熱中し始めたのでした。

スターリングラード戦によって独ソ戦は攻守ところを代えました。ソ連軍の軍事生産力は次第に向上し、アメリカからの援助にも助けられて、1944/1月には900日間に及ぶドイツ軍の包囲を破って、レニングラードが解放されます。

その後もソ連軍はドイツ軍に奪われていた旧ソ連領を着々と奪回し、1944/6月には国境を越えてポーランドとルーマニアに侵入するに至ります。

6・5 アメリカの参戦、そしてドイツ・イタリアの敗北

アメリカに宣戦布告するドイツ： 次の章のテーマになりますが、1941/12/7に日米間で太平洋戦争が始まった段階で、ドイツとイタリアはアメリカに宣戦布告し、戦闘状態に入っています。日独伊三国軍事同盟の条文では、「何れか一カ国が現在戦争に関係していない国から攻撃を受けた場合にのみ、相互援助義務が生じる」とあり、先にドイツがソ連に無警告侵攻して独ソ戦が始まっても、(ドイツは攻撃を受けたのではなく、攻撃を仕掛けたのだから)日本はソ連との中立関係を保っています。日本がアメリカを先制攻撃した状況下では、(日本はアメリカに攻撃を仕掛けたのだから)ドイツがアメリカに宣戦布告する義務はありませんが、ドイツとイタリアは12/11にアメリカに宣戦布告しました。既にアメリカはイギリスとソ連に対して大規模な武器弾薬、軍需物資の援助を行っていますから、何れにせよアメリカとの開戦は避けられなかったとの読みなのでしょう。

奮戦するUボート： ドイツのUボート(潜水艦)はイギリスとアメリカの海上輸送網の切断を狙い、北大西洋を中心にアメリカ、カナダ沿岸やカリブ海、インド洋に出撃して、初期は連合軍側の船舶建造量を上回る損害を与え、大きな脅威となりますが、連合軍側でも浮上するUボートを航空機のレーダーで発見、駆逐艦で攻撃する等の対策が効を奏し、後に多数のUボートが沈められて形勢が逆転します。だが、ドイツ側は浮上し

ないでも空気を取り入れられるシュノーケルを装備して水中を長距離航行して巻き返すなど、戦時中の互いの技術、戦略の進歩は目を瞠(みは)るものがあります。

Uボートによる戦果は撃沈した商船約 3,000 隻、空母 2 隻、戦艦 2 隻です。全部で 1,160 隻あったUボートの損害は、649 隻は沈没し、89 隻は終戦時に自沈し、乗組員の 3/4 が戦死しました。

進化が速かった戦車：フランスに攻め入った 1939 年から翌年に掛けては、ドイツ軍の戦車の優秀さは際立っており、ドイツ軍の勝利に大きく貢献しました。しかし、1941 年に対ソ戦を始めて見ると、ソ連軍戦車の火砲と装甲の方が優れており、戦車戦で脅威を受けます。戦争の後期になると、ドイツ軍も巨大砲を備え、快速力で行動する優秀な戦車を実戦投入して再び優勢を取り戻しますが、東部戦線の広大な戦場や、ソ連軍の莫大な兵力に対しては、ドイツ軍機械化部隊の敏速な行動力にも限界がありました。

右の写真のタイガー戦車は 5,995 台も製造された名戦車です。元は高射砲として開発された強力な 75 mm 砲、自重 45 トン、594 馬力エンジンで駆動されて 46 km/時で走り、航続距離は 200 km でした。

1942/11 月、アメリカ軍は北アフリカの西のアルジェリアに上陸し、東のリビアから進撃するイギリス軍と東西からイタリア軍とドイツ軍を挟撃し、翌年 5/13 にはドイツ軍約 10 万人、イタリア軍約 15 万人は降伏し、北アフリカの戦いは連合軍側の勝利に終わります。

連合軍は 7 月にはシシリー島に、次いでイタリア本土の南部に上陸

しました。この時点でこれまでの戦争指導の責任を問われ、ファシスト政権は倒れ、ムッソリーニは捕らえられ、9/8 に新しい内閣が連合軍側に無条件降伏し、10 月にはドイツに宣戦布告します。ドイツ軍は直ちにローマを占領し、新政権は連合軍の占領地へ脱出しました。

日独伊三国同盟とは言いながら、足を引っ張るばかりで、一度も役に立ったことがないイタリアでした。

ヒトラー政権末期の狂気の殺戮：形勢が悪くなって余裕がなくなると、ヒトラーは段々と猜疑心が強く、残虐になっていったようです。1944/7/20 のヒトラー暗殺未遂事件では、関係者約 7,000 人を逮捕させ、約 200 人を死刑に処しています。

1944/8/1、ポーランドの首都ワルシャワでソ連軍の呼びかけによりポーランド国内軍やワルシャワ市民が武装蜂起しますが、ソ連軍はこれが赤色革命ではなくブルジョワ側市民の蜂起であるのを見て、見殺しにします。ヒトラーもそれを見越して徹底弾圧を命じ、その結果約 20 万人が死亡して 10/2 に蜂起は失敗に終わりました。

ユダヤ人のホロコースト(人種抹殺)は余りに悲惨なので、私には詳細が書けませんが、ドイツが独ソ戦に入ってからそれはそれまでのようにユダヤ人を海外に追放することができなくなり、「ユダヤ人問題の最終解決」と称して強制収容所に送り込んで殺戮しました。特に戦況が劣勢になってから激しくなり、結局ドイツ占領地にいた約 600 万人(学術研究では 4,194,000~4,851,000 人)のユダヤ人がその犠牲になっており、近代史の一大汚点として人類の記憶に留められるでしょう。

連合軍のノルマンディー上陸作戦：アメリカ陸軍のアイゼンハワー将軍が率いる連合軍は、約 17.5 万人の将兵、6,000 以上の艦艇、延べ 12,000 機の航空機を動員して、1944/6/6 早暁より攻撃を開始し、初日 D day



Panzerkampfwagen

が終わった段階で、連合軍は約 15 万人近い将兵を上陸させました。この一部始終を映画化したのが大作「史上最大の作戦 (The longest day)」です。ドイツ軍沿岸防衛隊との戦闘で約 2,500 人の戦死者と約 6,500 人の負傷者を出しています。1940/6 月のダンケルクの撤退から 4 年振りで、連合軍は再びフランスの西部戦線を構築したのです。



(Wikipedia/第二次世界大戦)

神々の黄昏： ドイツはこの段階でもパルスジェット推進の V1 飛行爆弾や大陸間弾道ミサイル V2 でロンドンを攻撃し、世界初のジェット戦闘機 Me262 やジェット爆撃機 Ar234 など新鋭兵器を繰り出して戦いますが、圧倒的な連合軍側の物量作戦の前には影が薄く、もはや勝敗は誰の目にも明らかです。

同年夏にはバルカン諸国とフィンランドがドイツの手から離れ、やがて東のソ連軍、西の連合軍に挟撃されて、ドイツ軍は本国内に追い込まれました。ヒトラーは 1945/3/15 からのハンガリーの首都ブダペスト奪還と油田確保のための「春の目覚め作戦」を行います、この失敗で組織的兵力となる軍をほぼ失います。ヒトラーは「ドイツは世界の支配者たり得なかった。ドイツ国民は栄光に値しない以上、滅び去るしかない」と述べ、「ドイツの国内の生産設備を全部破壊せよ」と焦土命令を出しますが、もはや軍需相はそれを聞き入れず、破壊は回避されました。それ以後、ヒトラーは体調を崩してベルリンの地下壕に籠もり、国民の前に姿を現わさなくなります。

4/16 よりベルリン正面のジューコフ司令官が指揮するソ連軍の総攻撃が始まり、4/25 にはベルリンは完全に包囲されます。4/30 にヒトラーは愛人エヴァ・ブラウンと結婚式を挙げ、共に自殺し、遺体は焼かれます。ムッソリーニは逃亡中、スイス国境でパルチザンに捕らえられ、4/28 に愛人と共に射殺され、ミラノの中心地の広場で逆さ吊りで晒(さら)されました。(私はその無惨な写真を見ています)

5/2 ベルリンはソ連軍に占領され、その暴行・掠奪はゲルマン民族が侵攻してローマを 3 日間に亘って掠奪した故事を再現したかのような野蛮な行為でした。そのおぞましい内容は、とてもここには書けません。

ドイツ以外にも、ソ連軍は侵攻したポーランド、ユーゴスラビア、オーストリア、ハンガリーで大規模な暴行・掠奪行為を繰り返し行っており、そのような行為が全く見受けられなかったその他の連合軍と極めて対照的です。ロシア人は会えば一人一人は気さくな良い人だとは聞きますが、現代史が示すところでは、極限状態ではもはや文明人ではなく、とんでもない野蛮なことをやる古代人と同質の人々だと思ってください。

1945/5/7 にヒトラーの遺言により彼の後を継いでドイツの指導者となったカール・デーニッツ海軍元帥が、ソ連を除く連合軍に無条件降伏し、5/8 にはソ連に対して無条件降伏しました。

ドイツの領土問題： ドイツは第一次世界大戦でポーゼン州を、第二次世界大戦で東プロシヤ、東ポメラニア、東ブランデンブルグ、シレジア等を失っています。

戦争末期に連合軍側が集まって取り決めた戦後処理の指針「ポツダム協定」において、委譲される領域は「旧ドイツ領域(オーデル・ナイセ線)の東」と書かれています。地図で示すと右図のようです。ブルーが現ドイツ、水色



(Wikipedia/旧ドイツ東部領土)

は第一次世界大戦で移譲された領土、グリーンと黄色は第二次世界大戦で移譲された領土です。ヒトラーは「大ドイツ主義」に基づき、ドイツ民族が住むところは(他民族が居ようとも)ドイツ生存圏だと主張して侵略しました。その様な主張を二度とさせないために、今回移譲した地域からは**ドイツ民族を追放して、一人も居ないようにする**のです。チャーチル首相は「追放こそが、我々が検討できた範囲において、最も満足でき、長く維持できる手段である。終わり無き問題の原因となる民族の混合は行なわない。一掃するのである」と述べています。

オーデル・ナイセ線の東のドイツ話者約 1,400 万人は追放されて難民となって現ドイツ領に移住し、その途上で約 50 万人が死亡した(40~270 万人の諸説あり)と見られています。

17 世紀の 30 年戦争により、約 300 の小国に分解されたドイツ民族を再統一してドイツ帝国を創設した原動力となったプロシヤが移譲されて、現在はロシアのカリーニングラードになり、スラブ人が入植しています。世界史には、これだけ大きな領土問題が山積(これ以外にも各地に多数あります)しています。北方領土問題を語る時は、それらの事も知っておいてください。

6・6 ヒトラーの野望は何故潰えたか

ヒトラー総統は、あらゆる重大問題を彼一人で決裁し、大臣を任命しても閣議を開きませんでした。第三帝国(第一帝国は「ローマ帝国」、第二帝国は「神聖ローマ帝国」、第三帝国は「ナチスドイツ」)の大臣たちが第二次世界大戦の勃発を新聞とラジオで始めて知ったというのは有名な逸話です。当然、ドイツの敗戦は独裁者ヒトラーの責任ですが、彼がここまで強大な権力を振るえたのは、ドイツ国民が彼を心底から崇拜し、支持したからです。

彼は時代遅れになった身分制的家父長的な社会制度を廃止し、下層中産階級の有能な男女に出世の機会を広く与え、平等主義の原則を確立して社会の近代化に努め、目覚ましい成果を挙げています。ドイツの中産階級はこのようなナチスの改革と業績を熱狂的に支持し、第三帝国に最後まで忠誠を尽くしています。

また、牢固たる伝統を誇るドイツの支配階級の思想と、第三帝国の首脳部の思想は大筋で一致しています。ナチスの中心的スローガンである「人種至上主義」「反共産主義」「生存権の主張」は元来ヨーロッパ保守思想全体に通底する中核思想です。ナチズムはドイツ民族の基本的な思想体系と矛盾しておりません。

ドイツが第一次世界大戦にも、第二次世界大戦にも敗れたのは、あれこれの作戦や政策で失敗したと言うより、ドイツの支配階級の目的自身が時代遅れであったためです。植民地や従属国の諸民族が解放されつつある 20 世紀の中頃になって、全ての民族をゲルマン民族に従属せしめ、ヨーロッパの文明国まで滅ぼしてしまおうとする時代遅れな世界征服計画を強行したために敗北したのです。(「世界の歴史 15」村瀬興雄氏の意見)

私には 30 年戦争(1618~1648)により、神聖ローマ帝国が約 300 の小国に分裂し、1871 年にプロシヤが再統一してドイツ帝国を創設するまでの「**ドイツの失われた 200 年**」で他国の近代化を横目で眺めて「自分たちは有能なのに、何故ヨーロッパの片田舎と軽蔑されなければならないのか」との怨念の情を深めた過去の歴史に原因があるように思われます。再統一後は遅れを挽回しようと、ドイツ国民は頭の中身は中世のままで外形だけの近代化を焦り、その結果が二つの世界大戦とその敗戦に導かれたのではないのでしょうか。非常に似た事情の超大新興国家が我々の近くにあることに気付き、注意深く観察してしてください。

第 6 章で参考にした文献：

「世界の歴史 15／ファシズムと第二次大戦後の世界」瀬村興雄／中公文庫

「図解でわかる／11 大近代戦」山崎雅弘／PHP 研究所

Wikipedia：全体主義／オーストリア併合／ミュンヘン協定／平沼内閣／日独伊三国軍事同盟／第二次世界大戦／旧ドイツ東部領土 等

7. 第二次世界大戦／太平洋戦争

7・1 開戦までの動き

アメリカ側の動き：1940/10月に行われた選挙では「私は青年たちを戦場に送らない」と宣言してルーズベルト大統領が三選されています。しかし、彼はその年の12月に武器貸与法の構想を発表すると共に、ラジオの炉辺談話で、「アメリカの今後の外交方針の基調は、アメリカを戦争から守ると同時に、**民主主義の大兵器廠ならしめる**ことにある」と述べています。これは、現在はアメリカは中立を守っているが、それでも価値観を共にする民主主義国を援助することを宣言したものです。

1941/1/6、ルーズベルトは年頭教書を議会に提出しますが、その中で「平時産業の軍需産業への切り換え」「連合国に対する武器貸与法の制定」が提唱されています。ルーズベルトは「独裁者との戦いにおいて必要なのは武器ばかりでなく、自らが守るもの(民主主義)の価値を信ずることである」と国民に説いています。

彼は「四つの自由」(言論と表現の自由／神を敬う自由／欠乏からの自由／(戦争の)恐怖からの自由)演説の4日後、武器貸与法案が提出され、3月には下院260対165、上院60対31で法案が議会を通過しました。評決結果を見ても孤立主義(モンロー主義)が全面的に消滅した訳ではありませんが、アメリカはこの時以来、明確に連合国側の援助に踏み切るとの外交政策に転じたのです。

ルーズベルトは5/27に無制限非常事態を宣言し、6月にはドイツとイタリアでのアメリカ大使館を閉鎖し、7月にはドイツ軍の襲来の可能性に備えて、アメリカ軍のアイスランド進駐がなされました。

また、日本との戦争も避けられないと決意していますが、大統領選の発言の手前、余程の大義名分がないと開戦に向かって国民を納得させることができない状態にありました。

アメリカは対日諜報活動を強化し、1940/9月には日本の海軍と外務省が使用していた暗号解読機の技術を手し、12月には8台のコピーマシンを各部門に配置しています。伝統的にイギリスは戦う相手のことを徹底的に調べ上げる諜報活動に秀でており、1588年のスペインの無敵艦隊を迎え撃つ時も諜報活動の優劣が勝敗を分けた一つの要因だと分析されています。その流れを汲むアメリカも敵の暗号解読には優れた能力を持っていました。残念ながら、日本は昔も今も、この方面では極めて弱体だと評価されています。

日本側の動き：事態は急を告げています。1941/7/25、アメリカは在米日本資産の凍結令を公布、7/28、日本は南部仏領インドシナに進駐します。8/1にアメリカは「全ての侵略国への石油輸出禁止」を発令し、イギリスとオランダも直ちにこれに同調し、いわゆる ABCD 包囲陣(石油禁輸等各国の頭文字)が成立します。

当時の日本は、石油や鉄類や工作機械などの7割以上をアメリカから輸入していたので、この政策は致命的な影響を日本に与えます。戦争になれば、日本は備蓄してある2年分の石油で戦わなくてはなりません。

9/3に日本では大本営政府連絡会議において、「帝国国策遂行要領」が審議され、9/6の御前会議で「外交交渉に依り10月上旬頃に至るも尚我が要求を貫徹し得る目途なき場合においては直ちに対米(対英・対蘭)開戦を決意す」と決定されます。近衛首相は日米首脳会談による事態打開に望みをかけますが、アメリカは首脳会談を拒否してきます。決断を迫られた近衛首相は、中国からの撤兵を条件にする交渉を提案しようとしませんが、これに反対する東条英機陸将は、近衛に総辞職か国策要領による開戦を要求したために、10/18に第三次近衛内閣は総辞職しました。

後を継いだ東条英機内閣は11/1の大本営政府連絡会議で改めて「帝国国策遂行要領」を決定し、要領は11/5の御前会議で承認されました。それ以降、大日本帝国陸海軍は12/8(グリニッジ標準時では12/7)を開戦予定日として、戦争準備を本格化します。

11/20、日本は交渉最終案2案を準備してアメリカのハル国務長官に手渡しますが、ルーズベルト大統領は2案とも拒否し、11/26に**中国大陸・インドシナからの軍、警察力の撤退**や日独伊三国同盟の否定などを含む**ハル・ノート**を提示し、アメリカ海軍も同日アジアの潜水艦部隊に対して無制限潜水艦作戦を発令しました。これを日本に対する最後通牒と受け取った東条内閣は12/1の御前会議において、日本時間12/8の開戦を決定しました。

7・2 太平洋戦争の年表

これから起こる主だった事件を以下に時系列で列べますから、太平洋戦争の全体像を把握してください。

年	月/日	事 件
1941(S16)	12/8	真珠湾攻撃、英領マレー半島・タイ南部に上陸、米英に宣戦布告
Sは昭和	12/10	マレー沖海戦、オランダ、日本に宣戦布告
	12/12~12/25	日本軍/香港島、ペナン島、ウェーク島占領、北ボルネオ、ミンダナオ島へ上陸
1942(S17)	1/2~1/23	日本軍/ルソン島、クアラランプール、ラバウル島占領
	2/15	シンガポールの英蘭軍が降伏
	2/20~3/5	バリ島沖、ニューギニア沖、スラバヤ沖、パタビア沖等の海戦、ジャカルタ占領
	3/13	マッカーサー司令官フィリピンより脱出
	4/18	空母発進の B-25 爆撃機が東京初空襲
	5/4	ビルマ制圧完了 南方作戦完遂
	6/5	ミッドウェイ海戦で日本敗北 戦局の転換点！
	7月	フィリピン全土占領
	8/7	米軍ガダルカナル島に上陸 米軍の本格反攻始まる
1943(S18)	5/12~5/29	米軍、アッツ島に上陸、日本軍守備隊玉砕(全員戦死)
	7/29	日本軍、キスカ島から撤退
	11/21~11/23	マキン島・タワラ島の日本軍守備隊玉砕
1944(S19)	2/6	ケゼリン島の日本軍守備隊玉砕
	2/22	エニウェトク環礁の日本軍守備隊玉砕
	3/8~7/4	日本軍インパール作戦に敗れる
	7月	7/18 東條英機内閣総辞職、7/22 小磯国昭内閣成立
	8/2	テニアン島の日本軍守備隊玉砕
	8/11	グアム島の日本軍守備隊玉砕
	10/20~10/23	米軍、レイテ島に上陸。レイテ沖海戦
	11/24	米軍 B-29 爆撃機、マリアナ諸島より東京を初空襲
	1/6~8/15	ルソン島の戦い
1945(S20)	2/18~3/22	硫黄島の戦い、日本軍守備隊玉砕
	3月	3/10 東京、3/12 名古屋、3/14 大阪、3/16 神戸、3/25 名古屋 大空襲
	4月	4/12 ルーズベルト大統領急逝、後継トルーマン大統領／4/30 ヒットラー総統自殺
	4/1~6/23	沖縄戦／4/7 戦艦大和撃沈、4/5 小磯国昭内閣総辞職、4/7 鈴木貫太郎内閣成立
	7/26	英米ソ首脳ポッドム宣言発表、日本はこれを黙殺(傷を深めた)
	8月	8/6 広島に原爆投下、8/9 長崎に原爆投下、御前会議でポッドム宣言受諾を決定
	8/10	日本、連合国にポッドム宣言受諾を打電により通告
	8/15	日本国民に玉音放送(終戦の詔)
	8/16~9/5	ソ連軍南樺太から北方4島まで火事場泥棒的侵略
	10/15	本土の日本軍の武装解除完了

開戦前に海軍総司令官山本五十六(いそろく)元帥は「(石油の備蓄がある)2年間は大暴れに暴れてご覧にいきます」と大見得を切ります。平時には各国が表敬訪問し会う海軍軍人は、アメリカの国情を自分の目で見て知っており、アメリカが日本の歯が立つような相手ではないことをよく理解しています。だから「日本優勢の2年以内に講和してくれ」と願っているのです。だが、上の年表では日本が優勢だったのは僅かに最初の8ヶ月間で、山本元帥の思いは実現しませんでした。以下に太平洋戦争の代表的な事件を記述してみましょう。

7・3 開戦！太平洋戦争

戦時中の日本では「大東亜戦争」と呼ばれている「太平洋戦争」が開始されたのは、日本時間1941/12/8の01:30にイギリス領マレー半島に日本陸軍が奇襲攻撃を掛け、日本海軍航空隊が真珠湾攻撃を掛けた時点です。

送信側の外務省と、受信側の日本大使館の不手際があつて、宣戦布告がハル國務長官に手渡されたのは04:20になったために、「日本のだまし討ち」と喧伝され、アメリカ国内の世論を「卑劣な国家・日本を打倒せよ」で統一し、選挙での不参戦公約に縛られていたルーズベルト大統領が大手を振って開戦できる状態となりました。

このような世紀の不手際を起こしながら、外務省は遅延責任者の処分を行わず、戦後も関係者たちは普通の昇進コースを辿っています。

右上の写真で被弾した戦艦のマストが見えています。アメリカ側の損害は戦艦の沈没5隻、中破3隻、駆逐艦の沈没2隻、巡洋艦の中破3隻、航空機の破壊188機、損害155機、戦死者2,345人(日曜日で陸に上がっていた乗組員が多かったため、被害が少なかった)でした。

日本側は航空機の未帰還29機、損害74機、戦死64人、特殊潜行艇5隻沈没でした。この損害により、アメリカの太平洋艦隊の戦艦部隊は戦闘能力を喪失し、制海権が日本の手に帰したため、その後の日本軍の南方作戦を容易にしています。

それまでは空母艦載機では装甲が頑丈な戦艦を沈没させることは出来ないだろうとの考えが専門家の間でも主流でしたが、この戦闘はその神話を打ち砕き、航空機はいかなる艦船でも撃沈できることを実証しました。

大艦巨砲主義時代が終焉を迎え、時代は航空主兵時代へと移ったことを象徴する事件でした。

真珠湾攻撃時に、アメリカの空母も重要な攻撃目標になっていましたが、偶々全ての空母が輸送任務等で外海に出ており、被害を受けなかったために、その後の作戦で大きな力を発揮しています。浅瀬であったために沈没した艦船も多くは修復されて再び任務に就き、最終的に失われたのは戦艦2隻だけでした。

12/10にはイギリスがマレー海域の制海権を取るために派遣した戦艦プリンスオブウェールズと巡洋艦レパールの2隻を日本海軍の航空部隊が襲撃して、撃沈させています。

戦艦が航空機に敵わないことが、再び実戦で証明されました。ヨーロッパ戦争でも、ドイツは第一次世界大戦で主役を務めた大口径砲の代わりに、急降下爆撃機による狙い定めた爆弾でフランスの砲兵陣地を効果的に潰しました。**大砲の時代から航空機の時代へと Paradigm Change(パラダイム・チェンジ: 大前提の変革)** が起こったのです。軍事技術の大きな転換点です。

そうなると、ライト兄弟の初飛行から始まって、終始世界の航空機界をリードして、**空の帝国**と言われるアメリカに有利な時代が到来しているのだという大局観を持って、以下の戦局の動きを見てください。

真珠湾攻撃の1ヶ月後の1942/1/6の一般教書演説で、ルーズベルト大統領は国家目標として戦車4万5千台、軍用機6万機、数千隻の軍艦・船舶を製造すると宣言します。同年2月から自動車の新車販売と娯楽のためのドライブが禁止、住宅と幹線道路の建設が中止され、戦略資材は配給制となります。同年の工業生産高の成長率はアメリカ史上最大となり、1929年の世界大不況以来の長引いた不況も一気に戦時好況に転じました。同年から1944年にかけて、アメリカは各種航空機229,600機、1000隻程度だった商船隊は約6000隻まで増加しています。「No Ordinary Time」という本には点火プラグ工場は機関銃を、料理コンロメーカーは救命艇を、回転木馬の工場は砲架を、玩具メーカーは羅針盤を、コルセット製造業者は手榴弾のベルトを、ピンボールマシン工場は徹甲弾を作ったと記されています。注目すべきは、これらの産業構造の大改革が僅か



(Wikipedia/真珠湾攻撃)

数ヶ月で実現したことです。勿論、日本側でも同様の戦時態勢改革を行っていますが、豊かな国内資源を有する技術最先端国が行ったこれらの改革には全く歯が立たなかったのが、直ぐに戦場で明らかになります。

7・4 順調に進んだ南方進出作戦

開戦直後は日本が南太平洋の制空権と制海権を制していますので、南方進出作戦は順調に進展しました。1941/12/8の英領マレー半島とタイ南部への上陸をかわぎりに、1942/5/4のビルマ占領で日本軍の南方作戦は成功裡に完成します。現在の国名でベトナム、ラオス、カンボジア、タイ、ミャンマー、マレーシア、シンガポール、フィリピン、インドネシア等がこれに当たります。

「東洋人の日本が、西洋人によって植民地化されていた東洋の国々を解放した」ことは歴史上の事実です。戦後の旧宗主国の行動を見ても、太平洋戦争がなければ、これらの国々が現在でも欧米諸国の植民地であり続けている可能性が非常に高いのです。

では、日本はこれらの国々から解放者として今日感謝されているのでしょうか。国によっていろいろ事情が違い、そうとばかりは限りません。それらの事情は、次の章で改めて説明しましょう。

7・5 痛恨のミッドウエー海戦



ミッドウエー島の位置(「詳解現代地図」二宮書店 p103)

ミッドウエー諸島は左図のように、日本とハワイ諸島の間点の日付変更線付近にあり、面積 6.2 km²の小さな群島です。ミッドウエー島の位置は、軍事的に重要な位置にあり、太平洋を横断する航空機の給油地となっていました。1940年の初め頃より、ハワイ防衛の拠点として、軍事基地化が進みます。左下図は1941年の写真で、珊瑚礁の中に二つの島が見え、手前がイースタン島、向こうがサンド島です。

この小さな島とその海域を巡って、開戦6ヶ月目の1942/6/5~6/7に掛けて一大海戦が



イースタン島とサンド島(Wikipedia)

行われ、日本海軍は一挙に主力空母4隻とその艦載機を失うという悲劇的な敗北を喫し、これが戦局の転換点となり、以後、日本軍は戦争の主導権を取り返すことができなくなりました。

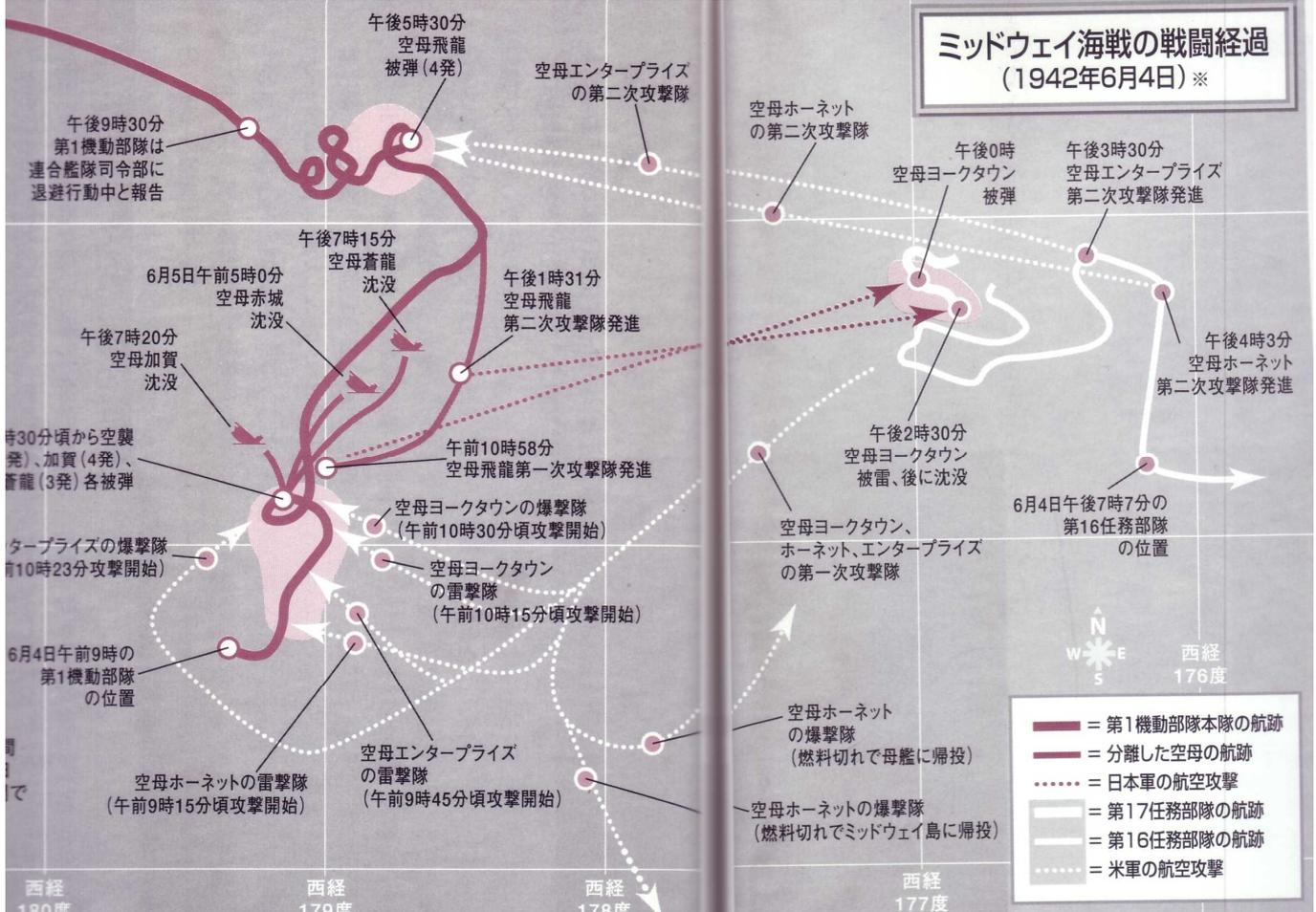
当時、米空母部隊は非常に小うるさい存在になっていました。1942/4/24、米軍は双発の爆撃機 B-25 16機を空母より発進させ、12時間かけて東京、名古屋、大阪を散発的に爆撃し、そのまま直進して中国の麗水に燃料切れで不時着しています。このドーリットル空襲(司令官の名)による被害は僅少ではあったが、易々と日本上空に敵機を侵入させたことで日本は震撼します。

山本長官はミッドウエー島を占領すれば、米空母部隊は必ず奪還に現れるだろうから、これを一挙に潰す作戦を立てます。

ところが、諜報能力に優れた米軍は、真珠湾攻撃直前に変更された日本軍の暗号を苦心して解読し、この作戦の全体像と動員された部隊の戦力が全て事前に知られており、米軍はそれに対抗する作戦準備を進めます。

日本海軍は空母4隻、アメリカ海軍は空母3隻の戦いで、全体的な戦力としては日本側が優勢の筈でした。1942/6/5、南雲中将率いる第一航空戦隊(空母・赤城と加賀)、第二航空戦隊(空母・飛竜と蒼竜)の計108機が出撃し、ミッドウェー島の米軍基地を叩きます。基地では暗号解読により反撃準備を調べ、要撃に向かう機以外はレーダーによる敵襲を検知してから退避させました。要撃に向かった米軍機の多くは第一次攻撃隊の護衛戦闘機・零戦に撃墜されますが、退避行動のために基地に駐留する航空隊の地上撃破には失敗します。このため、再度、ミッドウェー島を爆撃する必要を源田航空指令から進言されて、南雲司令官は既に対艦攻撃用に急降下爆撃機には通常爆弾を、攻撃機には魚雷を搭載済みであったのを、全ての機に陸用爆弾を搭載させます。この時、偵察機から「敵艦発見、空母らしきもの1隻を伴う」の打電がありますが、敵までの距離はまだ遠いとの報告(本当は近くまで来ていた)なので、まだ時間的余裕ありと判断して、大急ぎで再び対艦攻撃用に積み替えをします。

4隻の空母の甲板と格納庫は爆弾や魚雷が散乱して、大混乱状態になっています。そこへ米軍機が一斉に襲いかかってきました。当時の海軍にはレーダーの装備がないため、このような急襲を許してしまったのです。



ミッドウェー海戦図 (「11 大近代戦」山崎雅弘/PHP 研究所 p48~49)

空母・飛竜は幸運にも他の3隻の空母から離れていたために、この難から免れました。直ちに独断で即時攻撃にかかり、帰投する米軍の編隊の跡を見つけ、09:10、急降下爆撃隊は空母ヨークタウンに爆弾3発を命中させ、航行不能に陥れました。14:30、飛竜は米軍の奇襲を受け、結局は沈没し、全ての主力空母が失われました。喪失した艦載機は289機、航空機乗組員は108人でした。

事件後、作戦戦訓研究会(フォローアップ会議)は開かれず、敗戦の責任者が処罰されることもありませんでした。その上、海軍軍令部はこの敗北を国民はおろか、参謀本部や東条首相にすら隠蔽します。大本営はこの海戦の戦果を「空母ホーネット、エンタープライズを撃沈(どちらも無傷でした)、味方の損害は空母1隻、重巡洋艦1隻沈没、空母1隻大破」と国民に発表します。以後、天皇に対しても、国民に対して

も、歪曲した戦果報告をするのが常態となり、大本営発表の信頼性は地に墜ちます。

連合艦隊の中核戦力を一挙に失った事による軍幹部等の困惑は甚だしく、「航空基地の偉大なる威力」神話が生まれ、後に損害を顧みずに航空基地を奪われたガダルカナル島を奪還しようとして傷を深める動機にもなっています。

その後の同年行われた第一次ソロモン海戦や南太平洋海戦、翌年初頭のレンネル島沖海戦などの幾つかの局部的戦いで日本軍は勝利を収めますが、ガダルカナル、ニューギニアやマキン・タラワ島を巡る戦いで負けるなど、開戦から1年を経ずして日本軍の勢いは落ち始め、後年、ミッドウエー海戦が太平洋戦争の転換点と評されるようになります。

以下にミッドウエー海戦に敗北した原因を分析して見ましょう。ここには太平洋戦争で日本が軍事的に負けた原因が凝縮しています。

指揮体系：航空戦では刻一刻と変わる戦況に即応できる指揮系統が要求されます。アメリカ軍では空母部隊指揮と実戦の経験があるフレッチャー少将が作戦全体を指揮します。彼は戦闘中に自分の空母を失うと、即座に生き残った空母のスプルーアンス少将に指揮権を移譲し、その空母により日本軍の残存空母を仕留めています。

対照的に南雲中将の経歴は水雷艇戦隊の指揮官であり、以前には空母戦隊の指揮の経験がなく、このような戦いに不慣れであったことは否めません。敵を間近にして地上攻撃と対艦攻撃の兵装交換で混乱し、敵襲に対して最も脆弱な状態を作り出してしまいました。

また、日本側は地上航空基地があるミッドウエー島とアメリカ機動部隊の二つの攻撃目標を持っていて、その選択に迷って失敗していますが、アメリカ側の攻撃目標は単純に日本の機動部隊一本に絞られていた違いも大きかったようです。

艦隊構成：日本軍は戦艦を主力部隊とする概念で空母部隊も編成しています。空母は飛行部隊を持っており、各艦の距離を戦艦の10倍以上広くできます。それなのに、戦艦並みの距離で4隻が一緒に行動したために、同時攻撃を受けて、3隻が壊滅しました。

対照的にアメリカ軍は空母を独立に動かし、同時にやられるリスクを低くしていました。日本側は護衛の駆逐艦を十分な数だけ有していなかったために、集団行動になった嫌いがあります。こういう点でも、日本側には空母時代にマッチした戦略思想が欠けていたのでしょう。

レーダーと通信設備：アメリカ軍はレーダーを装備して、敵から奇襲を受けることはありませんでしたが、日本軍は当時は装備していませんでした。また、当時の日本の航空機が積んでいた通信機は近距離でもまともな交信ができない代物ですから、レーダーだけあっても、総合的な早期警戒システムは構築できそうありません。零戦のベテラン航空士は「使い物にならない通信機は積み込むのを止めて、それで軽くなった分、空戦での格闘能力が高まる」といっています。彼我の電子技術の差は非常に大きかったのです。

情報戦：アメリカ海軍は短期間で日本海軍の変更された暗号解読に成功し、的確な迎撃作戦を準備しています。一方、日本軍は米軍の暗号を殆ど解読できずに状況判断しています。この情報戦は日本海軍の組織の中で最も稚拙な個所で、そもそも連合艦隊には情報参謀という情報分析を専門に行う参謀がおらず、その価値が軽視されていたために受けた報いです。また、日本軍は通信全部を暗号化していたために、通信に時間が掛かっていますが、アメリカ軍は緊急時には時間を掛けないために平文で交信するなど、緩急自在な融通性に富んだ運営をしています。

ダメージ・コントロールの欠如：日本海軍では艦船被弾時に備えた防火・消火設備が殆ど整備されておらず、

火災に備えた訓練も行われていません。そのため、空母が数発被弾して火災が発生しただけで沈没してしまう結果となっています。特に赤城は爆弾2発で沈んでおり、第二次世界大戦中の撃沈された正規空母中最少の被弾数記録です。反面、アメリカ軍のヨークタウンは第一次攻撃隊の急降下爆撃時に被弾したがすぐに復旧し、第二次攻撃隊が無傷の空母と誤認したほど回復しています。第二次攻撃隊からも被弾しましたが(両攻撃で計3発)、自力航行可能なまで復旧しています。この艦船被害時の回復力の違いが、明暗を分けたとの指摘があります。

7・6 飢餓地獄となったガダルカナル島の攻防戦

日本海軍はアメリカを相手に長期持久戦を行うのは不利と考え、積極的に戦線を拡大して、早期に主力艦隊同士の決戦を図っていました。そのための第一目標が連合国の反攻拠点と考えられていたオーストラリアの攻略作戦でした。日本陸軍は大陸方面での作戦を重視しており、太平洋方面は海軍の領域であるとの認識で、オーストラリア攻略作戦に消極的でしたが、アメリカ本土からオーストラリアを孤立させることに関しては海軍と見解が一致します。

ソロモン諸島の制空権拡張のため、ラバウル以南の前進航空基地を建設するために、大本営は1942/6月下旬にガダルカナル島の飛行場建設を決定しました。右の地図の中央部にガダルカナル島があります。ニューギニア島とオーストラリアの直ぐ近くの島です。

1942/7/6から海軍設営隊2,571人がガダルカナル島に上陸し、飛行場の建設作業を開始しました。

大本営は連合軍の太平洋方面の反攻時期は1943年以降と想定していたため、戦闘能力がある人員は僅か600人です。日本軍の予測は外れ、アメリカ軍は7/2に対日反攻の「ウォッチタワー作戦」を發動させ、ガダルカナル島がターゲットとなります。8/7、午前4時、10,900人の海兵隊員が、艦砲射撃と航空機の支援のもとにガダルカナル島テナル川東岸に上陸しました。日本軍は完全に不意を突かれて、完成間近な飛行場を含むルンガ川東岸一体は連合軍の手に落ちました。

ここで出動した海軍は連合軍艦隊と遭遇して8/8に第一次ソロモン海戦が行われ、重巡洋艦4隻を撃沈、1隻を大破させて日本海軍が戦術的な大勝利を収めますが、残念ながら本来の目的であった輸送艦隊への攻撃は中止されました。このため、アメリカ軍は重火器を含む大量の物資の揚陸に成功し、これにより飛行場が完成し、このヘンダーソン基地から航空機が出動できるようになって、その後の戦いでアメリカ側が圧倒的に優位に立ちます。

誤った情報を信頼して、日本陸軍は8/18に900人の一木支隊を送り込みますが、相手は1万人を越す大部隊で、忽ち殲滅されます。

8/23~24にかけて第二次ソロモン海戦が行われ、両軍共に大きな被害を出しますが、アメリカ軍は護衛空母からヘンダーソン基地に航空機を送り込むことに成功して、基地からの出動は一段と活発になります。

9/7に上陸した約1,000人の川口支隊は、一木支隊敗北の教訓から、正面攻撃を避けて迂回してジャングルから飛行場を攻撃することを試みます。鶴嘴(つるはし)とスコップによる人海戦術で総攻撃当日までジャングル内の輸送路を作りますが、こんな道路では重火器や砲弾の運搬は不可能であり、それらの大部分は後方に



ガダルカナル島の位置 (中央部)

(「詳解現代地図」二宮書店 p105)

取り残され、開鑿作業により兵士は疲労困憊します。9/12に別ルートで来た隊と共に総員約6,000名で5方向から第一次総攻撃を開始しますが、アメリカ軍の集中砲火に前進を阻まれ、各隊は鉄条網と火線を乗り越えられず、乱戦の末、日本軍は敗走しました。

再起を期して約5,000人が駐屯しますが、この時点から兵站戦が細い日本軍は食糧・武器・弾薬の補給不足が深刻化して、飢餓に苦しむカダルカナル島は「餓島」と呼ばれる様相を呈します。

日本軍はヘンダーソン飛行場を叩かぬ限り物資が揚陸できぬと考え、10/12~13にかけて戦艦2隻を中心とする艦隊がヘンダーソン飛行場を艦砲射撃し、飛行機の半分以上とガソリンの殆どを焼失させる打撃を与えますが、アメリカ軍はこれにも備えて戦闘機用の小さな飛行場を別に建設しており、これは日本側に知られていないため、難を逃れました。このため、日本軍は第二次攻撃の部隊約2万人を揚陸作業中に秘密飛行場から出動したアメリカ空軍の攻撃を受け、兵員の上陸は終わったものの、食糧は50%、重火器類は20%の揚陸が終わった段階で輸送船団を北方に避難させます。

物資不足から予定していた正攻法が困難になり、右翼部隊を指揮していた川口支隊長(少将)が大本営から派遣されてきた辻政信作戦参謀(大佐)に、前回の攻撃の失敗の経験から迂回攻撃を進言しますが意見が対立し、川口支隊長は罷免されてしまいます。主力部隊はジャングル内を切り開いた道路を進みますが、戦車や重砲はともそこを進むことはできず、開けた海岸沿いに匍匐部隊として進軍します。主力部隊には山砲、速射砲、迫撃砲などの軽量の砲が配属されますが、それでも人力搬送は困難を極め、大半は進撃路の遙か後方に取り残され、10/24からの第二次総攻撃には間に合いませんでした。川口支隊長の意見を聞いておれば、その二の舞は踏まなかったでしょう。

結局、アメリカ軍の猛砲火を浴びて兵員の半数以上を失い、壊滅状態になります。10/26には師団参謀がガダルカナル奪回は不可能との旨を辻政信参謀に報告し、作戦は中止されます。

11/12に服部卓四郎陸軍作戦家長が帰京して、東條陸軍大臣に報告していますが、その中に「我が軍の大隊長級の能力薄弱」「軍司令官は健康。『やる』と言っているが第一線を把握していない」と聞き捨てならないことを言っています。この状況下で敵とジャングルに正面から立ち向かい、最も事情に精通している大隊長がもう無理と判断しているのを「能力薄弱」と貶(けな)すのは、真実を直視しない軍幹部の精神状態をよく表しています。そして、国の興廃を賭けたこの一戦に、ノモンハン(ノモンハン)の敗戦の張本人である辻政信と服部卓四郎の名前が再び出てくる因縁に、日本はこんな人たちに国運を任せたのかと暗澹たる思いがします。

結局、勝敗を決めたのはガダルカナル島に兵員、武器・弾薬、糧食を揚陸しようとする日本軍を水際で攻撃する航空機の働きでした。日本軍は末期には船体を海岸に突っ込ませて何回も兵員と物資の強行揚陸を行いますが、歩ける兵員は上陸できても、足がない物資は揚陸できず、或いは揚陸して集積している状態で破壊・炎上させられ、兵士たちは武器も食糧もない状態で、飢餓地獄に陥ります。海岸は片道切符で来た日本の輸送船や潜水艇の累々たる残骸の山となります。制空権を取られた戦争がどんな惨めなことになるかの見事な手本となりました。

11/24にはある将校が大本営に向けて「そこら中でからっぽの飯盒を手にしたまま兵隊が死んで腐って蛆が湧いている」と報告していますが、撤退はまだ決まらず、その間にも多くの将兵が餓死してゆきました。

殆どの部隊では、何とか歩ける兵士は全て食糧の搬送に当たり、陣地を守るのは立つこともできぬ傷病兵という状態に陥っています。末期になると軍紀の荒廃も極限に達し、カニバリズムも発生したといわれます。12/31の御前会議で「継続しての戦闘が不可能」として撤退が決定され、1943/2/1~2/7にかけて撤退作戦が行われました。各部隊は殆ど予定通りに撤退地点に來られましたが、身動きができなくなった傷病兵は自決させられました。



放棄された山月丸と潜水艇
(Wikipedia/ガダルカナル島の戦い)

ガダルカナル島に上陸した総兵力は 31,404 人、内、撤退できたもの 10,652 人。それ以前に負傷・後送された者 704 人、死者・行方不明者は約 2 万人であり、内、直接の戦闘での戦死者は約 5,000 人、残りは餓死だったと推定されています。対するアメリカ軍の損害は戦死者 1,598 人、戦傷者 4,709 人でした。

日本側の航空機の損害はミッドウエーの約 3 倍で、搭乗員の損害は 3 倍を遙かに越えました。このためにその後の日本の航空隊の練度が著しく低下しました。航空部隊の消耗の主な原因は、拠点であるラバウルから往復約 8 時間という長距離飛行を強いられたからです。

大量の輸送船が撃沈され、民間の商船の徴用が行われたことで、それ以降の海上輸送と軍需生産に深刻な打撃を与えました。

川口支隊の敗北の時点で敗戦の原因を冷静に判断して兵を退いておれば、その後の泥沼のような消耗戦で何らなすところなく戦力と継戦能力をすり潰すような事態は避けられたと考えられます。退き時が決断できなかった大本营、参謀本部の責任です。大本营発表は次の通りです。

「ソロモン諸島のガダルカナル島に作戦中の部隊は、昨年 8 月以来、激戦敢闘克く敵戦力を撃潰しつつあったが、その目的を達成するにより 2 月上旬同島を撤し、他に転進せしめられたり」。

「ガダルカナルは、単なる島の名前ではない。それは帝国陸軍の墓地の名前である」(「帝国陸軍の最後：2 決戦編」伊藤正徳／角川文庫)

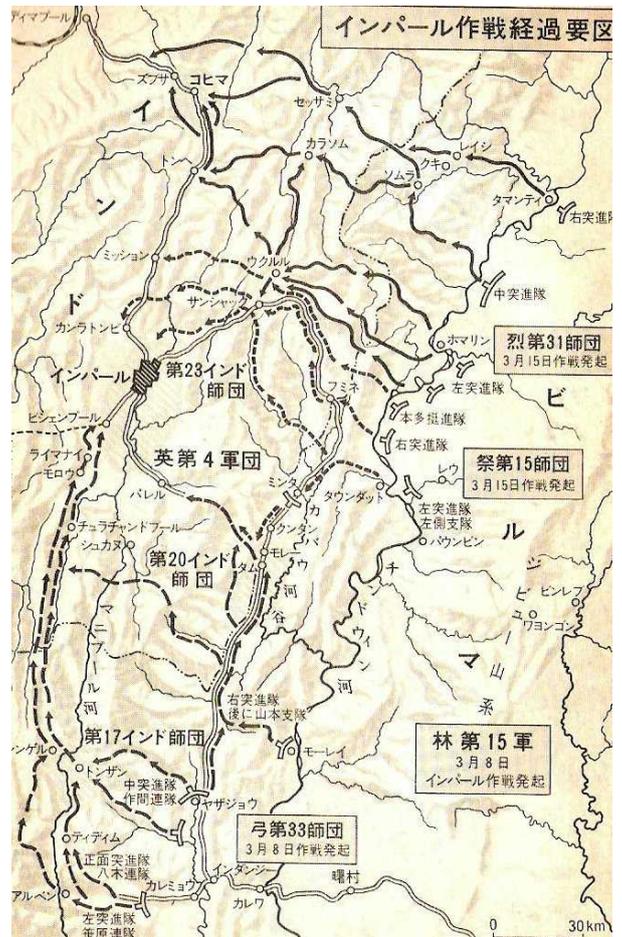
7・7 最悪の司令官によるインパール作戦の惨状

これは、この戦争において最も愚かで無責任な司令官による無謀極まりない作戦が如何に大きな犠牲を生んだかの証言です。時は 1944/3 月、日本軍が守勢になってから既に 1 年 7 ヶ月が経っていました。こんな時期に蒋援ルート of 遮断だけでなくインド奥深く侵攻してインドの独立を支援して、イギリスを始めとする連合軍の後方戦略を攪乱しようというのですから、軍事力学としては例え勝っても戦争の大勢には何のプラスにもなりません。戦争に対する大局観そのものが全く欠如していました。

日に日に敗色濃厚になる戦局を一気に打開したいという寺内南方軍司令官の思惑を体し、牟田口第 15 軍司令官(中将)が責任者となって作戦・指揮しています。この牟田口司令官こそ、満州事変の発端となった柳条湖事件を惹起した張本人であり、満州事変が遂に国運を賭ける太平洋戦争にまで発展したことに責任を感じて、自分が起死回生の働きをせねばならぬとの過剰な使命感に燃えていたのです。

上級司令部全てが危険性が大きいと反対しながら、大本营も最後には「牟田口がそんなに熱意を持つならやらせてみるか」と妥協したのが大間違いでした。現実性よりも精神論を買うこのパターンが、この大戦で日本軍の随所に見られました。南方総軍の参謀副長は強硬に反対して更迭され、

第 15 軍の参謀長も反対して牟田口により罷免されました。もう正面から反対する者は誰もおりません。日本軍の意図を読んでいたイギリス軍は途中の地域を放棄してインパールに兵力を集結させます。物資の補給がままならぬ中、3/8 から第 15 軍の 3 個師団が作戦を開始します。ジャングル地帯での作戦は困難を極めました。牟田口の考案した牛・水牛・山羊・羊に荷物を積んで行軍に伴い、必要に応じて糧食に転用し



(「インパール」高木敏郎より)

ようという「ジンギスカン作戦」は、チンドウィン川渡河時に半数が流されて水死し、ジャングルや急峻な山岳地帯で食べる前に脱落し、忽ち破綻しました。3万頭の家畜を引き連れて行進する日本軍は、敵からの爆撃に曝されて家畜は荷物を持ったまま散り散りに逃げ惑い、多くの補給物資が散逸しました。4月に入って雨季となり、補給線が伸びる中でイギリス軍からの強力な反攻が始まると、前線では補給を絶たれて飢える兵が続出、死者・餓死者が大量に発生する事態となります。衰弱した日本兵はマラリアに感染する者が続出し、作戦続行が困難になりました。しかし牟田口は4/29の天長節までにインパールを陥落させることにあくまで拘ります。

第31師団は油断していたイギリス軍を急襲してコヒマを占領します。コヒマは交通の要衝で、最重要援蔭ルートの一つレド高路への要衝ダイマプールまで一息なのですが、糧食も弾薬も何一つ補給されない状況では、コヒマ維持すら不可能でした。事態を正しく認識した第31師団長・佐藤中将は「作戦継続困難」と度々撤退を進言しますが、後方の司令部にある牟田口はこれを拒絶して作戦継続を厳命し、両者の対立は激化します。5月末、遂に佐藤は部下を集め「…軍は兵隊の骨までしゃぶる鬼畜と化しつつあり、即刻、余の身をもって矯正せんとす」と告げ、司令部に対しては「善戦健闘60日に及び、人間に許されたる最大の忍耐を経て、しかも刀折れ、矢尽きたり。何れの日にか再び来たって英霊に詫びん。これを見て泣かざる者は人にあらず」と返電し、6/1兵力を補給集積所とされたウクルルまで退却しますが、そこにも糧食・弾薬が全くなかったために、独断で更にフミネまで後退しました。激怒した牟田口により佐藤師団長は罷免され、同様の進言をした第33師団長も第15師団長と共に更迭される事態となります。

退却戦に入った兵士たちは飢えに苦しみ、イギリス軍から空陸の攻撃を受け、マラリアや赤痢に罹った者は次々と脱落します。退却路に沿って延々と続く蛆の湧いた餓死者の腐乱死体や、風雨に晒された白骨が横たわる悲惨な光景を、日本兵たちは「白骨街道」「靖国街道」と呼びます。遅疑逡巡の後、7/3に作戦中止が正式に決定します。投入兵力86,000人、帰還できたのは僅か12,000人でした。

7/10、牟田口は幹部を集めて「諸君、佐藤は……皇軍は食うものがなくても戦いをしなければならないんだ。兵器がない、やれ弾丸がない、食うものがないなどは戦を放棄する理由にならぬ。弾丸がなかったら銃剣があるじゃないか。……日本男子には大和魂があることを忘れちゃいかん。日本は神州である。神々が守ってください。……」。彼は戦後も自分の判断の正当性を訴えて多数のパンフレット等を発行し、いっかな反省の色がありませんでした。

インパール作戦について長々と書きましたのは、この事件が日本陸軍の精神状態を最も忠実に語ってくれるからです。戦時中の日本人もこれと同じ精神状態になるように洗脳されていました。

「人類と社会…古代」の第3章のメソポタミアの王サルゴンの項に、徒歩で遠征する際にどれだけの食糧と装備を持つべきかの目途を示す、次の文章がありました。

……エンゲルの計算に依れば、軍隊規模とは大筋で無関係に、兵士たちと随伴民間人たちが運搬できる自分たちの食糧は2.5日分だった。4日分ともなれば、かなりの数の荷物運搬用動物が必要だった。……完全自給の軍隊の生存期間は3日だった。これはギリシャ軍とローマ軍の食糧配給システムによっても確認できる結論である。……これが世界を征服する大領域帝国について我々が築き上げるイメージの、全くありのままの基盤なのである！……
（「ソーシャルパワー（I）」 p148~154）

陸軍大学校では、このような戦争の常識論を教えてなかったのでしょうか。代わりに精神的な強ささえあれば、如何なることも成就できるとの精神論で洗脳していたようです。リアリティーの無さには脱帽です。この作戦の困難さを陸戦史普及会編「インパール」上巻は次のように説明しています。

「この作戦が如何に無謀なものか、場所を内地に置き換えて見ると良く理解できる。インパールを岐阜と仮定した場合、コヒマは金沢に該当する。第31師団は軽井沢付近から浅間山(2,542m)、長野、鹿島槍

岳(長野の西 40 km、2,890m)、高山を経て金沢へ、第 15 師団は甲府付近から日本アルプスの一番高い所(槍ヶ岳 3,180m・駒ヶ岳 2,996m)を通して岐阜へ向かうことになる。第 33 師団は小田原付近から前進する距離に相当する。兵は 30~60 kgの重装備で日本アルプスを越え、途中、山頂で戦闘を交えながら岐阜に向かうものと思えば凡その想像は付く。後方の兵站基地は宇都宮に、作戦を指導する軍司令部の所在地は仙台に相当する」。

7・8 激戦！硫黄島

戦争論でやってならないこととしているのは、①**戦力の逐次投入**(小出しに少しずつ出すこと)、②**兵力の分散**、です。理由は戦闘正面の打撃力は**ランチェスターの 2 乗法則**(兵数 2 倍で打撃力 4 倍)に従うからです。

日本軍はガダルカナルでは戦力の逐次投入をやり、完敗しました。

緒戦で急速に戦線を拡大したために、占領した島々に少数ずつの守備隊を置く兵力の分散をやり、戦況が悪化するとそれらの島を一つずつ攻略され、前出の年表のように次々と守備隊が玉砕しています。

その中で、歴史に残る善戦をしたと讃えられるのが硫黄島守備隊です。守備隊長 栗林忠道中將は日本陸軍が過去に行ったのとは全く異なる、自己の信念に基づく防衛構想でアメリカ海兵隊と向き合いました。

彼はこれまでのような海岸線に近い平地に陣地を築いて敵を待ち受ける「水際作戦」では、圧倒的な艦砲射撃で容易に破壊されると考えます。

代わりに島の山地部分に総延長 18 kmに及ぶトンネル式陣地を構築して、長期持久戦に備えると同時に、部下の将兵に無闇に突撃して生命を無駄に失うことがないように厳命しました。1945/2/16 の朝まだき、アメリカ海軍による艦砲射撃が始まります。3 日間で 57,000 トン以上の砲弾と爆弾を島の海岸に叩き込み、2/29 の 09:00 に水陸両用車 LVT で上陸した海兵隊員は反撃が殆どないのを見て、日本軍は壊滅したと思いました。ところが 11:20、突如日本軍の一斉射撃が開始され、見晴らしの良い海岸に上陸しつつあった海兵隊員の頭上に雨あられと砲弾が降り注ぎました。上陸初日だけで 2,400 人近い死傷者を出します。栗林司令官の指揮宜しきにも拘わらず、結局は多勢に無勢で 3/26 には全滅しますが、日本軍の死傷者約 21,900 人に対し、アメリカ軍の死傷者は約 29,000 人の多数に上り、アメリカ政府と軍上層部に「日本本土侵攻」がどれほど大きな代償を伴うかを強烈に印象づけました。



(Wikipedia/B-29(航空機))

7・9 日本全土が B 29 の爆撃圏内に

前出年表のように、緒戦で日本軍が占領した南太平洋の島々の内、利用価値の高い島から順次、アメリカ軍に各個撃破で奪い返されて行きました。そしてマリアナ群島のサイパン島、テニアン島、グアム島の飛行場から右図の B-29 による日本本土爆撃が始まります。

B-29 はボーイング社の製品で、翼巾 43.1m、全長 30.2m、ライト社の R-3350 ダブルサイクロン(複列星形)18 気筒エンジン(離陸馬力 2,200

HP、高度馬力 1,800 HP) 4 基、全装重量 61.3 トン、爆弾 9 トン、巡航速度 581 km/時、航続距離 4,585 km、乗員 10 人、武装 20 mm機銃 1 門、12.7 mm機銃 12 門の当時としては驚異的な仕様を持つ戦略爆撃機です。初飛行は 1942/9/21、生産期間は 1943~1945 年、生産台数は 3,900 機でした。

アメリカ陸軍の航空部門は 1934/5 月に超長距離大型爆撃機開発計画「プロジェクト A」をスタートさせ、その中から出てきたのが B-29 です。高性能の排気ターボチャージャーにより空気が希薄な高度 10,000m で巡航できます。乗員室内は高度 1,000m の圧力で与圧・空調されて居住性が良い贅沢な仕様です。

日本の航空機は比較的的低空での戦闘用として製造されていたために、高度 1 万 m で来る B-29 を迎撃することが非常に困難でした。B-29 の延べ出撃回数は 33,000 機、喪失数は 714 機で出撃に対する損失率は 2.2%で

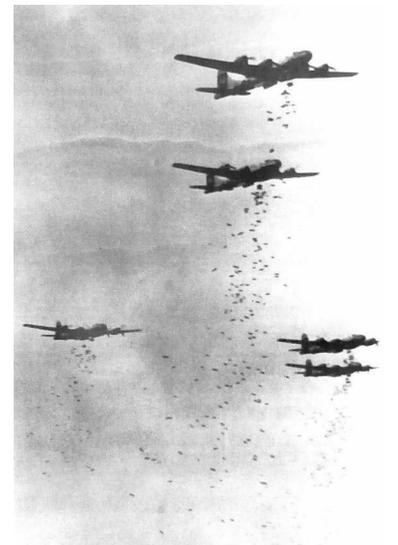
した。日本への爆撃は最初はヨーロッパ経由で中国の成都基地へ運ばれ、そこから北九州方面を襲っていましたが、やがて南太平洋の基地から出撃するようになります。距離的には日本全土が航続距離内に収まります。

初期には人道的配慮から軍事目標に限定した爆撃を行っていますが、やり方が生ぬるいと司令官が更迭され、ヨーロッパ戦線で実績があったルメイ少将になってからは「日本の継戦能力を根本から断つ」として焼夷弾を使用して、レーダーが装備されていない日本軍の戦闘機が(暗くて見えないために)迎撃できない夜間に 3,000m 程の低空で絨毯爆撃を行うようになります。非戦闘員を殺戮するのは、戦時国際法に違反するのですが、彼はそのような批判を跳ね返し、自分の信ずる道を行います。

日本の敗戦までに投下された爆弾・焼夷弾は 179,000 トンに及び、東京都の統計だけでも空襲 93 回、死者 116,959 人、負傷者 109,567 人、焼失家屋 770,090 戸(全戸数の半数：全国の焼失面積の 25%)です。最も被害が酷かったのは、

1945/3/1 の東京大空襲で死者の大部分がこの時のものです。焼夷弾攻撃の際には先遣隊が目標地域の周囲に火災の壁を作って中の人たちの交通を奪って逃げ出せないようにしてから、本隊が通り過ぎながら内側の市街地を火の海にする徹底したものでした。力の差をまざまざと見せつけられた戦争でした。

俗説では京都が爆撃を受けていないことになっていますが、実際は 20 回空襲を受け、死者 302 人、負傷者 561 人を出しています。原爆投下目標都市は広島、京都、小倉、新潟となっており、これらの都市への大規模空襲が禁止されていました。そして陸軍長官が京都を破壊しては戦後処理に差し支えるとして反対し、京都を除き、代わりに長崎を加えた経緯があります。



(Wikipedia/日本本土空襲)

7・10 悲惨な沖縄戦

遂にアメリカ軍は日本本土攻略のための航空基地・補給基地の確保のために沖縄を攻略します。

日本側は軍民一丸となつての玉砕を避けるために、1945 年に入って島内に残っている老幼婦女子を半強制的に北部山岳地帯に疎開させます。それでも中南部には数十万人の住民が踏み止まっていました。

沖縄戦は 1945/3/26 に艦砲射撃で始まり、6/23 に組織的な戦闘が終了しています。守る日本軍は 11 万人、攻めるアメリカ軍は 548,000 人です。

アメリカ側で使用された銃弾 2,716,691 発、砲弾 68,000 発、手榴弾 392,304 発、ロケット弾 20,395 発、機関銃弾 3,000 万発。日本側の死者・行方不明者 188,136 人、内県 122,228 人、内民間人 94,000 人と言います。アメリカ側の死者・行方不明者は 12,520 人、負傷者 72,000 人でした。

圧倒的な戦力差があつたにも拘わらず、日本軍はアメリカ軍から「歩兵戦闘の極み」と高い評価を受ける善戦をしています。それはまずアメリカ軍を大部隊の展開が困難で地形が複雑な日本軍陣地前方に誘導します。そして小銃・機関銃で掃射して戦車部隊と歩兵部隊を分離させます。戦車部隊は速射砲、地雷、破甲爆雷により破壊し、駆けつけてきた敵の応援部隊を重砲隊の支援砲撃により叩くのが基本戦術でした。これらは非常に有効に活動したといえます。沖縄県民も軍に協力して、よく戦いました。「補遺」に「太田実司令官の電文」を載せますから、その生々しい実態を感じ取ってください。

戦艦大和の特攻出撃：史上最大の戦艦大和は大艦巨砲主義のシンボルです。1937 年に起工し、開戦直後に就役した大和は日本海軍連合艦隊の旗艦です。排水量 65,000 トン、46 cm 3 連装砲塔 3 基、最大速度 27.4 ノット、巡航速度 16 ノットで 13,334 km の



(Wikipedia/大和(戦艦))

航続距離を有しました。実戦には 1944/6/15 のマリアナ沖海戦、10/22~25 のレイテ沖海戦に参加していますが、さしたる戦果はありません。

だが、世は既に航空主兵の時代、戦艦としては世界トップの戦闘能力を持ちながら、活動の場が殆どないままに最後を迎えようとしています。1945/4/4、特攻指令を伝えに来た連合艦隊参謀長 草鹿中將に対し、第二艦隊司令官 伊藤中將は納得せず、無駄死にはないかと反論します。同じ疑問をもつ草鹿中將が黙り込んでしまうと、たまりかねた三上中佐が口を開き「要するに一億総特攻の魁(さきがけ)になっていただきたい、これが本作戰の眼目であります」と述べ、伊藤中將も遂に頷いたといわれます。不条理の特攻作戦でした。

4/7 12:32、鹿児島県坊の岬沖でアメリカ軍に発見され、14:17 まで 386 機の攻撃を受け、14:27 に横転・大爆発して乗員約 3,000 人と共に沈没しました。時代に遅れてやってきた悲運の戦艦でした。

7・11 広島・長崎へ原爆投下

ユダヤ人のホロコースト(民族抹殺)を進めるナチス・ドイツが先に核兵器を保有することを恐れた亡命ユダヤ人物理学者レオ・シラード等が 1939/8 月、同じ亡命ユダヤ人物理学者アインシュタインの署名を借りて、ルーズベルト大統領に原子爆弾の開発を提言したことから、1942/6 月からマッハッタン計画が動き出します。計画には錚々(そうそう)たる物理学者たちが名を連ね、そのリーダーになったのがオープンハイマー博士で、研究センターはロス・アラモス研究所です。この計画は徹底した秘密主義で貫かれ、全体を知るのは上層部に限られていました。

ウラン爆弾とプルトニウム爆弾を並行して製造するため、巨額の予算が計上されます。

ウラン中に 99.275%ある U238 から 0.72%しかない U235 を分離するために最初は電磁分離法が試みられ、結果は生産性が低く装置が油で汚染されて断念し、遠心分離法は効率が低いのでこれまた放棄され、残った熱拡散法でウラン爆弾用の U235 を生産しました。

プルトニウム爆弾は原子炉中で中性子を受けた U238 が Pt239 に変換されることが判り、フェルミの小型原子炉を参考に 5 基の大型原子炉をワシントン州ハートフォードに建設して生産します。

こうして Gadget、Little boy、Fat man の 3 個の原子爆弾が作られました。Little boy はウラン爆弾で、構造が単純なので試験抜きでも間違いなく動作すると太鼓判を押されます。プルトニウム爆弾は 20

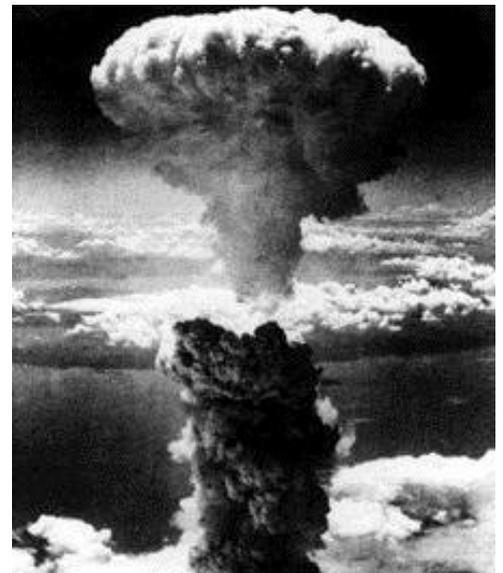
個のプルトニウム片を爆縮させる複雑な構造のため 2 個作って Gadget (Wikipedia/マンハッタン計画)

を試験用として 1945/7/16 ネバダ沙漠で史上初の原子爆弾の実験が成功裡に行われました。この時期、既にナチス・ドイツは連合国側に降伏していました。シラードは危険な敵がいなくなったのだから、この爆弾を日本人に対して使わないでくれと、大統領に嘆願書を出します。

1945/8/6、エノラゲイと名付けられた 1 機の B-29 が広島に Little boy を投下します。瞬時に 6.6 万人が死亡し、6.9 万人が負傷しました。TNT 18k^ト相当の爆発力でした。1951 年までに放射能後遺症で 6 万人以上の人が死亡しました。

1945/8/9、ボックスカーと名付けられた 1 機の B-29 が長崎に Fat man を投下します。雲の切れ目から落としたため、目標から 2km も外れた山間の町に落ちますが、その町ばかりでなく長崎市の半分まで破壊しました。瞬時に 3.9 万人が死亡し、2.5 万人が負傷し、年末までに後遺症で 7 万人が死亡しました。

この惨禍を見て、多くの科学者が自責の念に駆られます。オープンハイマーは、この危険な兵器は国際連合の統制下に置くべきだと主張・活動したために国家安全保障上の危険分子とみなされ、機密情報に一切接触で



長崎の原爆

きなくする処置を執られます。ニールス・ボーアは後半生を熱烈な原爆反対運動に捧げます。科学者がいる限り、科学の進歩は止めどもなく進歩するでしょう。クローン人間、人間の知性を上回るロボット、防御手段がないバイオ兵器、これらは近い将来に実現の可能性が高い技術の一部です。人間はこれらの危険な技術を本当に管理しきれぬのか、非常に重い問い掛けに我々の世代は直面しています。

7・12 ポツダム宣言の受諾と終戦の詔勅

もはやこれまでです。ナチス・ドイツ降伏後の 1945/7/17~8/2 にかけて、ベルリン郊外のポツダムにおいて、アメリカのトルーマン大統領、イギリスのチャーチル首相、ソ連のスターリン書記長が集まって、抗戦を続ける日本への対応と今次大戦後の戦後処理について会談を持ちました。ポツダム宣言は、この会談の期間中にアメリカ、イギリス、中華民国の参加国首脳の日本に対する共同宣言として、7/26 に日本に対して発表されたものです。ソ連は当時は日本に対して中立の立場であったために、この宣言に加わっていません。

7/27 に日本政府はこの宣言全文を論評無しで公表し、新聞各社は「政府は黙殺」と書きます。実態は、日本政府の大勢は受諾に賛同していますが、陸軍が本土決戦・一億玉砕を唱えて譲らず、損害を少しでも緩和できた貴重な時間を国家の首脳陣は遅疑逡巡して空費しています。

だが、8/6 に広島、8/9 に長崎に原爆が投下され、同日、ソ連が 1941 年に締結されていた日ソ中立条約を破棄して満州国へ侵略するに及んで、もはや黙殺という訳には行かなくなりました。ポツダム宣言の中に天皇制の維持が入っていなかったために、軍部強硬派が国体維持について再照会すべきと主張、8/14 に御前会議を開き、鈴木首相が天皇の発言を促し、天皇の発言でポツダム宣言の受諾が決定され、連合国側に伝えられました。

翌 8/15 に、日本政府は宣言の受諾と戦争の終結を天皇の肉声による「玉音(ぎょくおん)放送」として日本国民に発表し、8/16 に軍隊に停戦命令が出されました。補遺に玉音放送の全文を載せます。

宣言受諾の報が入ると、クーデターによって玉音放送を阻止し、「本土決戦内閣」を樹立しようとする青年将校の企てで 15 日未明に一部部隊が皇居の一部や NHK 等を占拠したが、軍首脳部の同意が得られず、失敗に終わった「宮城事件」が発生しています。8/9 の原爆投下後から侵入し始めたソ連は、短期間にできるだけ多くの日本の占領地を制圧して、新しい占領地をソ連の領土として既成事実化しようと攻撃の手を休めず、この国際的違法行為に対抗して宣言受諾後も日本軍は応戦しています。北方四島問題は其の侵略行為の名残なのです。



降伏文書に署名する梅津参謀総長
(Wikipedia/ポツダム宣言)

ポツダム宣言の受諾により、日本は近代国家になってから嘗々獲得した植民地を、全て本来の民族に返還し、**明治維新当時の日本古来の領土に戻らされます。**

悔やまれますのは、この騒ぎの中で、元来は一国であった朝鮮が、北緯 38 度線を境として南の韓国と、北の北朝鮮に分離された状態で朝鮮民族の手に返還されたことです。この状態を作ったのはアメリカとソ連の地政学的な政治決着によりますし、敗戦国日本には何もできなかったのは事実としても、今に至るも南北に分離されたままの朝鮮民族の人たちの苦悩は、日本の植民地となったことに端を発しており、他人事と見過ごす訳には行きません。

アメリカが唯一の原爆保有国であることを広島、長崎で実証して見せたのは、ソ連の日本本土の一部(北海道等)占領を威嚇・阻止するためでもあり、ソ連は日本をアメリカの聖域と見なして日本は分裂国家となること

を免れています。

9/2 に東京湾に進入したアメリカ海軍・戦艦ミズーリ号上で降伏文書への調印式が行われました。

このようにして、**太平洋戦争**（日本側の呼称は“**大東亜戦争**”）は**アメリカに対する日本の完敗**で終わりました。

日本国民がこの敗戦で蒙った精神的ダメージから脱出できるのは、ローマがエトルリアに敗戦し、その後、嘗ての勢力範囲を回復するのに 100 年を要した故事に照らしても同じ程度の時間を要することでしょう。

30 年戦争に負けて約 300 の群小国家に分解されたドイツが、民族国家として再統一を果たすのに 200 年以上を要している故事にも気を配る必要があります。

「**歴史は勝利者によって作られる**」のが常ですから、日本側からこの戦争の正当性を主張することは難しいのですが、それまでの「白人にあらずんば人にあらず」「人種的に優秀な白人は世界を支配する天命が与えられているのだ」との思い上がった白人種優越論に基づく世界秩序に日本一国で挑戦し、戦争には負けたが、結果としてそれまでの「白人至上主義」に終止符を打った実績は、何れ後世に評価される時期が来ると思います。

戦後、中国は欧米を駆逐した日本が敗戦で撤退した真空状態を利用して半植民地状態から脱出して大国への道を歩み始めました。アジアにおける欧米の植民地も、日本によって作られた同様な真空状態を活かして次々と独立しています。更にそれは民族意識に火を点け、アフリカ諸国の独立へと波及して行きました。

やがてそのうねりは白人に抑圧されてきたアメリカの黒人の公民権運動へと繋がって行きました。

現在では当然に受け止められているこれ等の国際秩序は、日本が白人の支配権に挑戦し、東南アジア諸国を白人の手から解放したこの戦争が全ての原点になって、過去数十年の間に起こっています。

これ以降は現代史の日本の敗戦後篇として、次の「**人類と社会・・・現代(2)**」に譲ります。

第 7 章で参考にした文献：

「世界の歴史 15／ファシズムと第二次大戦後の世界」瀬村興雄／中公文庫

「図解でわかる／11 大近代戦」山崎雅弘／PHP 研究所

Wikipedia：第二次世界大戦／太平洋戦争／真珠湾攻撃／マレー沖海戦／ミッドウエー島／ミッドウエー海戦／ガダルカナル島の戦い／インパール作戦／B-29(航空機)／日本本土空襲／沖縄戦／太田実司令官の電文／大和(戦艦)／マンハッタン計画／ポツダム宣言／日本の降伏 等

8. 東南アジア諸国の独立

敗戦国日本は、アジアでの植民地競争で手に入れた全ての植民地を、本来の民族に返還させられました。民族自決の近代思想によれば、植民地はその存在自体が近代的ではありません。その意味では、日本が植民地とした朝鮮、台湾、満州を解放して本来の民族の手に戻すことは当然の成り行きです。

それなら、東南アジアの欧米植民地も、同様に本来の民族の手に返還すべきではありませんか。そう考えたのはアメリカであり、ほぼ、そう考えたのはイギリスでした。

だが、フランスやオランダは、一時的に日本軍に占領されていた旧植民地に、再び宗主国として乗り込むのが当然だと考えます。西欧から世界中に伝搬して行った人権思想、民族主義はこれら旧植民地にも行き渡っており、そこに一時的に日本軍に追い払われた旧宗主国が戦争が終わったからとて主人面して舞い戻ってくるなど、とんでもない時代錯誤でした。

以下に、時期的には第二次世界大戦の戦後になりますが、旧宗主国はどのように振る舞い、旧植民地はどうか対応したかを簡単に説明します。独立のために民族解放運動が必要だった国々にとっては、それは戦争の続きであり、それらの決着が着いて、始めてそれらの国々での第二次世界大戦が終わるのです。

8・1 アメリカとフィリピン

国王フィリップの名をつけたフィリピンは、スペインの植民地でしたが、1899年からはアメリカ領になっています。1934年には自治が認められて自治領となっています。1942年にアメリカの将軍マッカーサーが日本軍の攻撃を避けるためにコレヒドール要塞からオーストラリアに逃げ出します。マッカーサー将軍は1945/2月に再びフィリピンに帰って来ますが、民族の意識は既に「アメリカ人による天国のような統治よりも、フィリピン人自身による地獄の政治の方がましだ」に変わっていました。

アメリカは1936年に10年後の独立供与を約束していましたが、この際、その約束を実行しました。そしてキューバ糖業者のロビー活動に応じて、これまでは内国扱いであったフィリピン糖に関税を掛けて、輸入を減らそうとしています。

実のところ、フィリピンは太平洋国家であろうとしたアメリカにとって、**軍事的には極めて重要な存在**でしたが、**経済的には相当なお荷物**であったというのが円滑なる独立供与の真相でした。

8・2 オランダとインドネシア

ジャワ、スマトラ、ボルネオ、セレベスの四つの大きな島と、数千の小島からなるこの島嶼国家は、地域豪族支配の時代の17世紀に武力によるオランダ東インド会社の覇権が確立し、1799年からオランダ政府の統治下に入ります。ニッケル、錫、金、銀、銅、鉛、ボーキサイト(アルミニウム鉱石)、石油等の豊かな地下資源、ゴム、ココナッツ、キニーネ(マラリア特効薬)、紅茶、コーヒーを始めとする天然資源の宝庫であるこれら諸島からオランダのGDPの16%が得られており、オランダはこの植民地から過酷な搾取を行い、これに抵抗して戦前から各種の独立運動が何回も発生しています。

1942年に第二次世界大戦で日本軍がこの地に進駐してオランダ人を追い払い、現地住民を武装化して軍事訓練を施します。日本は敗戦後、オランダの再支配を防ぐため武器を現地人に引き渡し、インドネシアの民族主義者たちは独立宣言をします。オランダはそれを認めず、日本の敗戦後、この地に舞い戻って再植民地化に乗り出しますが、現地人の独立の意思は堅く、軍籍を離脱した日本人約2,000人も加わった独立戦争が繰り広げられ、遂にオランダも4年間の侵攻作戦の結果、再植民地化を断念し、1949年に統一国家インドネシアとして国際的にも独立が承認されました。

オランダはこのことで日本を恨んでおり、反日感情が強い国の一つです。1971年の昭和天皇オランダ訪問の際に卵が投げつけられたり、お手植えの記念植樹を引き抜かれたりしました。1986年にはベアトリクス女王

の訪日計画が国内世論の反発により中止され、昭和天皇の国葬の1991年の来日の際には宮中晩餐会で「(日本のオランダ人捕虜虐待問題は) お国ではあまり知られていない歴史の一章です」とのスピーチをされています。日本はインドネシアの人々からは親しまれていますが、オランダからは強く嫌われています。

8・3 フランスとインドシナ

第二次世界大戦前、仏領インドシナはコーチシナ直轄州、トンキン、アンナン、ラオスの4保護国から成っていました。ここに住むベトナム人等は古くは中国文明とインド文明の影響を強く受け、新しくはフランス文化の洗礼を受けて文化程度が非常に高く、勤勉で政治的にも成熟していました。

1942年に日本軍が進駐してくると、ベトナムの民族主義者は中国領でベトミン(越盟:ベトナム独立同盟の略称)を結成し、老練な指導者ホー・チミンの周囲に集まり、激しく抗日運動を展開します。日本が敗退後、1945/9/2、ホー・チミンを大統領としてベトナム社会主義共和国が独立宣言を行います。

そこへフランスが再植民地化を目指して侵攻してきました。しかし、世界の世論はフランスの行為に否定的で、「汚れた戦争」「腐敗した戦争」との悪罵が浴びせられます。それでもフランスは執念深く1954年までの9年間、ベトナム奪還を試み、死者2.5万人、負傷者4.3万人、行方不明者2万人と膨大な戦費を失ない、国家としての威信も大きく傷つき、何ら得るところなくインドシナ全部を手放してしまいました。もはや植民地の時代は去ったのです。

現在、この地域は右の国旗に示すように、「ベトナム社会主義共和国」(国旗は既出)、「ラオス人民民主共和国」(Wikipedia/ラオス)、「カンボジア王国」(Wikipedia/カンボジア)の三つの国家になっています。



ラオス人民民主共和国
(Wikipedia/ラオス)



カンボジア王国
(Wikipedia/カンボジア)

8・4 イギリスの植民地店終い

イギリスは第二次世界大戦には勝ったものの、資源を使い尽くして経済は根底から痛んでおり、徐々に海外の問題から手を退き、自国の復興に専念する以外の選択肢がなくなっていました。

このような状態を「ピュルスの勝利」と呼びます。(ギリシア北方のエピルスの王ピュルスはアレクサンドロス大王の母方の又従兄弟に当たり、大王や後のハンニバルと並び称される古代の名将です。彼をギリシアから招いて、前280年、ターラント国は他の南イタリアのギリシア人都市と共にローマに対抗しようとします。ピュルスは大損害を受けながらもローマ軍を破りますが、軍事的勝利のみに終わり、ターラントは結局はローマの優勢を覆すことができず、ローマに従属することになります。勝っても自分自身も消耗しきって何ら得る所がない勝利をピュルスの勝利といいます)

要するに、西欧列強は互いの国力を傷つけ合うような2度の世界大戦を絶対にやるべきではなかったのです。大戦の結果、イギリス、フランス、ドイツといった近世を思うがままに牛耳って来たこれらの西欧列強は尾羽打ち枯らして、世界の覇権国家の地位から去りました。根本原因は執念深いドイツの復讐心にあったと思われる。ドイツにもっと大きな歴史観・世界観を持ったリーダーが現れておれば、西欧覇権の有効期間をより長くして、このような事態に陥らなかったでしょう。

しかし、それであれば、アジア諸国の植民地化はまだ継続していたことでしょう。

1942年の春に、ルーズベルト大統領がインドに自治を許すよう勧めた時に、激怒して「私は大英帝国の清算人にはならない」と言って力による政治を続けたチャーチル首相でしたが、イギリス国民は「もはやそのような古典的な世界戦略は通用しない」と悟り、1945/7月の総選挙で二度に亘る世界大戦の勝利の功労者であるチャーチルを失脚させます。チャーチルが総選挙での敗北を知ったのは、ポツダム宣言のための会談中で

あり、折しも会談に同席していた総選挙で勝利した労働党党首アトリーに後を任せて、帰国しています。

ビルマの独立：列強の植民地化時代にもビルマは巧妙に立ち回り、自国の一部の割譲で本体の独立を守った東南アジアで唯一、植民地化を免れた国家です。アウン・サンなどビルマ民族の党「タキン(主人)」の戦士たちは、1940年に日本と秘密協定を結んで、1942年にイギリスをビルマ全土から追放しました。次いで1944年に日本軍がインパール作戦で大兵力を喪失した時期を見計らって、ビルマの日本軍を追い出してしまいます。戦後、彼等は当然にイギリスがビルマの独立を認めるものと思っていたら、時代錯誤の提督がビルマに派遣されてきて、昔通りの強圧的な統治を行おうとしました。これには温和しい僧侶階級までが怒り出し、ビルマ国民はゲリラ戦で対抗し、その強さはイギリスの予想を遙かに上回るものでした。イギリスは少数民族の力を借りて戦おうとしますが、そのカレン族からも協力を拒まれ、遂に1948/1月にビルマの独立を承認せざるを得ませんでした。

初代首相は信仰心厚いタキン・ヌーです。現在、ビルマは国名を**ミャンマー**と変えています。日本は軍事政権の独裁に制裁をもって臨む米国などの動きにも同調せず、ODA(Official Development Assistance：国際経済協力)等でミャンマーを支援し続けており、ミャンマーは親日的な国家です。現在、同国の民主化の象徴となっているアウン・サン・スーチー女史は建国の闘士アウン・サン将軍の子女です。

インドとパキスタンの独立：「全インド国民会議」はイギリスがインドを立憲君主制に馴らして、インドを長く大英帝国の枠内に留めようと1885年に組織したのですが、イギリスの思惑から外れ、民族独立への大勢力となっています。創立以来60数年の反英闘争の経験を持ち、党员数百万人を擁する全インド会議派は、これまでも3回の大規模な反英運動を起こしており、インド独立のためになら、何時でも第4回目の反英不服従・非協力運動を開始する用意がありました。

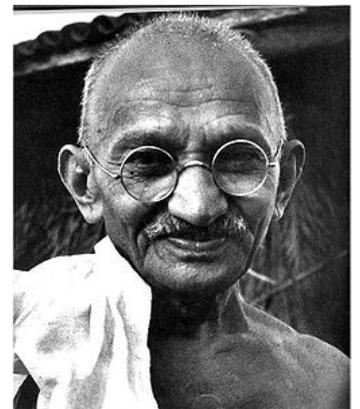
南アフリカで弁護士をしていたガンジーは帰国した1919年に全インド国民会議派の指導的地位についています。彼は「サティアグラハ運動」を提唱・推進します。これは自己犠牲と精神的博愛によって暴力を振るってくる相手や支配者をためらわせ、改心させ、屈服させようとするものです。反英政治活動の場面では、平和的な罷業、納税拒否、商品ボイコット等により政府の活動を挫く、そうすれば政府にいろんな譲歩を強要できるというものでした。武器を持たないインドの民族主義者はこれによって精神上の武器を得、イギリスの恐怖から解放され、自負心を取り戻しました。また、暴力を排除するヒンズー教の精神にも合致しているので、一般大衆にも理解し易かったのです。

1945/7月、内閣を組織したイギリスのアトリー首相は、選挙公約に基づいて直ちにインドに独立を与えることを公表します。アトリー内閣から派遣されたクリップス使節団は1946/5月からインド代表ガンジー、ネールら全インド国民会議派と、回教徒連盟の代表の三者会談となります。

当時は3億人であったインド人の1/3は回教徒なのです。回教徒とヒンズー教徒は食べ物、衣服、冠婚葬祭など基本的な生活様式が正反対と言って良いほど異なっています。インド回教徒は少数民族としての悩みがあり、イギリスの分割統治政策で発足した回教徒連盟が成長しています。

インドが独立する際に是非とも回教徒の国家パキスタンを樹立させねばならないと決意した回教徒連盟は、1946/8/16を「行動の日」としました。

当日が来ると、回教徒が多いカルカッタ市では「大殺戮」が行われ、インド人同士が放火し殺し合いました。死者5千人、負傷者1.5万人、難民は15万人に及びました。



マハトマ・ガンジー
(Wikipedia/マハトマ・ガンジー)



パキスタン国旗
(Wikipedia/パキスタン)

事件はベンゴール、ビハール、ボンベール、連合の各州へと拡がりました。

イギリス政府はもはやインドの事態を自分たちの力で鎮めることができないのを認めざるを得なくなりました。結局、右図のように、英領インドは 1947/8/15、「インド連邦」と「パキスタン」（図の緑色部分：現在の国名は「パキスタン・イスラム共和国」）の二つに分割されて、それぞれ独立することになりました。

今日もインドとパキスタンが犬猿の仲であるのは、この建国の事情によるものです。現在でも、国家間で原爆戦争が起こりそうな地域として擬せられています。イギリスがインドに主権を渡して引き揚げたことは、東南アジアにおける民族主義者の徹底的な勝利を意味し、更にこの後、中東におけるイギリスの地位が揺らぐ事態へと発展して行きます。



インドとパキスタンの位置関係（Wikipedia）

8・5 その他の植民地

香港： イギリスは清国との間で第一次阿片戦争をやり、1842年に南京条約で香港島の永久割譲を得ます。第二次阿片戦争では北京条約を結び、1860年に九竜半島南部の割譲を追加します。1898年には更に地域を拡げて 99 年間の租借地を得ます。第二次世界大戦で日本軍に占領されますが、終戦後に中国が中華民国軍と中国共産党軍に分かれて戦っていたため、平和裡にイギリスは香港の再植民地化に成功しています。1950年には中華人民共和国を承認して中華民国と断交し、植民地としての地位を安定化します。

1984年には租借地と割譲地の主権移譲を記した「中英共同声明」を合意、1997年に租借地と割譲地の主権を中華人民共和国に移譲及び譲渡してイギリスの植民地であることを終えました。急変を避けるために 50 年間は一国二制度(香港は資本主義、中国本土は共産主義)を行うという中国の意思により、現在は香港特別行政区として香港市民の選挙により選ばれた長官が行政を行っています。

マカオ： 1557年にポルトガルが明国から居留権を取得、1887年にポルトガルが統治権を取得して正式に同国の植民地としています。第二次世界大戦ではポルトガルは中立国であったために日本軍の占領を免れ、戦火を逃れる中国の難民の避難所になりました。1979年にポルトガル政府は中華人民共和国政府と国交を樹立し、マカオの即時返還を望みますが、同じ植民地状態にある香港市民の動揺を恐れた中華人民共和国は当分の間、ポルトガルによる統治を希望し、香港と歩調を合わせて 1999/4/13 にポルトガルから中華人民共和国への行政権の返還が行われています。現在はマカオ特別行政区となっています。

第 8 章で参考にした文献：

「世界の歴史 16/現代——人類の岐路」松本重治/中公文庫

Wikipedia: ウィンストン・チャーチル/ベトナム/ラオス/カンボジア/マハトマ・ガンジー/パキスタン/香港/マカオ 等

終わりに

このテキストは、長大になり過ぎるので、一応、第二次世界大戦が終了したこの時点で切り上げ、続きは「人類と社会・・・現代(2)」に譲ります。内容の大部分が戦争の話なので、嫌悪を感じたのではありませんか。

「**人類の歴史は戦争の歴史だ!**」と揶揄されるのも尤もだと思われます。しかし、これが現実の世界、現実の歴史なのです。嫌なことでも直視せねば、それへの対策も立てられません。

偶々、この 60 数年間は日本は戦争に巻き込まれる事がなかったために、あなた方には戦争は別世界の出来事としか映らないでしょう。

幸いと言うべきか、原爆の出現は戦争が人類絶滅に導くため、大国間での戦争は互いの自制により、以前より起こりにくくなっています。しかし、人口が増え、交通機関が発達して世界は狭くなり、そこに民族主義や非寛容な宗教を振り回す愛国者と自称する人たちがいるのですから、小競り合いやテロがなくなるのは無理もありません。

人類が集団自殺をしないように、人類が進歩のより高みに登れるように、人類がその叡智をフルに活用させることを祈りましょう。

以上

補遺：

1. 金融危機を食い止めた模範例

1825年にも危うく金融危機になる場面があったが、見事に食い止めた模範例がある。当時のイギリスの中央銀行であるイングランド銀行のハーマン理事は次のように述べている。

「……我々はこれまで採用したことのない手法も含めて、ありとあらゆる手段で貸し出しをした。我々は株式を担保に取り、我々は国債を買い入れ、国債に対して前貸しをした。我々は為替手形を即座に割り引いただけでなく、その預金に対して巨額の前貸しをした。要するに BOE (Bank of England) の健全性が保証される限り、あらゆる手段で金融機関を救済した。場合によっては多少のことには目をつぶって、やかましいことは言わなかった。一般大衆の陥っている危機的な状況を見て、我々の力の及ぶ限りの資金供給を行ったのである」 (「ロンバート街」ウォルター・バジヨット 1873 刊／久保恵美子訳：日経 BP 社)

18 世紀以来の度重なる金融危機対応の失敗の後で、始めてイングランド銀行によって金融危機を収束させる処方箋が確立した瞬間といってよい。実際、この危機は政策実施後数日で収束したとされている。

経済学者であるフリードマンとシュワルツは、1929 年の大恐慌の際に、何故この処方箋が使われなかったのかと、当時の米国の FRB (連邦準備局) の政策スタンスを批判した。

(「繰り返される経済危機」北村行伸／日本経済新聞 2009/7/13)

2008 年のリーマンショックに端を発する「100 年に一度」と言われた今回の金融危機が世界大恐慌にまで到らなかったのは、フリードマンの忠実な弟子である FRB のバーナンキ議長ら現在の中央銀行関係者がこの処方箋に従って政策を展開したからだと評価されています。

2. 行政官の鑑・後藤新平

後藤新平の経済政策を振り返ると、二つの大きな特色があった。第一に彼は人々のインセンティブ (動機付け) を徹底して重視した現実主義者であった。第二は複数の政策目標を同時に達成する試みが多く見られたことだ。……台湾や満州で後藤は植民地を「支配」ではなく、「経済振興と自立」を目指していた。住民に利益をもたらすことで初めて、安定した植民地運営が可能になると考えた。結果的に、後藤が育成した台湾の砂糖産業は本国の経済を助けるまでに発展した。満州で街路の名前を日本名にすることを禁じたことにも、人々のインセンティブを重視した現実主義者の姿が見える。……第二の特色が、多くの政策において複数の目標を達成しようとしていたことだ。一例が先に述べた阿片 (アヘン) 漸禁政策だ。台湾社会に蔓延っていたアヘンを撲滅すべく、軍は強硬な禁止策を主張した。しかし後藤はアヘンを一気に禁止せず、専売制とした上で高率の税を課した。その資金で、下水道など衛生状態を改善する政策を行った。後藤のこの姿勢は、より大きな構想の下に発揮される。後藤新平を語る時、必ず登場する概念として「文装的武備」なるものがある。これは、満州の鉄道ネットワーク整備と産業振興を通し移民を進めることが、単なる軍備増強以上に軍事的効果をもたらすというものだ。つまり互いの経済的コミットメントを高めることで、日本の満州経営に抵抗し難い現実を作ることを、後藤は目指していた。

複数の目標達成に向け政策を組み合わせる「ポリシーミックス」を実施した背景に、後藤が経済社会を有機体・生命体として捉えていたことがある。外国の制度をそのまま移植することや、上からの指令だけで社会が統治されることはあり得ないと考えていた。生命体の臓器が互いに影響しあうように、複数の目標を同時に達成するようなメカニズムを心に描いたのである。……

1923/9/1、関東大震災が東京を襲い、9 月末に後藤を総裁とする復興院が発足した。この時、後藤は 40 億円超えの復興プランを発表した。当時の経済規模などから考えて、今の約 200 兆円に相当する金額だ。

後藤は東京市長時代の 1921 年に東京改造計画を作成しており、これを震災を機にパリに匹敵するような荘厳な都市の建設をぶち上げ、大風呂敷との批判を受けた。最終的に金額は約 10 分の 1 の 4 億円台に削減される。それでも東京中心部を走る「昭和通り」など今日の東京の骨格は、後藤のプランによって実現したの

である。……大震災からの復興における後藤新平の功績を辿る時、改めて感じるのは、復興院総裁に就任する前から、後藤には東京をどうすべきかという確固たるビジョンがあったということだ。東京市長としての東京改造計画があったからこそ、サントコスト(埋没費用、除去損)がゼロ(大震災で既に除去されている)の状況で手腕を発揮することができた。今回の(東日本大震災)震災復興における大きな懸念は、政府の中枢で復興を担う人たちの中に、果たしてこのように以前から綿密な改造プランを持って大風呂敷を展開できる人材がいるのか、という点であろう。……

北岡伸一東京大学教授は、嘗て筆者に次の様に述べたことがある。「後藤が残したものは確かに偉大だ。しかし、彼が成しえなかった点にこそ、我々への最大の教訓がある」(改革を進める際に、何が抵抗勢力となり、それを阻むかを予め知って、それらに対して対策を持たなければならない!) 後藤は当初、40億円規模の関東大震災からの復興計画を作成した。とりわけ主要道路の確保を重視した点は特筆される。しかし、プランの前に多くの壁が立ちはだかった。

第一は各官庁の壁だ。当初、後藤は「復興省」なる特設機関を設け、全ての執行・事務を集中させることを考えた。自治体の権限もこの機関に移す計画だったが、各省は猛烈に反発。結局、復興省ではなく、事務は各省に残すことを前提に、「復興院」が設立された。復興院の任務が、狭義の復興に止まったことが、規模縮小の一因となった。

第二は財政の壁だ。財政面では井上準之助蔵相との協議が行われた。井上は復興のための国債利子支払いが通常の歳入の剰余金以下に収まるよう、計画の縮小を求めた。

第三は既得権益者の壁だ。当時、後藤が中心になり、首相に復興策を建議する「復興審議会」が設置された。閣僚、閣僚経験者、学識者で構成するこの会で、後藤とは親しい間柄だった枢密顧問官の論客、伊東巳代治が激しく後藤を批判する立場に回った。伊東は銀座の大地主であり、私権を制限してまで大規模な帝都復興を行おうとする後藤案に反対したと伝えられている。当面の利益に固執する既得権益者の反対は強固なものだった。

第四は政治の壁である。臨時議会に提出される段階で、後藤の復興予算案は5.7億円にまで削減されていた。しかし、議会では更なる圧力がかかる。当時の山本権兵衛内閣は、議会にも政党にも十分な勢力を持たなかった。衆議院で多数を有する政友党は政府にダメージを与えるべく、更に1億円強の削減を迫った。その中には、後藤を追い込むため復興院事務費の全額削減も含まれていた。

後藤の夢を阻んだ省庁、財政、既得権益、政治という障壁の存在は、今日の改革を阻むプロセスそのままである。しかし、それにも増して重要な点があった。政治家で後藤の娘婿の鶴見祐輔によると、山本内閣が倒れ、後藤が閣外に去る時、自らの失敗の原因として13の点を羅列している。その中で後藤は「市民、国民及び有識者に帝都復興に関する理解が不十分であった」と指摘した。この指摘は今日の日本への重い警告である。一国の政策の是非は所詮その国民の賢さに依存するものである。

(「やさしい経済学——国難に向き合った日本人・後藤新平／竹中平蔵：日本経済新聞 2011/7/12~14」)

3. 沖縄戦の実情を伝える証言

昭和 20(1945)年 6 月 6 日夜、沖縄の海軍陸戦隊司令官大田実少将は、海軍次官あてに次のように打電しました。

発 沖縄根拠地隊司令官／宛 海軍次官 (文中の□□は、不明部分です)

左ノ電□□次官ニ御通報方取計ヲ得度 沖縄県民ノ実情ニ関シテハ県知事ヨリ報告セラルベキモ県ニハ既ニ通信力ナク三二軍司令部又通信ノ余力ナシト認メラルルニ付本職県知事ノ依頼ヲ受ケタルニ非ザレドモ現状ヲ看過スルニ忍ビズ之ニ代ツテ緊急御通知申上グ

沖縄島ニ敵攻略ヲ開始以来陸海軍方面防衛戦闘ニ専念シ県民ニ関シテハ殆ド顧ミルニ暇ナカリキ

然レドモ本職ノ知レル範圍ニ於テハ県民ハ青壮年ノ全部ヲ防衛召集ニ捧ゲ残ル老幼婦女子ノミガ相次グ砲爆

撃ニ家屋ト家財ノ全部ヲ焼却セラレ僅ニ身ヲ以テ軍ノ作戰ニ差支ナキ場所ノ小防空壕ニ避難尚砲爆撃ノ□□ニ中風雨ニ曝サレツツ乏シキ生活ニ甘ンジアリタリ
而モ若キ婦人ハ率先軍ニ身ヲ捧ゲ看護婦烹炊婦ハ元ヨリ砲弾運ビ挺身斬込隊スラ申出ルモノアリ
所詮敵来リナバ老人子供ハ殺サルベク婦女子ハ後方ニ運ビ去ラレテ毒牙ニ供セラルベシトテ親子生別レ娘ヲ軍衛門ニ捨ツル親アリ
看護婦ニ至リテハ軍移動ニ際シ衛生兵既ニ出發シ身寄無キ重傷者ヲ助ケテ□□真面目ニシテ一時ノ感情ニ駆ラレタルモノトハ思ハレズ
更ニ軍ニ於テ作戰ノ大轉換アルヤ夜ノ中ニ遙ニ遠隔地方ノ住居地区ヲ指定セラレ輸送力皆無ノ者黙々トシテ雨中ヲ移動スルアリ
是ヲ要スルニ陸海軍□□沖縄ニ進駐以來終始一貫勤勞奉仕物資節約ヲ強要セラレツツ（一部ハ兎角ノ悪評ナキニシモアラザルモ）只管日本人トシテノ御奉公ノ護ヲ胸ニ抱キツツ遂ニ□□□□与ヘ□コトナクシテ本戦闘ノ末期ト沖縄島ハ実情形□一木一草焦土ト化セン
糧食六月一杯ヲ支フルノミナリト謂フ　　沖縄県民斯克戦ヘリ
県民ニ対シ後世特別ノ御高配ヲ賜ランコトヲ

4. 終戦の詔勅

朕深ク世界ノ大勢ト帝国ノ現状トニ鑑ミ非常ノ措置ヲ以テ時局ヲ收拾セムト欲シ茲(ここ)ニ忠良ナル爾(なんじ)臣民ニ告ク
朕ハ帝国政府ヲシテ米英支蘇四国ニ対シ其ノ共同宣言ヲ受諾スル旨通告セシメタリ
抑々(そもそも)帝国臣民ノ康寧ヲ図リ万邦共榮ノ樂ヲ偕(とも)ニスルハ皇祖皇宗ノ遺範ニシテ朕ノ拳々(けんけん)措カサル所
曩(さき)ニ米英二国ニ宣戦セル所以(ゆえん)モ亦(また)実ニ帝国ノ自存ト東亜ノ安定トヲ庶幾(しょき)スルニ出テ他国ノ主權ヲ排シ領土ヲ侵スカ如キハ固(もと)ヨリ朕カ志ニアラス
然(しか)ルニ交戦 已(すで)ニ四歳ヲ閱(けみ)シ 朕カ陸海將兵ノ勇戦 朕カ百僚有司ノ励精 朕カ一億衆庶ノ奉公各々最善ヲ尽セルニ拘ラス戦局必スシモ好転セス 世界ノ大勢亦我ニ利アラス
加之(しかのみならず) 敵ハ新ニ殘虐ナル爆弾ヲ使用シテ頻ニ無辜(むこ)ヲ殺傷シ 慘害ノ及フ所真ニ測ルヘカラサルニ至ル
而モ尚交戦ヲ繼續セムカ 終ニ我カ民族ノ滅亡ヲ招来スルノミナラス 延(ひい)テ人類ノ文明ヲモ破却スヘシ斯(かく)ノ如クハ朕何ヲ以テカ億兆ノ赤子(せきし)ヲ保シ 皇祖皇宗ノ神靈ニ謝セムヤ
是レ朕カ帝国政府ヲシテ共同宣言ニ応セシムルニ至レル所以ナリ
朕ハ帝国ト共ニ終始東亜ノ解放ニ協力セル諸盟邦ニ対シ遺憾ノ意ヲ表セサルヲ得ス
帝国臣民ニシテ戦陣ニ死シ職域ニ殉シ非命ニ斃(たお)レタル者及其ノ遺族ニ想ヲ致セハ五内(ごだい)為ニ裂ク且(かつ)戦傷ヲ負ヒ災禍ヲ蒙リ家業ヲ失ヒタル者ノ厚生ニ至リテハ朕ノ深ク軫念(しんねん)スル所ナリ
惟フニ今後帝国ノ受クヘキ苦難ハ固ヨリ尋常ニアラス
爾臣民ノ衷情(ちゅうじょう)モ朕善ク之ヲ知ル
然レトモ朕ハ時運ノ趨(おもむ)ク所堪ヘ難キヲ堪ヘ忍ヒ難キヲ忍ヒ以テ万世ノ為ニ太平ヲ開カムト欲ス
朕ハ茲ニ国体ヲ護持シ得テ忠良ナル爾臣民ノ赤誠ニ信倚(しんい)シ常ニ爾臣民ト共ニ在リ
若(も)シ夫(そ)レ情ノ激スル所濫(みだり)ニ事端ヲ滋(しげ)クシ或ハ同胞排擠(はいせい)互ニ時局ヲ乱リ為ニ大道ヲ誤リ信義ヲ世界ニ失フカ如キハ朕最モ之ヲ戒ム
宜シク挙国一家子孫相伝ヘ確ク神州ノ不滅ヲ信シ任重クシテ道遠キヲ念ヒ総力ヲ将来ノ建設ニ傾ケ道義ヲ篤(あつ)クシ志操ヲ鞏(かた)クシ誓テ国体ノ精華ヲ發揚シ世界ノ進運ニ後レサラムコトヲ期スヘシ
爾臣民其レ克(よ)ク朕カ意ヲ体セヨ
御名御璽 / 昭和二十年八月十四日 / 各国務大臣副署

5. 戦争犠牲者数

それぞれの戦争における犠牲者(死者)数を3種の表によって示します。

表1. 靖国神社に祀られた英霊数

時 期	合祀柱数
明治維新前後	7,751
西南戦役	6,971
日清戦役	13,619
台湾・北清事変	2,386
日露戦役	88,429
済南事変	5,035
満州事変	17,174
支那事変	191,206
太平洋戦争	2,133,684
合 計	2,466,255

表2. 第二次世界大戦での国別犠牲者数

国 名	軍 人		民間人 死者数
	死者数	行方不明者数	
アメリカ	407,828	—	—
イギリス	353,652	60,595	90,844
フランス	166,195	174,620	—
ポーランド	(6,000,000)		—
ソ連	(20,000,000)		—
中国	(10,000,000)		—
ドイツ	2,100,000	2,900,000	500,000
イタリア	389,000	214,647	179,803
日本	2,300,000	—	800,000

左上にある「表1.靖国神社に祀られた英霊数」は日本国のために戦争で亡くなった人たちの数です。ここには東條英機等A級戦犯で死刑になった人(太平洋戦争の敗戦の最大の責任者)たちも1978年に合祀され、以来、天皇が一度も参拝していないとか、時の政権の政治家が参拝すると中国が非難して国交関係が悪くなる等の問題の種を孕んでいます。明治の西南の役で反乱軍に回った西郷吉之助らも合祀されていません。

1964年3月の厚生省調査によると、太平洋戦争の戦闘員の戦死者は、陸軍165万人、海軍47万人、広義の餓死者は全体の約70%、輸送船が撃沈されて空しく死んだ軍人は海軍、陸軍とも約18万人です。

この数字からは日露戦争から近代戦のリアリズムを学ばなかった日本軍の悲劇が見えてきます。戦争とは戦場だけで行われるものではありません。兵站と輸送(輸送と保管)が確保されていないと、第一線の兵士たちは悲惨な死を迎えることになるのです。

後出の石破元長官の発言からも、日本軍が如何に物流を軽視していたかが判ります。海軍にしても、戦艦や巡洋艦を撃沈すれば何点と昇進時の査定に加わるが、輸送船を撃沈しても点にはならなかったといえますから、戦争のリアリティを殆ど理解していなかったと思われま。

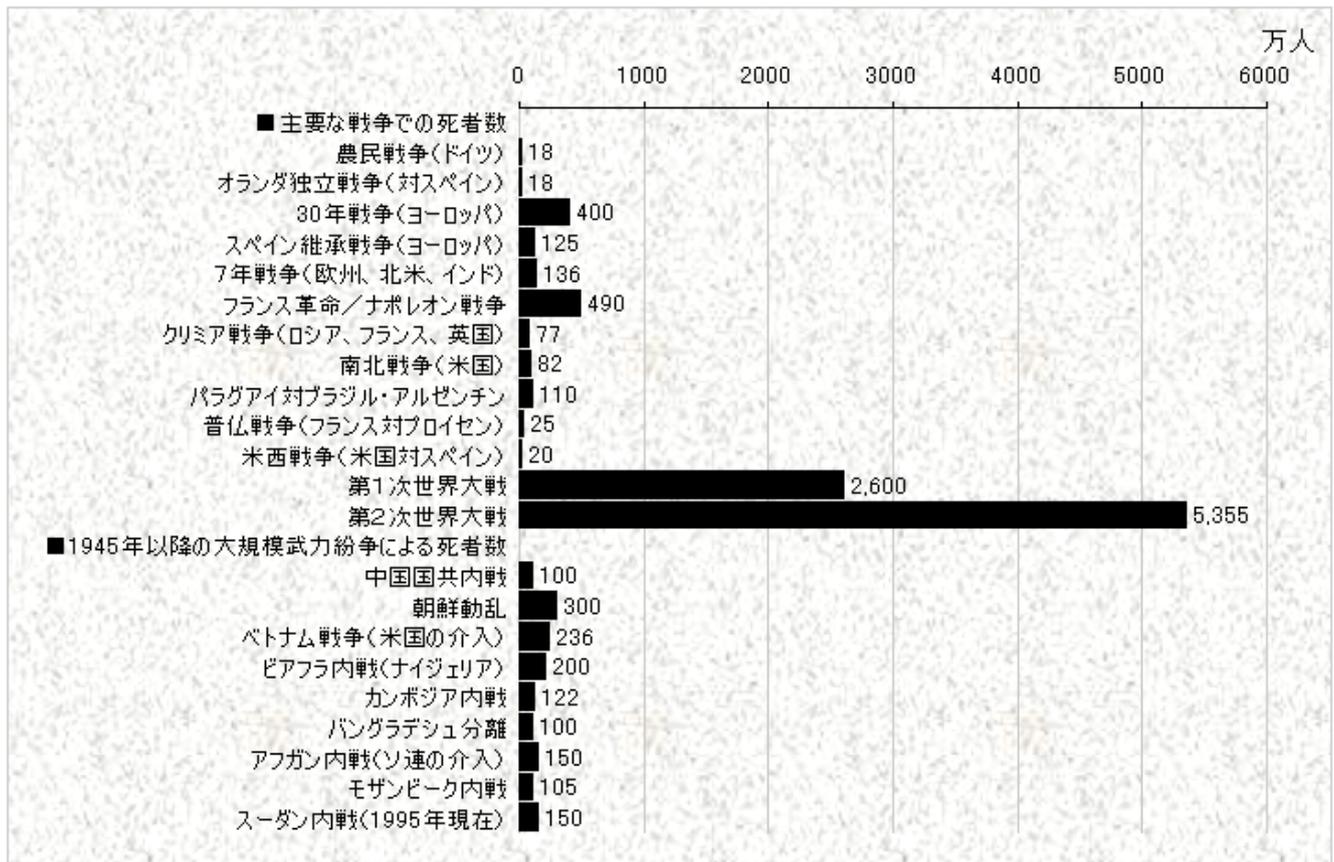
それにしても、太平洋戦争での日本軍戦死者の半数以上が餓死者だというのは悲惨の極みです。

また、太平洋戦争で戦った兵士の大多数は日本の元号では大正時代(1912~1926)であり、敗戦時の1945年には19~35歳でした。大正時代に生を受けた男子は1348万人で、その約200万人、実に7人に1人が戦死しています。そして、この戦死者たちと結婚していた婦人は戦争未亡人となり、適齢期の男性を大量に失ったために未婚のまま一生を終わった若い女性たちがいます。運命はこの世代の日本人に特に辛く当たったのでした。生を受ける時代、場所により、人間の運命はこれだけ異なってくるのです。

右上にある「表2.第二次世界大戦での国別犠牲者数」は国により統計の取り方に違いがあり、同じレベルでは精度等で比較ができませんが、一応の参考にはなります。ドイツと日本がほぼ同数の戦争犠牲者を出していること、ポーランド、ソ連、中国の戦争犠牲者数は日本の何倍という多さである現実を見てください。

次頁の「表3.世界の主な戦争及び大規模武力紛争による犠牲者数(16世紀以降)」でも、第一次世界大戦と第二次世界大戦が群を抜いて犠牲者数が多い事情が理解できるでしょう。死者の数字の裏には、死んだ一人一人の生活があり、家族や友人がいるのです。戦争というものは如何に悲惨なものかに想いを致してください。

表3. 世界の主な戦争及び大規模武力紛争による犠牲者数(16世紀以降)



(注) Ruth Leger Sivard, World Military and Social Expenditures(1991,1996)による。

(資料) レスター・R・ブラウン「地球白書1999-2000」(1999)

6. 「昭和天皇と明治天皇」半藤一利／文芸春秋 2008/2 特別号 p138~153

11/29、開戦決意を前に天皇は重臣（首相経験者）との懇談会をもった。この時、米内光政が「ジリ貧を避けんとしてドカ貧にならないように」といい、若槻礼次郎が「大東亜共栄圏の確立とかアジアの安定とかの理想に囚われて、戦端を開くことは危険である」旨の発言をした。後に、これを知らされた軍部の中堅参謀は憤然とした。陸軍の大本営陸軍部戦争指導班『機密戦争日誌』にはその怒りが記されている。「国家興亡の歴史を見るに国を興すは青年、国を滅ぼすものは老人なり。重臣連の事なかれ心理も止むなし。若槻、平沼連の老衰者に皇国永遠の生命を託する能わず。吾人は孫子の代まで、戦い抜くのみ」

天皇の平和への希求など何処吹く風である。戦機は今にありと、合理的判断を放棄した盛んなる敵愾心のみが軍中央部には充満していたのである。何と不忠の臣ばかりであったことか。……(p143~144)

……「手紙を有り難う。しっかりした精神をもって元気で居ることを聞いて、喜んでます。国事は多事であるが、私は丈夫で居るから、安心して下さい。今度のような決心をしなければならぬ事情を早く話せばよかったけれど、先生とあまりに違ったことをいうことになるので、控えておったことを許してくれ。敗因について一言いわしてくれ。我が国人があまりに皇国を信じ過ぎて、英米を侮ったことである。

我が軍人は、精神に重きを置きすぎて、科学を忘れたことである。明治天皇の時には、山県、大山、山本等の如き陸海軍の名将があったが、今度の時、あたかも第一次大戦の独国の如く、軍人が跋扈して対局を考えず、進を知って退くを知らなかったからです。戦争を続ければ、三種の神器を守ること出来ず、国民をも殺さなければならなくなったので、涙を飲んで国民の種を残すべく努めたのである。穂積大夫は常識の高

い人であるから、判らない所あったら聞いてくれ。寒くなるから、心体を大切に、勉強しなさい」(昭和天皇より 11 歳の皇太子に宛てた手紙の全文 1945/9/9 付)

……が、それにも増して山県有朋、大山巖、山本権兵衛という軍人政治家たちの名前が挙げられていくことに瞠目するばかりであった。そして恐らく「等」の内には、伊藤博文、児玉源太郎、小村寿太郎たちがいるのであろうと。それにつけても思うことは、日露戦争という国難の際には、明治天皇を囲む政治家、軍人、外交官には、真に素晴らしい見識と能力と責任感をもった人たちがいた。彼等の補弼および補翼のよろしきを得て、明治天皇は国の大事を過たず乗り切ることができた。……(p140~141)

……ドイツ医学者のベルツの明治 36/9/25 の日記を引いてみる。「二ヶ月このかた、日本とロシアとの間は満州と韓国が原因で、風雲陰悪を告げている。新聞紙や政論家の主張に任せていたら、日本はとっくの昔に宣戦を布告せざるを得なかった筈だ。だが幸い、政府は傑出した桂内閣の許にあってすこぶる冷静である。政府は日本が海陸共に勝った場合ですら、得るところは殆ど失うところに等しいことを見抜いているようだ」元老も政府も軍部も、確かにカッカとせず、冷静そのものであったのである。……当然であろう。昭和の戦争のように、暴虎馮河の勢いで後先の考えずに「清水の舞台を飛び降りる」という論理は、明治の指導者の採り得るものではなかった。「明治国家」は彼等が協力して創り上げたものなのである。(p144~145)

伊藤、山県をはじめとする明治の指導者の優れたところがここにある。戦端を開く、と同時に、如何にしてこの戦いを早期に和平へ持ち込むか、その困難な道への打開へもいち早く手を打つことを、誰もが考えている。彼等の列強の勢力バランスへの目配りもよく、国際情勢への認識もまた確かであった。日本の軍事力に対する懸念や、ロシアの軍事力に対する判断や、必要とする巨額な戦費調達の困難さについても十二分に弁えていた。長期の戦争に国力が耐え得ないことをも痛烈に自覚していた。更には、**彼等はみな幕末の攘夷政策の実行で、欧米列強との衝突に参戦し、過酷な敗北の体験があったのである。**昭和の指導者との根本的な違いがそこにある。昭和の指導者は客観的に己の置かれた状況を見る冷徹な目を持っていなかった。要するにリアリズムに徹しきれず、自分に都合がいいようにのみ主観的に状況を判断し、齟齬をきたすようなことは起こらないものと決めていた。最悪の予想すらしなかった。(その一例に石油の需給を挙げている) (p147)

(三国干渉を)拒絶すれば三国からの武力行使は当然のことと予想される。連日にわたる御前会議の結果、日本はこの勧告を受け入れた。清国に勝って日本人が初めて、自分たちが偉大な民族だということを自覚した途端の、大いなる屈辱なのである。しかし、国民の大多数は政府を非難しなかった。「臥薪嘗胆」という言葉が世間に広まったのは、その直後からである。実際には、日本政府の外交上の手抜かりがこの「敗戦」を招いたのである。……明治 28/5/10、天皇は国民に宛てて、血涙の滲むような勅語を下す。領土の拡大を目的に戦争をした訳ではない。今、三国の強制に屈するも、決して日本の光栄と威厳を傷つけることにはならない、といい、「朕すなわち、友邦の忠言を容れ、朕が政府に命じて、三国政府に照覆するにその意を以てせしめたり」と結んだ。敵意すら抱いた三国を「友邦」と呼び、脅迫そのものを「忠言」とせねばならなかった無念さは、直ちに国民にも感得された。指導者たちはこの「敗戦」でしっかりと学んだ。外交によって最終的に勝ちを確定しなければ戦さは勝ちにはならないことを。この痛烈な体験があつて故に、日露戦争に際しては、開戦当初から外交戦を開始し、和平の仲介にアメリカを動かそうとしっかりと目標を定めていた。それが見事に成功し、日露戦争の「勝利」を国際的に確定することができた。なのに、戦前昭和においては全く外交努力は欠落していた。(p148~149)

7. 私の戦争体験

1933年(昭和8年)早生まれの私が8歳で、大阪の南田辺小学校の3年生の時に大東亜戦争(太平洋戦争)が勃発し、4年生半ばで熊本の壺川小学校に転校し、12歳で熊本の中学・齊々巒(せいせいろう)の1年生の夏に敗戦となりました。その期間に幾つかの唯ならぬ体験をしましたので、以下に述べてみましょう。

火の玉を目撃： 空襲前のことです。私の一家と、下宿人である父の友人の子息で熊本医科大学の学生であった森美喜夫氏は熊本の繁華街に住んでいました。当時は厳重な灯火管制が施行され、今では山奥に行かないと得られない、絶対の暗闇が都会地で存在しました。ある無風状態の午後9時頃のことです。2階のテラスから見てみると、10m程前方に何か微かに光る球状の物体が10秒1周期位で1m程の振幅で上下動しています。森美喜夫氏、私と弟の啓二の3人は感心してその物体に見入っていました。10分間程でその物体は横方向に少しずつ流れて、視界から去りました。見ている我々は「あれが火の玉だ」と言い交わしていました。何の恐怖もなく、唯、「珍しい体験をした」との思い出だけです。

焼夷弾攻撃の体験： そこを焼け出されて、一時的に父の会社の女子社員であった志岐さんの自宅にお世話になっていた時期の事です。日豊線の線路の一本離れた道沿いの家でした。志岐さんには大学生の息子さんがおられました。熊本市がB-29の空襲を受けたのは1944/11/21の爆弾攻撃が最初です。1945/3月には焼夷弾の火炎が天井裏に留まらないように、全ての家屋の天井板を取り外せとの指令が出ていました。記録に依れば、熊本市は1945/4/17から7/17の間に約10回の焼夷弾攻撃を受けています。

ある夜、多分1945/4~5月、私は既に中学・齊々巒の新生で、前述の繁華街の家を焼け出されて志岐さんの家に厄介になって1週間位のことです。空襲警報のサイレンが鳴り響き、我々は防空頭巾と衣服を身に纏い、暗闇の中で息を凝らしてしました。3機ずつが三角形の編隊をなしてそれらが格子状に大編隊を組んだ数十機程のB-29が3,000m程の高度を飛行し、無数の焼夷弾を撒布して行きます。その中の1発は志岐宅の玄関天井をぶち抜き、幸い中身の燃料は屋外へ飛びだして行きました。私の2m程の至近距離です。雌鶏がけたたましく鳴いて火の中を逃げて行ったのが印象的でした。お向かいの家は複数個の焼夷弾が家の中で発火して、手が付けられない状態で、一家の方たちは道路に出てきましたが、高齢のお婆さんは逃げられたのに「私は十分に生きたので、此处を死に場所にしたい」といって家に残りました。



(ネット検索/熊本空襲)

志岐さんたちは家に踏み止まって消火に当たります。我々は道路に出て、次の攻撃を待ちました。2番目のB-29の大編隊が襲ってきました。地上は火の海なので、その火炎を反射して、落下してくる焼夷弾の底部が赤く光って見えます。何と10人程で集まっていた我々の真上約1,000mから72発群(36発2段)焼夷弾が投下されたのです。恐怖に駆られた人々は闇雲に前方の道路に向かって逃げ出します。私は赤く光る焼夷弾の底部がどちらに流れるかを自分でも不思議なくらい冷静に観察しました。何と皆が走り出した方向に焼夷弾は流れて行くのです。既に10m程走った群集に私は「そちらに焼夷弾が行くから引き返せ！」と大声をあげました。事実、20m程前方に焼夷弾群が落下し、一人だけ下駄の裏に焼夷弾の燃料がこびり付いて火消しに苦労しただけの被害で助かりました。お婆さんは合掌して焼死体となって樽に収められました。

志岐さん母子の驚異的な奮闘で、志岐さんの家と隣の家だけが類焼を免れ、一面の焼け跡に一軒だけほぼ健全な状態で残っていました。

米軍の焼夷弾には、弾体から飛び出しても着火なかったものもあり、それを拾ってきて炊飯の燃料にした人がいましたが、火力が強過ぎてお釜の底が融けてしまいました。また、弾体の鋼板で鎌を作った人は、日本の鉄と違ってその切れ味が素晴らしかったと話していました。これらの事実からも、私は彼等の技術力の差をまざまざと感じ取りました。

同級生でボスの人は、拾ってきたバンドル分解用の信管のプロペラを右手で廻していたら突然爆発し、信管を握っていた左手首を失いました。

地震で山が光る：父が支店長を務める徴兵保険会社は繁華街の事務所を焼け出され、臨時の支店を菊池高原の加乗村に移設しました。志岐さんの家を出て、その村の後家さんの一軒に家族も間借りで住み込みます。ある晩のこと、私は通い慣れた山道を一人で歩いていました。そこへかなり大きな地震が襲ってきたのです。夜空が明るいだけで真っ暗の灯火管制下の地上で、何と振動の度に周囲の山々がかなりの明るさで青白く間欠的に光るのです。かねて聞いていた摩擦静電気の放電現象だったようです。同じ現象があっても、街路灯や民家の明かりがある今では、見るできない現象でしょう。面白い体験をしました。

芋畑で機銃掃射を受ける：中学・齊々巒の校舎も焼失し、中学生は地域別に集団を編成し、畑作業の手伝いなどの勤労奉仕に明け暮れていました。ある日、予告なく米軍の双発爆撃機が20m程の超低空で襲来し、いきなり機銃掃射したのです。これには私も吃驚しました。慌てて葉が生い茂る唐芋(熊本では甘藷のことをこう呼びます)の畝の中に飛び込み、隠れました。前方の銃座から機関砲を打ちまくっている青年の顔がはっきり見えました。とても痛快そうな顔をしていました。自宅に戻ったら、その機銃掃射で隣家では醤油壇の肩の所を砲弾で撃ち抜かれていました。

飛行機のエンジン音の違い：日本軍の飛行機のエンジン音はブンブンなのです。米軍の飛行機のエンジン音は甲高いキーンという音です。これはエンジン回転数が2,000回転/分の普通の自動車と、7,000回転/分位のF1レーサーマシンとの違いと同じです。エンジンは定トルク機械なので、同一設計の場合は回転数に比例して高い出力が出せます。米軍の飛行機に比べて、日本軍の飛行機の非力さは、エンジン音を聞いただけで明白です。「これだけ技術力に差があるのに、何故、米国と戦ったのだろうか」と小学生時代から不思議に思っていました。軍部は「今は劣勢でも、その内に神風が吹いて米軍が壊滅する」といいます。「現代の船舶は蒙古の軍船より余程頑丈に作られているから、神風が吹いても被害は小さいのではないか」というのが私の素朴な疑問でした。

長崎の原子爆弾を目撃：同様の事情で、約20人の中学・齊々巒の集団が菊池高原での畑仕事をしている時でした。8/9、快晴の日でした。いきなり、地面がズシンと上下動したのです。振り返ってみると金峰山の右肩からキノコ雲がむくむくと上がってきました。これまで見た戦争映画の爆弾の雲とはスケールが全然違います。私は壺川小学校の6年生の時に全校で一人の「英才教育」の候補者になるほど理数系の学科の成績がずば抜けていたので、ウラン235で想像を絶する強力な爆弾を作れることを以前から知っていました。見た瞬間に「あれは原子爆弾だ！遂に原子爆弾ができたのだ！」と叫びました。被害の大きさに思いを致すより、とうとう人類は原子力の解放に成功したのだという感激の方が強く、そのような事件に立ち会えたという感動が大きかったです。しかし、その場にいた誰一人として原爆という概念を理解でき、この光景に特別の反応を示した人はいませんでした。私は異邦人の中に一人いるような感じがしました。

不思議なことに、キノコ雲の内側からはピンク色が沸き出てきました。呆然として皆も恐らく1時間くらいは雲の行方を見ていましたが、ほぼ我々の頭上の青空の中を薄いピンク色の普通の雲になって通り過ぎて行きました。これまでの文献で、原子雲がピンク色であると書かれた文を見たことがありません。未だに私にとって、疑問となっている事柄です。ラジオのニュースで、これが金峰山の向こうに開ける有明海の対岸にある

長崎での事件であったことを知り、改めてそのエネルギーの巨大さを知り、今、人類の新しい時代が拓けるのだと感動しました。

下の「私の履歴書」の記事の著者・寺沢芳男氏が小学校4年生、私が3年生の時に太平洋戦争(我々は「大東亜戦争」と呼んでいた)が開戦しています。彼がこの記事の中で述べている事柄は私の経験と重なります。今からそう遠くない時代に、日本人はこのような体験をしているのです。

私の履歴書

寺沢芳男

④

戦争が始まったのは小学校4年生のときだ。昭和16年(1941年)12月、ラジオが大本営発表で真珠湾攻撃を伝えた。佐野でも大人たちがみんな興奮して旗行列をした。あんな悲惨な結果になることと知らず日本中が喜び勇んでいた。

自爆訓練、戦車に突撃

遺書入れた封筒 担任に渡す

科学(現一橋大)の学生だった藪敏光さんが「芳男君、日本は負けるよ」といった。神国だから絶対神風が吹いてそんなことはないと思っただけでショックだった。毎日手榴弾に見たてたボールを持って敵の戦車に飛び込む練習をさせられた。

玉音放送が流れた45年8月15日、後の司馬遼太郎さんが

戦時中

44年の春、旧制栃木県立佐野中学校の入学試験に合格した。当時小学校50人の級友のうち3人しか入学しなかった。そのころは佐野も男性は次々と出征、物資が不足するなど戦争がカゲを落としていたが、中学生になったばかりの私はまだほかのことに関心があつた。

若林六四先生という早大英文科卒の授業が面白かった。

イブに体の大きな従弟で同級生の藪久二男君にサンタクロースの格好をさせ、他の友人2人とジングルベルを歌いながら先生の家を急襲した。それぞれお目当てのマドンナがいた。もちろんバツティングしていた。娘さんを射止めた者はいない。

そうこうしている間に日本の敗戦の色が濃くなってきた。久二男君の兄で、東京商

福田定一・戦車隊少尉として同じ佐野にいたのを後で知る。どうして戦争をしなければならぬのかと悩んだが、佐野の路地で遊ぶ元気な子供たちをみてこの子たちを守るためと自分を納得させたという。



中学時代の友人たちと。2列目④が筆者

りから米軍が上陸するという噂が流れていた。14歳で死ぬのか、ちょっと悲しいと思ったが、親も周りの人も同時に全員死ぬ「一億総玉碎」だからとあきらめた。ただ、満員電車の中で偶然触れた女子学生のゴムまりのようなものの感触を思いだし、ああいう気持ちももう味わえないだ

終戦後、大人たちは急に態度を変え、マッカーサーとかGHQと言いだした。天皇陛下と神国日本と言っていた同じ口から、あつという間に百八一度違ったことを言う。若者は戸惑い反発した。早稲田に入ってから、教授がたつたひとり我々が悪かった、あの戦争を引き起こした責任は重いと詫びてくれた。一体日本はどうなるのか。それよりも戦時中よりひどい食糧難だった。毎日闇米を買いに農家を物々交換の着物をもって母と歩いた。

(元米国野村証券会長)

下の「私の履歴書」の記事の著者・馬場彰氏は小学校6年生で終戦にあっています。多分、年齢的には私と同じ年の遅生まれです。都会の学童たちは田舎に強制疎開させられました。その過酷な日常が、活写されています。私は当時、地方都市である熊本にいましたので、疎開の経験はありません。しかし、空襲で焼け出されて、辺鄙な田舎に疎開せざるを得ませんでした。米軍機の激しい機銃掃射、空襲に遭った日本の木造の大都市が一面の焼け野原になった悲惨な光景が目に見えるようではありませんか。私たち昭和一桁の人間は、戦禍の悲惨さの生き証人なのです。

私の履歴書

馬場 彰 あきひろ

③

湯河原に疎開した約300人は複数の温泉宿に分かれて寝泊まりした。私の宿舎は坂口屋旅館。藤木川と温泉街が一望できる風雅な宿だった。授業といっても、校舎はない。学年別に旅館を行き来しながら、畳の広間で御膳を机代わりに勉強するのである。情緒あふれる温泉宿。周りは顔なじみばかり。ウキウキしながら寝床に入った。ところが翌朝から、地獄のよつな疎開生活が始まる。

総員起床——。カンカンとバケツをたたく音が鳴り響くと、教師から一斉にたたき起こされた。直ちに寝間着と布団を片付けるように命じられた。少しでも

まるで軍隊、地獄の生活

横浜大空襲、家族が心配

大木を切り倒しては薪を集める重労働に従事した。数週間もすると私はみるみるやせ衰え、生気を失っていた。脱走者も絶えなかった。夜中に寝床をそっと抜け出し、藤木川沿いに山を下り、東海道線を東へ向かうのだ。だが、小田原駅辺りで警官に捕まるのが関の山だった。見せしめの意味もあるのだ

る。旅館の部屋ごとに特別攻撃隊の名前で呼ばれることになり、私と寝泊まりする7人は「万葉隊」と名付けられた。疎開先ではまともな食事にありつけなかった。主食は豆かすや大根メシ。大根メシといっても飯粒など見当たらない。あとはやせ細ったサツマイモくらい。いくら煮込んで固くても味が無い。週に1、2回は険しい十国峠に登り、

ろ。連れ戻されたら子どもには、顔が青黒く腫れ上がるほどなぐられる鉄拳制裁と厳しい絶食罰が待っていた。湯河原は首都圏を空襲する米軍機の飛行ルートにあたっていたようだ。はるか上空をB-29が編隊を組み、悠々と飛来しているのを何度も目にした。秋が過ぎ、やがて年を越すと米軍の攻撃にもいよいよ拍車がかかってきた。

5月には横浜大空襲があった。「○○君、ちよっと来なさい……」。教師が改まった表情で生徒を呼び出すと、肉親が亡くなったことが告げられる。でも人前で泣くことは絶対に許されなかった。深夜になると、あちこちの



坂口屋旅館 (建物は今も現存するが今は休業中)

湯河原に姿を現した。私を連れ戻しに来てくれたのだ。「これからは一緒に住むぞ」。懐かしい父の顔を見ると、喜びがこみ上げてきた。4月中で中学生になった兄は私よりも一足先に家族の元に戻っていた。その兄を通じて疎開生活の過酷さを聞き知っていたようだ。

寝床からすすり泣きが聞こえてくる。「父さんは無事だろうか」。街の中心部で働く父のことが気がかりだった。後で聞くと、父は焼夷弾攻撃や機銃掃射をかくぐりながら、生き永らえていたらしい。郊外の農村に移住していた家族もなんとか無事だった。(オンワードホールディングス名誉顧問)

1945年初夏。敗戦の色濃い日本は絶望のふちに立たされていた。

8. 日本の最高責任者たちの感想

84/76 頁に 2010/8/18 付けの日本経済新聞の「A級戦犯が語った戦争」の記事を載せます。日本の指導者の真の姿を見極めてください。そして、この日本人の思考パターンは現在でも余り変わっていないと思った方が間違いありません。

極東国際軍事裁判(東京裁判)が終了してから10年後の1958年以降、法務省が釈放されたA級戦犯被告から日中戦争、太平洋戦争などについて聞き取った聴取書綴(つづり)が国立公文書館(東京・千代田)に所蔵されていることが分かった。釈放後、一部を除いて意見を公にしたA級戦犯被告は少なく、昭和史研究の貴重な資料といえそうだ。

A級戦犯が語った戦争

釈放後の聴取書綴発見

聞き取り調査は法務省が豊田隈雄元海軍大佐、一臣、畑俊六元陸軍大臣らの事業として戦犯裁判資料 井上忠男元陸軍中佐らが生存していたA級戦犯12人の収集作業を続けてきた。木戸幸一元内大臣一人全員から話を聞いたと、

▼木戸幸一元内大臣

あそこで戦争政策を抑えらるゝと内乱になり、陛下のご退位の問題

日米開戦「勝算なく戦運に期待」 終戦「45年1月から天皇と話す」

東京裁判開廷の日、裁判長の入廷で起立するA級戦犯被告たち(1946年5月3日)



1958年以降 生存全員が証言

聴取書の抜粋

配備の師団にさえ武器もない状況であったが、陛下もこれらの状況がよくご存じになっておられ、いよいよ終戦へのご決意を固くされていたものと拝察する。

▼畑俊六(元陸相)

▼日中戦争

満洲国(満洲)の皇帝まで擁立しておいて、蔣(介石)のメンツや中国人の感情を無視してしまい抜き差しならぬ形となる。私の考えでは日支和平の鍵は(中国からの)撤兵問題等ではなく実にこの「満洲国承認」の

責任意識の薄さ共通

現代史家・秦郁彦氏の話 敗戦から十数年後なので、戦争の実態や諸論評に接して影響されたり、あと知恵も加わってか、概して常識的な感想に落ち着いているが、共通して責任意識が薄い点は気になった。ドイツの戦力を見誤ったと告白した大島元駐独大使と、結果的にアジアの植民地が独立したと考えるのは自己満足にすぎぬと指摘した岡元海軍省軍務局長の発言が興味深かった。

いう。

木戸元内大臣は終戦の

年の45年1月から昭和天

皇と戦争終結について話

し合っていたことを証

言。嶋田繁太郎元海軍大

臣は明確な勝算なく開戦

という見方について「自己

条件にあった。

今次の大東亜戦争中各地において

相当の不法行為や行き過ぎのあった

ことは認めざるを得ない。

▼嶋田繁太郎(元海相)

▼太平洋戦争

開戦に踏み切った時の戦争の見通

しについては、はっきりした勝算は

なかった。

この際であれば「戦運」ということ

もあり、多年猛訓練を経た艦隊の術

力にも期待が持てる。緒戦には自信

が持てる。そのうち終戦にもつて行

くこともできると考えた。

▼荒木貞夫(元陸相)

▼敗戦

第一次大戦中及びそれ以後の日本

の政治のあり方の総体に健全性を欠

いていたため国の自然の大きな流れ

が戦争への道をたどった結果による

ものであると思ふ。

▼大島浩(元駐独大使)

▼三国同盟

ひと言にして言えは独の戦力を見

てしまったのである。独の力があ

満足以過ぎない」と否定的意見を述べている。星野直樹元内閣書記官長は「早く戦争を止めるべきだった」と悔やんでいるが、当時戦争終結を言い出すことは「犯罪」とされたので誰も言い出せなかったと述べている。東条英機元首相ら死刑となった7人と獄中で病死した元被告以外のA級戦犯被告は54年から順次釈放され、56年3月の佐藤賢了元陸軍省軍務局長を最後に全員が釈放された。

しかし、落胆しないでください。日本人には良い点も沢山あるのです。それが次の(2)の部の戦後復興で遺憾なく発揮されます。次の巻を楽しみにしててください。

「言わねばならないことを言うのは、愉快ではなくて、苦痛である」

抵抗の新聞人として名を残す桐生悠々が使っていたと伝えられている机が信濃毎日新聞本社(長野市)にある。主筆にふさわしい重厚な作りだ。2005年の社屋建て替えまで、歴代の編集局長はこの机の前に座ることになっていた。

「権力に敢然と立ち向かった立派な記者がいたという誇らしい気持ちと、軍の圧力に負けて彼を守りきれなかったジャーナリズム企業としての敗北感の両面がある」と同社専務の小坂壮太郎さん(48)は語る。

大演習を批判

悠々が主筆時代、「経営は編集に介入せず」の方針のもと、オーナーである小坂順造社長、弟の武雄常務(のちに社長)は、悠々の社長批判の論説でさえ容認した。壮太郎さんは武雄常務の孫だ。その小坂家が悠々を切らざるを得なかった

戦争と言論人 ― 足跡を訪ねて

②

桐生 悠々



信濃毎日新聞主筆時代 同社提供

きりゅう・ゆうゆう(1873~1941年)本名政次。金沢生まれ。大阪毎日新聞、朝日新聞などを経て、1910年に信濃毎日新聞主筆に就任。乃木将軍殉死批判の社説が物議を醸す。

14年に他社に移ったが、28年に信濃毎日新聞主筆に復帰。33年の社説「関東防空大演習を啜う」で軍関係者の反発を受けて退社。以後、個人雑誌「他山の石」を発行して時局や軍部の批判を続けるが、度重なる発禁など弾圧を受ける。太平洋戦争直前の41年9月に死去。

軍に屈せず一人の戦い

痛恨事があった。

1933年(昭和8年)、関東防空大演習を啜(わら)う」という社説が掲載された。数日前に行われた陸軍の大規模な演習を論じたものだが、悠々は「敵機を関東の空に帝都の空に、迎撃つというものは、我軍の敗北そのものである」と断言した。敵爆撃機は日本沿岸まで防がねばならず、本土に侵入を許せば東

京は関東大震災と同様に焼け野原になると警告した。「中身は悪いものでも何でもないんです。きわめて妥当な意見です。それをあざける意味の)『啜う』ときたからばかな兵隊、頭にきたわけです」と当時を知る同社の元編集局長、坂本令太郎さん(故人)は証言している。

軍関係者はこの機を逃さなかつた。地元で郷軍人会が共通の論を持っていなければ圧力に屈するのは早い」と一人で戦つことの難しさを語る。

弾圧に次ぐ弾圧

05年に同社として50年ぶりに復活させた主筆を務める中馬清福さん(74)、元朝日新聞論説主幹)は「悠々は「だから、言ったではな

の時代の新聞社は丹頂鶴のように頭の上の主筆だけが論をきかせるように廃刊の辞を命書が届いた。——蟋蟀(こおろぎ)は鳴き続けたり風の夜

東京・多磨霊園の悠々の墓の隣に自身の句碑が建っている。軍国主義の暴風の中、「言わねばならないこと」を言い続けた悠々の死の4年後に敗戦。焼け野原にたたずむ人々は、彼の予言の正しさと軍部が指導した戦争の啜うべき愚かさを思い知ったのだった。

磯田道史の

この人、その言葉

桐生悠々 (1873~1941)

歴史には時折、奇跡のような人物が現れる。世の中がまるごと誤っている時、たった一人でその風潮に抗しまつとうな意見を述べる人物が出る。桐生悠々。旧制四高で哲学者狩野亨吉に学び、東京帝大法学部を出たが官僚にならず、昭和戦前の国が破滅に進むなか新聞人として警告を発し続けた。恐るべき予見力であった。桐生は、日米開戦前に死んでい

るが、日中戦争の泥沼化↓対米開戦↓米軍の上空襲撃↓壊滅的敗北↓占領下の大軍縮と、すべて言い当てている。しかし世間は彼の意見に耳を貸さぬどころか迫害。戦後になってはじめて彼の偉大さに気づいた。桐生は、日本人は勇気な流されやすいと感じ、付和雷同しない秘訣を説いた。原因から、結果に至るまでの順序を知らなければ、依然として無智である」といい、世間の答

えに惑わされず、なぜそうなるのか自分で順序だてて考える習慣をもて、と呼びかけた。ワンフリーズのスローガンは人間の思考を省き「答え」だけを人々に信じ込ませるから危ない。また正しい判断には広い視野が不可欠。狭い価値観にとらわれず、つねに他の文明と自分の文明を比較して考えよ、と説いた。冒頭は、あらゆる新聞から追われた桐生が記した予言。彼は普遍愛の

勝利を信じていた。その理由は「武力も金力も常に敵を少なくとも競争者を発生せしめるけれども、愛は万人を平等に取り扱って敵を持たないからである」という。教育に愛の予算を」ともいった。戦争の為に、百億の予算を組む国家と、教育の為に、百億の予算を組む国家と、いずれが将来性あるかは問わずして明である。青くみえても彼の予言は当た

る。(歴史学者・茨城大准教授)

愛、普遍愛の持主のみこそは、一時は迫害されても、未来永劫に亘って、世界を支配する

前頁とここに掲載した2件の記事を読めば、悠々の人物像が浮かび上がってくるでしょう。

悠々には多数の著作があり、「関東大演習を蚩う」「乃木將軍の殉死批判」等が特に有名です。

また、悠々に関して書かれた図書としては、「桐生悠々反軍論集」「桐生悠々自伝」「ペンには死なず」「抵抗の新聞人桐生悠々」「畜生道の地球」「桐生悠々」「土着の思想」「人ありき67人伝」その他があり、百科事典、教科書等に多数の記事があります。

超軍事国家で軍部に楯突くと、国家からどんな仕返しを受けるか想像ができますか。悠々は己の思想に殉じ、遺された家族は大変な苦勞を背負いました。

私は悠々の直系の孫であり、残された家族の苦勞をかなり知っていますが、お話しできるのはここまでです。

B3

2009年(平成21年)11月14日

10. 「空気と戦争」より

戦前と戦後を貫くもの：……戦前の明治憲法では確かに天皇は国家の最高責任者であり、天皇主権。戦後の憲法では天皇は象徴に過ぎず、主権在民。正反対ではあるが、実質的に日本を動かしていたのは官僚機構であり、天皇主権でも主権在民でもない官僚主権が続いているという意味では、戦前も戦後も連続しているといえる。……昭和15年までダンスホールが開いており、銀座では最新ファッションに身を固めたモダンガールが闊歩し、熱心なジャズファンの学生がいた。そういう現在と変わらぬ日常性があった。……

進駐軍と呼ばれたアメリカの占領部隊が現れたからアメリカナイゼーションが始まった訳ではなく、戦前からアメリカ文化は洪水の如く押し寄せていた。……

「進歩的文化人」と呼ばれる人々が、戦前は酷い時代だったと繰り返し主張したことによる。……山本夏彦は「戦前の真っ暗史観」に対してこう反論している。「昭和6年の満州事変から敗戦までの15年間真っ暗だったというのは左翼の言い触らしたウソである。なるほど社会主義者とそのシンパは、特高に監視されて真っ暗だったろう。けれどもそれは1億国民の中の千人か五千人である。満州事変はこれで好景気になると国民は歓迎したのである。果たして軍需景気で失業者は激減した。真っ暗なのは昭和19年第一回の空襲からの1年間である(「世はメ切」/文春文庫)。」…… (「空気と戦争」猪瀬直樹/文春新書 p11~16)

戦前は暗かったか：……作家 永井荷風は、その頃の東京の日常的な光景を『断腸亭日乗』にこう記録していたのではないか。「余、この頃、東京住民の生活を見るに、彼らはその生活について相応に満足と喜びとを覚ゆるものの如く、軍国政治に対しても更に不安を抱かず、戦争についても更に恐怖せず、むしろこれを喜べる如き状況なり」(昭和12年8月24日)…… (「空気と戦争」猪瀬直樹/文春新書 p64)

歴史は繰り返す：……数字を誤魔化すと国が減びる、と僕は信じて疑わない。官僚機構は、虚実を巧みに使い分ける、と知っている。局所的な「実」に拘泥しながら遂に全体を見ない、全体が虚であっても責任を取らないのである。……p170(2030年にピークを迎えるという国土交通省の「交通需要推計」(2005年から日本は人口が減少している!)と、1日33,000台の通行量があると予測しながら現実には12,000台にしかならなかったアクアラインの予測の欺瞞が述べられている。道路建設をやりたい一心で虚偽情報を提出する官僚の体質は全然変わっていない!) (「空気と戦争」猪瀬直樹/文春新書 p182)

11. 太平洋戦争に関する証言／「空気と戦争」より

……高橋中尉の持参した一枚紙、石油の需給予測表は、切羽詰まった状態を鋭く突き付けていた。一瞬、沈黙があった。「それでどうなんだ」東條陸相が口を開いた。静かな調子だった。「従いまして、一刻も早く御決断を…」皆まで聞かず、陸相が口をはさんだ。依然として穏やかな口調であった。「泥棒せいという訳だな」……この半年後に起こった太平洋戦争は「欧米列強からのアジア開放」戦争と鼓舞され、今なお「右の左翼」はそう言い張っているが、本音としてはまず「石油奪取」ありきだったのだ。ところが、後にA級戦犯とされた東條陸相は「侵略」を想定していなかったからこそ怒った。「この馬鹿者ッ。長い間、お前たちが提灯を持ってきたからこそ、なけなしの資材を人造石油に注ぎ込んで来たんじゃないか。それを今、この切羽詰まった時になって、役に立つとは思えません、とぬけぬけ言いおる。自分たちのやるべきことを疎かにしておいて、困ったからと人に泥棒を勧めに来る。いったい、日本の技術者は何をしておるのだ！」……もし、人造石油の生産量がドイツと同じくらいだったなら、日米開戦が避けられたかも知れない。ドイツの(FTS法による)人造石油生産量は年産350万トン(昭和15年)に達していた。…… (「空気と戦争」P68~72)

……そこで高橋中尉は何となくこのいらいらした気持ちを訴えたくなくて口を切った。「原田さん。上層部は何故、何時までも決心しないのでしょうか。ぐずぐずしていると油が断たれて、何かしようにもできなく

なるに決まっているのに」私の問いかけに同調するような反応が原田少佐の口から聞けるものと期待していた。だが、驚いたことに全然違った答が返ってきた。「君は本当にやった方がいいと思っているのかね。いいかい。ここで自棄っばちで事を構えたら、満州は勿論のこと、朝鮮も台湾も無くしちゃうことになるんだよ。この際、ひとつ我慢すれば、満州は駄目だが、朝鮮と台湾はうまくいけば残るよ」p79……高橋が反論すると、若い中尉は弟のようなものだから、原田少佐は平気でこんなことを言う。「だから危ないんだよ。そういう雰囲気、ますます危ない方向へ国を引っ張っていくんだ」「しかし、今ここで引っ込んだら、国民が黙っていないんじゃないじゃありませんか？」「大政治家というものは、正しいと自分で信じた場合、国民など黙らせてもその方向へ引っ張って行くものなんだ。その代わり、自分も永遠に黙らされることを覚悟の上でね」「そんな政治家がいますかね」「いないね。昔はいたらしいがね」「するとどうなるのですか」「結局、戦争することになるさ。そして敗けるんだよ」……（「空気と戦争」p79~81）

昭和16年の敗戦：「……昭和16年4月1日に、今のキャピトル東急ホテルの辺り、首相官邸の近く、当時の近衛内閣であります、総力戦研究所という研究所を作りました。ありとあらゆる官庁の30代の俊才、軍人、マスコミ、学者、36人が集められて、もし、日米戦わばどのような結果になるか、自由に研究せよ、というテーマが与えられた。8月に結論が出た。緒戦は勝つであろう。しかしながら、やがて、国力、物量の差が明らかになって、最終的にはソビエトの参戦という形でこの戦争は必ず負ける。よって日米は決して戦ってはならないという結論が出て、8月27日に、当時の近衛内閣、閣僚の前でこの結果が発表されますのであります。これを聞いた東條陸相は何と言ったか。『まさしく机上の空論である。日露戦争も最初から勝てると思ってやった訳ではない。三国干渉があって止むを得ず立ち上がったのである。戦というものは意外なことが起こって、それで勝敗が決するものであって、諸君はそのようなことを考慮していない。この研究の成果は決して口外しないように』と言って終わるわけですね。何故あの戦争は負けたか。要は、輸送というものを徹底的に軽視したからですよ。つまり、陸軍では『輜重兵が兵なれば、電信柱に花が咲く。輜重兵が兵ならば、チョウチョウ、トンボも鳥の内』と言われて、南方を幾ら占領しても、輸送する船が要る。しかしながら、それに護衛が付かない。何故ならば、帝国海軍は、日本海海戦もこれあり、艦隊決戦ということを重視したのであって、商船を護衛するようなのは、それは腐れ士官の捨て所だ、とこのように言われた。……しかし、その数字(船舶消耗率)がでたらめであって、結果として、この国はああなってしまう訳ですね。何故、あの戦争になったのか。それは、政治を司る者が、己も知らず、そして相手の国力も知らず、そんなことできないじゃないかと言ったならば、『貴様は大和魂を何処に置いた、それでも日本人か』、こう言われてしまって、前線に飛ばされるか、首になるか、それだったならば、山本七平さんに『「空気」の研究』というのがあるけれども、やっちゃんえ、やっちゃんえと言うことで、とうとうあんな事になってしまったということだと私は思っています」。

2007/2/9 衆議院予算委員会で石破茂元防衛庁長官の発言議事録より／（「空気と戦争」p88~89）

……山本(七平)は戦艦大和(の特攻出陣)を巡る軍人の無責任な意志決定の本質を「空気」と捉え、こう論じている。『「空気」とは誠に大きな絶対権を持った妖怪である。一種の『超能力』かも知れない。何しろ、専門家ぞろいの海軍の首脳に、『作戦として形をなさない』ことが『明白な事実』であることを強行させ、後になると、その最高責任者が、何故それを行ったのかを一言も説明できない……こうなると、統計も資料も分析も、また、それに類する科学的手段や論理的論証も、一切は無駄であって、そういうものを如何に精緻に組み立てておいても、いざという時は、それらが一切消し飛んで、全てが『空気』に決定されることになるかも知れぬ。まさに「昭和16年の敗戦」を思い起こさせる分析をした上で、それでは戦後社会はどのようなのか、を論じていく。『戦前・戦後の空気の研究』などは、勿論不可能だから何とも言えないが、相変わらず猛威を振るっているように思われる。尤も、戦後らしく『ムード』と呼ばれていることもあり、昔なら『議場の空気』といったところを『当時の議場の全般のムードから言って……』などとの言い方もしている。そし

て時にはこの『空気』が竜巻状になるのがブームであろう。何れにせよ、それらは戦前・戦後を通じて使われる『空気』と同系統に属する表現と思われる。そしてこの『空気(ムード)』が、全てを制御し、統制し、強力な規範となって各人の口を封じてしまう現象、これは昔と変わりがない」。……(「空気と戦争」p158~159)

12. 太平洋戦争に関する証言／「失敗の本質」より(日本軍の組織的研究／中公文庫)

1991/8/10に初版が刊行されたこの本は、1980年秋から6人の研究者により進められた太平洋戦争の日本軍の戦い方についての、社会科学的、組織論的分析を行なった日本では最初の研究書です。書き方が硬いためにやや読み辛いですが、日本人の思考パターンを知る上でとても参考になると思い、敢えてここに引用しました。基本的な点で、今の日本人の思考パターンもこれと大きくは変わっていません。日本人の中で生きて行こうとするなら、日本人にはこのような性向があるのだと知っておいてください。

事実を冷静に直視し、情報と戦略を重視する姿勢の欠如： ミッドウエー島攻略の図上演習を行なった際に、「(航空母艦)赤城」に命中弾9発という結果が出たが、連合艦隊参謀長宇垣少将は、「ただ今の命中弾は三分の一、3発とする」と宣言し、本来なら当然撃沈とすべきところを小破にしてしまった。しかし、「(航空母艦)加賀」は、数次の攻撃を受けて、どうしても沈没と判定せざるをえなかった。そこでやむなく沈没と決まったが、ミッドウエー作戦に続く第二期のフィジー、サモア作戦の図上作戦には沈んだはずの「加賀」が再び参加していた。……ミッドウエー海戦の結果は、日本軍にとって図上作戦で予想された以上の決定的敗北であったが、作戦終了後に通常行なわれる作戦戦訓研究会もこの際には開かれなかった。作戦担当の黒島先任参謀は、戦後、次の様に語ったといわれる。「本来ならば、関係者を集めて研究会をやるべきだったが、これを行なわなかったのは、突けば穴だらけであるし、皆充分反省していることでもあり、今更突いて屍に鞭打つ必要がないと考えたからだった、と記憶する」。(p328~329) [私は社会人としての長年の経験から、このような日本人のメンタリティは殆ど変わっていないと痛感しています!]

標準化による大量生産の考え方の違い：……しかし、兵備生産量の差を物理的な面での国力の差のみに還元することは正しくない。そこには、生産システムの思想の違い、そこから作り出される兵備についての考え方の違いが作用した点も軽視できないのである。米国の製品及び生産技術の体系は、科学的管理法に基づく徹底した標準化が基本であった。潜水艦を例にとると、米国は船型の種類を絞り、同型艦をできる限り長期間設計変更しないで大量生産方式で作ることに力を注いだ。……他方、日本海軍では、第二次大戦に参加した潜水艦だけでも、実に多種多様な潜水艦が作られている。……最も多く作られた「伊号」は27の艦型が開発され、一艦型当たり僅か4.2隻しか作られていない。……米軍は、現在戦っている戦争が、一大消耗戦であり、勝利を収めるためには、あらゆる兵器を大量に生産し続ける必要があることを的確に認識していた。このため、開発に当たっては、徹底した標準化を迫及し、量産すること、それによって建造期間の短縮と単位コストの切り下げが可能になることを、自動車等の大量生産システムを通じて経験的に熟知していたであろう。……米軍は高度な技術を開発しても、それをインダストリアル・エンジニアリングの発想から、平均的軍人の操作が容易な武器体系に操作化していた。一点豪華で、その操作に名人芸を要した日本軍の志向とは本質的に異なるものであった。また、日本軍の技術体系では、ハードウェアに対してソフトウェアの開発が弱体であった。その結果の現れの一つが情報システムの軽視であった。レイテ海戦が結局日本の四つの艦隊の緊密な策応に失敗し、各個撃破されて大敗を喫したのは、通信機能の低下によって各艦隊と連合艦隊司令部が的確な状況判断を誤ったことが原因の一つになっている。(p304~307)

空気に流されやすい日本人：「大和」以下の艦が直衛機(護衛戦闘機)を持たないで、敵の完全な制空権下で進撃しても、沖縄まで到達することは絶対に不可能であった。これは壮大な自滅作戦という以外にない。

事実、連合艦隊司令部の会議でも参加者の誰もが成功する可能性があるとは考えなかった。これはもはや作戦というべきものではない、理性的判断が情緒的、精神的判断に途を譲ってしまった。軍令部次長の小沢治三郎中将は、この時のことを述懐して、「全般の空気よりして、当時も今日も大和の特攻出撃は当然と思う」と発言している。

この「空気」はノモンハンから沖縄までの主要な作戦の策定、準備、実施の各段階で随所に顔を出している。空気が支配する場所では、あらゆる議論は最後は「空気」によって決定される。もっとも、科学的な数字や情報、合理的な論理に基づく議論が全くなされないという訳ではない。そうではなくて、そうした議論を進める中である種の「空気」が発生するのである。同じく沖縄作戦の策定過程に開かれた台北会議で、八原高級参謀が戦略合理性の高い「第三二軍司令官の意見書」を朗読し、以後沈黙を守ったが、それによって「会議の空気を重苦しいものにした」といわれる。その上、陸軍中央の実務責任者である大本営作戦課長服部大佐は、八原大佐の態度に驚き、具体的に議論する「気分」をそがれたという。ここでも空気、気分が支配し、戦略的判断にかかわる議論が行なわれないうちに終わった。

日本軍は、始めにグランド・デザインや原理があったというよりは、現実から出発し状況ごとに時には場当たりの対応し、それらの結果を積み上げて行く思考方法が得意であった。このような思考方法は、客観的事実の尊重と、その行為の結果のフィードバックと一般化が頻繁に行なわれる限りにおいて、とりわけ不確実な状況下において、極めて有効な筈であった。しかしながら、既に指摘したような参謀本部作戦部における情報軽視や兵站軽視の傾向を見るにつけても、日本軍の平均的スタッフは科学的方法とは無縁の、独特の主観的な積み上げ方式に基づく戦略策定をやってきたといわざるをえない。(p284~285)

兵站を無視した短期決戦志向： 短期決戦志向は補給・兵站の軽視にもつながっている。これも大東亜戦争を一貫して流れる考え方であった。インパール作戦然り、ガダルカナル島然り。燃料、弾薬、食糧などの物資が常に滞りがちであったばかりでなく、パイロットや士官という人的資源も戦争中段以降は急速に不足していた。サマール湾で敵空母群を追撃した栗田艦隊があと一步のところまで追撃を中止したのも、燃料不足を懸念したためといわれる。(p282)

教条的で柔軟性を欠いた思考方法： 例外的な戦略的グランド・デザインの一つといわれる真珠湾攻撃は、航空機がそれまでの戦艦に代わって海上兵力の主力になるということを明確に示すものであった。この奇襲成功の時点で、海軍は従来の大型戦艦同士による艦隊決戦思想、そのための大艦巨砲主義から脱却すべきであったにもかかわらず、伝統的な作戦思想を抜けきれなかった。反対に……戦訓を学び、すばやく航空主兵への転換を行なったのは米軍の方であった。ノモンハンでソ連の戦力を過小評価したのも、インパールで英印軍の後退意図を見誤ったのも、客観的な現実を直視せず、また実行した結果を的確にフィードバックし、戦略の修正を迅速に行なわなかった結果であるといえよう。日本軍が個人ならびに組織に共有されるべき戦闘に対する科学的方法論を欠いていたのに対し、米軍の戦闘展開プロセスは、まさに論理実証主義の展開にほかならなかった。太平洋の海戦において一貫して示されたアメリカの作戦の特徴の一つは、絶えず質と量の上で安全性を確保した上で攻勢に出たことである。数が明らかに優勢になるまでは攻撃を極力避け、物量的に整って初めて攻勢に打って出る。……他方、日本軍のエリートには、概念の創造とその操作化ができた者は殆どいなかった。個々の戦闘における「戦機まさに熟せり」「決死任務を遂行し、聖旨に添うべし」「天佑神助」「神明の加護」「能否を超越し国運を賭して断行すべし」などの抽象的かつ空文虚字の作文には、それらの言葉を具体的方法にまで詰めるという方法論が全く見られない。従って、事実を正確かつ冷静に直視する躰(しっけ)を持たないために、フィクションの世界に身を置いたり、本質に関わりない細かな庶務の仕事に没頭するということが頻繁に起こった。(p286~288) 【これは今でも変わっていません。「全力を挙げて」「誠心誠意」「検討します」等の空疎な修飾文は全く実体のない言葉です。これを聞いて許してしまう方にも問題がありそうです。】

日本軍と米軍の戦略・組織特性比較 (p338)

分類	項目	日本軍	米軍
戦 略	目的	不明確・包括的	明確・具体的
	戦略志向	短期決戦	長期消耗戦
	戦略策定	帰納的(Incremental)	演繹的(Grand Design)
	戦略オプション	狭い(統合戦略の欠如)	広い
	Contingency Plan(不慮の事態への対策)	無し	有り
	技術体系	一点豪華主義	標準化
組 織	構造	集団主義 (人的ネットワーク・プロセス)	構造主義 (システム)
	統合	属人的統合 (人間関係)	システムによる統合 (タスクフォース)
	学習	オープン系 (やりっぱなし。反省なし)	フィードバック系 (結果を検証し、改善する)
	評価	動機・プロセスを重視	結果を重視

[現在の日本の官僚も、東電の幹部も「組織」に書いてある特徴は日本軍と瓜二つです!]

13. 水面下の終戦工作に最後まで携わった高木海軍少将の記録より

「太平洋戦争の現実を熟思して感ぜられることは、戦争指導の最高責任の衝に当たった人々の無為・無策であり、遺志の薄弱であり、感覚の愚鈍さの驚くべきものであったことである。反省を回避し、過去を忘却するならば、何時まで経っても同じ過誤を繰り返す危険がある。勇敢に真実を省み、批判することが、新しい時代の建設に役立つものと考えられるのである」。(「六韜新論」より)

戦う余力が全くなのなっているのに、あくまでも本土決戦論の枠から脱することができない六人の最高戦争指導会議の面々の言動を批判して、「一体、その国家の運命を背負った責任ある人(具体的には上司の米内海軍大臣、他)が、腹と公式の発言が異なっているのかと感じた。会議が自分の腹と違った決定を下したら、どうするつもりなのか。職責がどうの(自分に与えられた職務範囲ではそこまでは出来ない)といわれるが、平時ならばともかく、非常時にはそれでは道は開けないのでないか」。…この指摘は、彼らはお利口な官僚なのであって、自分が与えられた職務権限からははみ出せない、火中の栗を拾う勇気がなく、非常事態を乗り切る突破力が欠如していたと、身近に見た最高責任者たちの不甲斐無さを嘆いている。

14. 歴史を大事にする民族と そうでない民族

左の日本経済新聞の記事は非常に大事な意見を述べています。

そして、これは AHK テキストの歴史篇を通しての世界観と一致しています。

この「歴史局」に相当する大規模な機関は中国にもあり、中国の将来の戦略や選択肢を決める際に重要な役割を果たしていると報道されています。(但し、中国共産党は大量の党資料を未公開としており、研究者が嘆いていますから、他人の歴史は十分に検証するが、自分に都合の悪い歴史資料は公開しない一方向情報制度です)

日本には昔も今も、これに相当する機関が存在しなかったし、国家の戦略決定の基礎になった実績がありません。

太平洋戦争の明暗を分けたミッドウエー海戦の後でも、一切、この種の事実検証や反省会が行われなかったことは、このテキストにも記しました。

ノモンハン大敗の原因を作った辻参謀や服部参謀を太平洋戦争でも要職に就け、同じ性質の過ちを繰り返させています。

私の人生経験から、この事情は現在も全然改善されていないと断言できます。

これまでのことは何でも直ぐに水に流して、めげず挫けず出直しや方向転換ができる日本人の良さの裏側には、このような奥の深い問題点が潜んでいることを忘れないでください。

全寮制のイギリスのグラマースクールでは、将来のエリート層になる少年たちに対して、徹底的に歴史を学ばせていました。

歴史は戦争だけでなく、経済にも文化や文明のありかたにも、人生のあり方にも、非常に参考になります。

貴方も歴史の重要性に開眼することが、どんなに大切なことなのかを十分に理解し、活用してください。

補遺了

約140万人の兵士を動かす米国防総省(ペンタゴン)。ひとつの判断ミスが、多くの人命を奪つことになりかねない。

歴史などを調べ上げ、同じ過ちを繰り返さないようにするためだ。ペンタゴンだけではない。陸、海、空、海兵隊の各軍にも歴史部局がある。

大戦の真つ最中の1943年だった。その教訓を次の戦いに生かすため、歴史家や地図の制作者らによる記録チームを立ち上げたのがきっかけという。

対中政策の誤算、ヒトラー、ムソソリーニと組んだ日独伊三国同盟の締結、米国の出方の読みあやまり、吉田茂政権下の51年、こうした失敗を反省する文書はまとめられた。ところがその後、政府がさらに検

討ちの非難を浴びることになった一件だ。これについては暗号を解読し、タイプに打つのに手間取った駐米大使館のせいにする見方があり、館員の遺族らは異議を唱えていた。そこで外務省が過去の文書を調べ「駐米大使館だけでなく、本省の対応も遅かった」という総括を90年代前半にまとめたという。

それにしても、どうしてこの程度のことにならぬのか。このままでは大戦の検証はとておぼつかない。

「過去の失敗を総括するにはだれがいけなかったのかを特定し、事実上、名指

官は何をよりどころに作戦や戦略を決めるのか。側近の助言やインテリジェンスを頼りにするのは当然としても、もうひとつ、彼らが大切にしている判断材料がある。それは歴史だ。

「歴史局」(Historical Office) 巨大なペンタゴンの建物には、こんな風変わりな看板をかかげた部署がある。過去の軍事行動の失敗例や米軍が関与した国々の

「政策の決定にとつて極めて重要な歴史の情報を軍首脳に提供している」(米陸軍)という。

日本人だけで3000万人以上の死者を出した第2次大戦であることは言うまでもない。70年前の41年12月8日、真珠湾を攻撃し、米国の戦いに突入した。

なぜ、勝ち目のない対米戦に向かったのか。

証を進め、教訓をくみ取る作業をした形跡はない。「日本は先の大戦で国を滅ぼす一歩、手前まで行った。外交も完全に失敗だった。しかし、どこで誤ったのか、政府としてきちんと検証しないままいまに至っ

「過去の失敗を総括するにはだれがいけなかったのかを特定し、事実上、名指



真珠湾の埋もれた教訓

「過去の失敗を総括するにはだれがいけなかったのかを特定し、事実上、名指(編集委員 秋田浩之)